

伊勢物語講義

子三

藻鹽の舎主人

此講義は、北村季吟の伊勢物語拾穂抄、契冲法師の勢語臆断、加茂真淵の伊勢物語古意、藤井高尙の伊勢物語新釋などをもととして、聊愚見を加へたるものなり、

此物語の作者は、在原業平朝臣なりとも、伊勢の御なりともいへど、さだかならず、作者不詳としておくべし、

此物語の名は、伊勢齋宮の事を書けるによりてなりとも、伊勢人はひがことしけりなど、古歌に見えれば、ひがこと物語といふ義ありとも、えせ物語の轉訛ありしともいへり、これらの事は他日別にいふことあるべし、

此物語の本くさか、わり、拾穂抄臆断等は定家卿の校合本によられ、古意は眞字本によられ、新釋は朱雀院の塗籠本によられたり、此講義は、これらの中にて、よしと思ふを、とり用ひたり、

(一)

(二)むのし男ありけり、初冠して、奈良のみやこ、春日の里に、こるよ  
し、て、狩にいきけり、

伊勢物語講義



隠断するよしは、萬葉集に領の字をしるとよめれば、領縁なり、下にも津の國うら  
 らの郡わしやの里にしるよしして住みけりといへり、古意いづれの御時誰々の  
 人てふ事をばさす、たゞ昔ありけむ事を語る書のからひにて、こは昔ある男て  
 ふとあり、さて男は業平朝臣ならぬ業平をいふと心得べし、皆そら言なればなり、  
 初冠とは童の初めて冠するをいふ、此男のそのはじめをいひ出づる故に、いふの  
 み、しるよし、ては、領所あるによりて、鷹狩にまかたるをいへり、いとも上つ代  
 はおさぬ、藤原奈良などの朝より今の京のはじめまで、官位高き人の封戸功封  
 などの外に、所領の事はあらぬ制と見ゆるを、此人は父の傳へなどあるさまに書  
 きなせるか、又承平天曆などの頃に降りては、私せる事もあれば、其頃書きたる書  
 故にもや待らむ、新釋こは昔ある、男春日の里に領所のあるによりて、初冠して男  
 になりて、すなはち鷹狩にゆきたりといふ意、ありけりは、塗本によりて加へつ、  
 古意には、こゝは序の如くなれば、ありけりといふ詞かゝざりけむといはれしは  
 わるし、つぎくには洩らすとも、始に省くべきことかは、いさけり同本に従ふ、○  
 「むかし男ありけり」狩にいさけり、捨穂抄隠断古意等には「むかし男狩にいけり」  
 とあり、今新釋に従ふ、さて古意に皆そら言なりといひて、所領地を咎められたる

はいかに、すでにうら言物語ならば、領地の有無を問ふに及ばじ。

うの里に、いとなまめいたる女、はらからすみけり、あの男あいま  
 見てけり、

隠断なまめくは、遊仙窟に婀娜をなまめくとよめり、媚ありてうるはしき心なり、  
 古意なまめくとは、物のまだ生さだまらで、わかきほ色のさまをいふ、さてわかき  
 人は艶にうつくしければ、さる意にも用ひ、又轉じては色もて媚ふるやうの事に  
 もいへり、こゝはそのわかきうつくしきなり、はらからは、同腹なる兄弟姉妹をい  
 ふ、故に異腹にはいふまじき語なり、其腹の意なり、共をともがらといふに同じ、か  
 いま見は、竹取物語に闇の夜にもこゝかしこよりのぞきかいま見まをひあへり  
 てふに同じく、籬の間よりのぞき見るをいふ、又それを轉しては籬間ならでも、ひ  
 ろかにうかひ見るをば、すべてかいまみるといふなり、新釋はらから住むとは、  
 親なしといはで知らせたる文のたくみなり、ふる里のさびしげなるに、親もなき  
 女はらからの住みたらむは、いとくわはれにて、見る人の心とまるべきさまに  
 書きたるなり、さる女を見てこゝろまをふ、物のあはれ知る人にはありける、笑  
 沖法師岡部の翁など、此心ばへをえ見知られざりしは、いかにや、さてついでに



いはむ物語のみは歌と同じく、物の道理をいへるものにはあらず、よしあしも人の情のうへのさだめにて、あはれになさけしきをよしとし、さもあらぬをあしとしたり、げに三史五經の道々しき教を知りても、なさけのおくれて物のあはれを知らざらむ人は、うはべのみつくりかざりてわろくあるべき。○新釋に親なしといはで知らせたる文のたくみなり云々とどかれたれど、文のおもてにては、さる意ありともおぼえず、たゞし物語のみは歌と同じく物の道理をいへるものにはあらず云々といはれたるはいとよろし。

おもほはず、ふる里にいとばしたなくてありければ、こゝちまどひにけり。

國經抄はしたなくて、はよわきものに強くわたるやうの心をいふ、此故郷のあれたる所にかゝる風流なる女のあるは似合ざるやうなり、拾穂抄はしたあきは、つきなく似合しからぬ意なり、よわきものに強くわたるも似合ざる義なり、古里のあれたるに似合しからず、なまめける女のあれば、思の外にめづらかにて、心のかゝりたるとの義を、こゝちまどひにけりといふなり、臆断おもほえず、おもひかけぬなり、はしたなくて、いなまめいたる人の住むべきさまもあらぬ故郷に、おち

つかぬやうにてあるを、かつはあはれふ心に、いとこゝちのまどふなり、古意はしたあきは、端方せむらなきてふ語を略けるにて、せんすべなき意なり、竹取物語に、みこは立つもはした居るもはしたにて居給へり、枕草子に、はしたなきもの、こと人をよぶに我がどてさし出でたるものまして物とらするをりなせいへるが如し、さて之を轉しては、せんかたなくてわびしき意にも、又はづかしむ心にもいへり、こゝはわびしくてありといはむが如し、よき處によき人のあるはめづらしからず、かゝる故郷におもほえず、よろしき人のわびしげにてあるを見ては、ゆくりなく心にしみておぼゆべきなり、源氏の帯木の巻に、あはれたらむむぐらの門に思の外にらうたげならむ人のとぢられたらむこそ、かぎりなくめづらしくはおぼえて、いかではたかゝりけむと思ふより、たぶへる事なむあやしう心とまるわざなべきといふは、やぶてこゝを書き延べつるありけり、此書にいたゞくだりにのみ書きたるを、彼は悉しきに過ぎたるやうにこそ、このわかちを見得て、古文のよろしきを知るべし、新釋臆断になまめいたる人の住むべきさまにもあらぬ云々といへるはよし、はしたなくは不都合にといふ意なり、古意にわびしくてありといはむが如しと、どかれたるはたがへり。



男着たりける狩衣かひぎのすそをきりて、歌を書きてやる。うの男うの男のぶずりの狩衣をなむ着たりける。

臆断しのぶずりば、陸奥の信夫郡より、むかし草摺りて出せる名物なり、すそをきりてとい、則歌を書くにも、そへてつかはすにもあるべし、古意ふるいしのぶ草もて摺りたる狩衣のすそをきりて書けるは、此歌のよせたる心をしめすなり、いにしへは其歌によせある草木の枝につけ、或は何物にも書きて歌の餘情をなした、こゝにすり衣のすそをきりて書きたりとせるは、記者の心の風流あるわざなり、摺衣は古事記日本紀等にも見え、且萬葉集にまだら衣をすらむとてともよみたれば、物の色をまだらに摺りつけたるのみなり、けむを、延喜式の頃に至りては、若艸摺小松摺、遠山摺などの名さまざま、見ゆるを思ふに、今の京の初つかたより巧に物の形をすることゝなり、けむかし、さればこゝはしのぶ草のかたを葉の色もて摺りたるをいふと見えたり、さて摺衣は御狩或は歌垣等其外にも着用する事男女に限らずといへども、私には着るとなし、延喜の彈正式に、凡摺染成之衣袴者並不得着用、但縁公事所着並婦女衣袴不在禁限云々、されば旅には男も私に着しとおぼしければ、此昔男の私に着してふは物語故か、又此書かきし頃は式も亂れしかば、

時にならひて例をも忘れて書きしにやあらむ、新釋臆断にうへてつかはすにもあるべしといへれど、そへてやるよしは、文のねもてにさらに見えぬをへ言なり、しのぶずりは同書に陸奥の信夫郡より云々といへるすよき、東鑑に信夫毛地摺千端といふこと見えたり、顯昭も陸奥國の信夫郡にもぢずりとて、髪を亂したるやうにすりたるをしのぶずりといふといへり、古意の説は、わろし、

春日野の若紫のすり衣すゐのぶのみだれかぎり知られず

聞疑抄是は序歌なり、しのぶのみだれ限知られずといはむために、春日野の若紫の摺衣といへり、此女をほのかに見てより、わが亂れたる思の限知られずとなり、臆断、春日の里の女なれば、彼野の若紫にたとへて、今着たる狩衣もをりふし紫にすりたれば、やぶて若紫の摺衣とつけ、しのぶずりの名と、亂れ摺りたる紋の數知らぬによせて、しのぶのみだれ限知られずとはよめり、古意紫艸は野に生ふる故に、こゝの野をあげ、且此衣は紫して摺れるを知らせて、さて紫を女にたとへ、摺りたるしのぶの形の亂れたるをもて、我戀の亂にたとへたり、新釋此歌の本は臆断に春日の里の女なれば云々といへるすよき、末はわが思のかぎり知られぬ亂をしのぶずりのみだれたるにそへていへり、



となむおひつきていひやりける、ついでおもしろきこととやおもひけむ。

臆断おひつきてとは俗に只今まらむといふ心を、追付まらむといふ如く、やがての心なり、ついでおもしろきこととやおもひけむは、信夫摺に春日野の若紫とよみて書ける業平の心を、作者のおしはかりて事の次よく、おもしろきこととや思ひけむといへるなり、古意古本に、となむいへりけるとあり、歌をあげて次にかくいふこと下に多し、然るに今の本には、となむおひつきてやりけるとあるは、次の陸奥のてふ歌を右の答歌なりとおもひ誤りたる人の、それを助けむとて詞を加へたるなるべし、新釋おひつきては臆断にいへるが如し、古意の説は、なか／＼にわろし、ついでとは、このついでといふ心なり、○おひつきては臆断の説、あまりに俗語のやうおぼゆ、真字本におひつきての五字無きはよけれど、となむいへりけるにては、獨言のやうにてわろし、或註には、おひつきてと讀み、追續なり、すぐにといふが如しといひ、又おひつきてとかき、老づくにて、およつけと同語なり、といへり、塗籠本には、となむをいつきてやれりけるとあり、なほ考ふべきにこそ、みちのくのこのぶもちずり誰ゆるに亂れろめにし我ならなく

にといふ歌の心はへなり、

拾遺抄といふ歌の心はへなりとは、此融の大臣の歌の心はへをもちて、しのぶのみだれ限知られずと業平のよみ給へると、物語の作者の註せし詞なり、此義につきて定家卿の勸物も、かのみちのくの歌を註して、河原の大臣の歌なりと書き付け給ひて、さて於在中將非幾先達如何とは、此融公の歌の心はへにて、業平のよみ給へるとの詞を答めさせ給ひて、融公は業平にさまでの先達にもあらず、同時の歌を本歌にして其心はへなりといはむと如何となり、たゞ其頃融もみちのくの歌をよみ給ひ、業平も春日野の歌をよみ合せられしなるべしとの意にや、臆断こは古今集戀四題知らずにて、河原左大臣の歌なり、もちずりは戻摺にて、亂れするをいへり、古今には四の句を亂れむと思ふとあり、今の心は誰故に亂れそめし我にはあらず、君故にこそ亂れそめたれとなり、こはしのぶのみだれとよめるは此歌の心なりと作者の本歌に引きて註せるなり、下に紫の色こき時はといふ歌の後に、むさし野の心なるべしと註したるに同じ、古意ついでおもしろきとより心はへまでをつけて心得べし、さてこのみちのくのてふ歌のさま、けふの事に似つかはしきついでありとや思ひて、本歌として春日野てふ歌をばよめりけ



むといふことをかく書きたるなり、新釋ついでおもしろきこと、やといふよりは記者の詞にて、心ばへなりといふ所までつゞけて見るべし、〇記者の註からば「といふ歌の心ばへなり」とさだめいふべきにあらじ、こは後人の書入なるべし、むろし、人は、あくいちハやきみやびをなむしける、

臆断俄なる事にかゝる歌よみたるを、記者のはむる、詞なり、むかし人はといへる中に、今の劣れる心こもれり、下にむかし人はかくすける物思ひをなむしける、今の翁まさになむやといへるは、くらべていひあはせり、いちはやきは、はなはだしき心なり、古意かのみちのくのでふ歌をとりかへて、春日野の所にかなへ、且わが思ひをたどへ、其詞によりて、しのぶすりの衣のするをきりて書けるを、いとくさがつく風流たる事を昔人はしけり、とほめたるを、且此下の條々皆古歌をとりかへて、みやびたる巧みをなせるを、此はじめの條にて、暗に知らせたる詞あり、其條々をよくとき得む時知らるべし、いちはやきは、古へはいづはやきともうぢはやきともいひて、たゞいきは疾くたゞはしきをいへるを、此書の頃に至りては、たゞ物のさとき事のさまにも轉じなしたるなり、ちはやぶる神とはあしき神をいひ、ちはやぶる人とは、たけき人といへるを、今の京となりては、たゞ

神といはむ冠辭とのみいひなせるあり、みやびは、宮風にて都の手ぶりをはじめ、何にても風流なる事をいひ、いやしげある事を、鄙風里風などいふをむかへて知らる、さてぶりの約は、びなれば、のべては、宮ぶり、つゞめては、みやびといふ、神ぶり神びひなぶりひなびの類數ふべからず、さてこゝにては、いどさとき風流なるとりなしよと、記者のみづからほめていへるに、興は侍り、新釋いちはやきみやびとは、こさかしき風流といふ意なり、昨日今日うひかうふりしたる、わかきをのこのことなれば、今の世の人ならば、よろづつゞましく歌よみかくることもえせじを、むかし人はわかくても、かくこさかしきみやびをしけりといふ意にて、はじめにうひかうふりして狩にいきけりといへるに、照し合せて、見む人の心得るやうに、たくみにおもしろく書けるものなるを、昔より人の心づかさりしは、つくりぬしのため、いとくほいなきことなり、さていちはやきといふを、臆断には、はなはだしき心ならむといひ、古意には、さとき心ぞといはれたる、共にひがことなり、〇こさかしきは、利口ふるにて、わるがしき意にも用ふ、ひがこと、いへる新釋の説を、なかくにひがことある、おもふに、いちはやきは、いちはやぶるともいひて、いちは、すぐれてよき意にて、いちもついちじるしななどのいちに同じく、はやきは



早き意なるべし、  
 二二むのし男ありけり、奈良のみやこは離れ、このみやこは、人の家  
 まだ定まらざりける時に、西のみやこに女ありけり、

臆断桓武天皇延暦三年に、奈良の京を長岡にうつさせ給ひ、十三年に長岡より今の京に遷さる、西の京より次第に東の京首尾せし時分となり、まづ首尾したる西の京にありける女となり、業平のはたちばかりの頃にても、五十年に及ぶを、うれまで首尾せざりけるにや、筆に任せたるか、古意桓武天皇延暦三年に平城を離れて、山城の長岡に都を遷され、同じく十三年に、今の平安城に又遷されれば、こゝは長岡の京をいふとすべけれど、長岡には間もなかりしかば、今の京をいふとすべきは、かゝる書にてはよし、さていまだ家々もとののはざるをいふは、遷されて後、ほどなきを知らするなり、かくわざと此京のはじめをいふことは、業平朝臣の歌を全くわけたれど、其人ならぬこと、せむとてあり、此書の心づかひ皆然り、朱雀門より羅城門まで、大道を開かれて、これを朱雀大道といふ、此大道より東の方を東の京といひ、左京又洛陽なり西の方を西の京といふ、右京又長安なり三代實録によるに、業平は陽成天皇元慶四年五十六にて身まかりぬ、其年より逆に數

ふれば、延暦十三年は凡八十七年ばかりにして、朝臣の生れざる三十年前のことなり、さて其頃の皇朝の御いきほひにましませば、五六年の間には、東西の京の家居なりぬべし、かつ此朝臣の通ふほどのことは、十五六歳よりこそあらめ、彼是を合せて思ふに、四十年あまりのたがひあり、かくても朝臣の自記なりといふべきや、たゞ此記者のわざと時世をたがへて、業平の歌を全く出して、業平ならぬやうになせるものなり、故に年月のさだかなる遷都をいひ、かつ遷都ありてほどなき時と見せむとて、人の家まだ定まらざりし時など、書きたり、此條一つにても此文の心は知りぬべし、新釋今の京のはじめのはどのとを、かくとりいでいへるは、古意に業平朝臣の歌を出せる故に、ことさらに其人ならぬさまに、時代をたがへて、かきなしたるなり、どやうにいはれたる、いとくよし、西のみやことしもいへるは、まづ西の京の首尾したる故ありとどける臆断の説の如し、そもく、業平朝臣の歌、こゝに限らず、いと多く見えたれども、こゝは物語のはじめの處ゆゑに、作者の心してかくは書きたるにこそあるらめ、○臆断に同意して、西の京の首尾したる故なり云々といはれたれど、人の家まだ定まらざりける時に、どあるに西の京の首尾したりといひては、前後かなはぬやうおぼゆ、



ろの女世の人にはまされりけり。あたちよりの心なむまさりたりける。

臆断世の人よりは、そのかたちまさり、ろのかたちよりも、なほ心はまされりと、重言をわけてほむるなるべし、古意こゝまづ大むねをかきて、次につばらかに解く文の體なり、心のまされるとは、たとへば空蟬の君のまことを徹す心にはあらで、藤壺の後の姿こゝろ類なきものから、さすがに源氏の君のしひ言には堪へずして、なびくが如きをいふか、なほ記者の心は、此男を眞男と書けるが如く、打返して書けるなるべし、新釋古意にまづおほむねをいひて、次につばらかに解く文の體なりといはれたるるよき、古今集の序文のはじめなども、さやうにて、昔の文にあまた見えたる格なり、臆断に重言をわけてほむるあるべし、といへるはわろし、さて心のまされるとは、おさけ深くても、ものゝあはれ知る心ばへの人よりまされるをいふ、さかける故よしは、まめ男の處にあはせいふべし、かたちのうへにその人とある本はわろし、塗本になきぞよき、ありてはろの女とかさありて、つたなき文なり、○かたちよりは心なむまさりたりける、拾穂抄臆断古意等には、その人かたちよりは心なむまさりたりける」とあり、今新釋に従ふ、さて新釋に、臆断に重言を

わけて云々といへるはわろしといひて、其故を示さざるはいかに、かたちも心も世の人にまされるを、心はことにまさりたりとの意にて、同じ詞を重ねたるには、あらし、さて心のまさるといふにつきては、古意新釋共に、くたくしきとささまなり、たゞおろかならぬをいふなるべし、

ひとりのみにも、あらざりけらし、

臆断ぬしある人あり、古意古本に、獨身爾毛云々と書けるをおもふに、又おもふ人あるを知らせて、心のまさりたるとは、好色心ある反をいふなり、新釋古今和歌集に、おきもせずの歌のはし詞に、やよひのついたちばかり、しのびに物らいひてとある、此しのべるよしは、いかにとも知られぬとも、と住む人のある故にやあらむと、此つくりぬしのおしはかり言して、ひとりのみにもあらざるさうなどはいへるなり、けらしは俗言に、ろうなどいふ心なり、ざるを臆断にも古意にもぬしある女なりと、さだめていはれたるは、たがへり、かたへのおしはかりは、おもひの外にたがふこともあるものをや、

それを、かのみめ男うちものあたらしひて、

拾穂抄ぬしある人に物いひしをかくさむとて、わざと實人といふなり、臆断まめ



男、實なるをどこなり、日本紀に忠誠をまめとよめり、古意それをどは、かのひとり  
 のみにもあらぬにわたれる語なり、まめとは、日本紀に忠誠の二字をよみ、此古本  
 にも、實の字を用ひ、古今集の序にも、色好みにむかへて、まめなる所にいと入る  
 など、皆心の實なるをいへり、さて此男は色好みて、ぬしある女をも好なせざる事  
 の隠りなきを、なかくにまめ男といふは、反をいひたるなり、彼と此男の常の  
 さまをもていふあり、新釋まめ男とは、心のわだくしからぬをのこをいふ、源氏  
 物語に、夕霧の君の雲の鴈の君を、めにもち給ひて、落葉の宮にもかよひ給へど  
 も、まめ人といへるに同じ、古今集の序に、色好みにむかへて、まめなるといへるは  
 重く、こゝなるは、輕し、色好みの中にも、わだあると、まめなることなり、同じ  
 詞もつうひさまによりて、かく輕重のかはりあることなり、心得おくべし、心のわだ  
 くしき男は、女をおもふもせちならず、まめ人なり、かへりて心づくしなる戀をす  
 るものなりける、まして世の人に、まさりて、ものおもひ知る女の心ばへなれば、ま  
 め人は深く心とまると、予ありける、此段に女の心の人にまざるといひ、まめ男と  
 いへる心を古き注釋にもに解きおけるは、いふにもたらぬを、さなき説ともなり、  
 古意に、このふたつは、うらをいひたるなりと解かれしも、こゝにかなはず、こた

み高尚がときわかせるによりて、おきもせずの歌の心を、きは深くせむとて、はし  
 の詞に心を入れてかきける、つくりぬしのしわざは、あらはれつる予かし、○いと  
 はこりがにときしめされたれど、色好みのなかにも、わだなるとまめなることある  
 ことなり云々とは、いとむづかしき説ならずや、すべて古文は、おほらかにいふな  
 らひなるを、いかでさることわりあらむ、拾穂抄を始として、みな實の意とのみ心  
 得られたればこそ、かゝる説も出づるなれ、まめにくらせといふまめは無事での  
 意、まめにはたらけといふまめは、精出しての意にて、なほ早き意などにも用ひた  
 り、これらは皆實の意よりうつれるなるべけれど、こゝなるは此うつれるかたに  
 て、前段のいはやきと同意あるべし、ことにかのといふ詞は、すでに知れたる  
 事を指す詞あるに、いまだ忠實の行爲をし、さればこゝの意、女のひとりのみに  
 もあらざるやうなるを、かのいはやき男はうち寄りて、ものいひたりとなり、  
 かへりきて、いあふおもひけむ、時はやよひのついたち、雨をぼふ  
 るにやりける、

拾穂抄心をわやくにかけたりともいはず、何とかおもひけむ、此歌をやりたり  
 と書くこと、皆用捨の心づかひなるべし、古意かへりきていかにおもひけむは、い



かさまに戀しくやおもひけむとの意か、新釋いか、おもひけむは記者の詞にて、まめ男は言に出で、いみじげにはいはぬものなるに、おきもせずの歌をよみてやりしは、さるやうころありつらめ、女のひとりのみにもあらぬやうに見ゆれば、どやかくおもひ亂れてにやあらむ、いか、おもひけむといふ意にて、此詞は上のくだりにいへること、いふをうけ、下ある歌の心をも深くして、いとおもしろし、古意にはいかさまに戀しくや云々といはれたれど、さやうには聞えぬ詞なり、雨をばふるは、俗言にしよばく、ふるといふに同じく、春雨のさまなり、○いか、おもひけむは、古意新釋兩説を合せ採らばよからむ、すなはちひとりのみにもあらぬやうなれば、どかくおもひ亂れたれど、いかに戀しくやありけむとなり、時はやよひの云々は、春雨の降るはどは、戀ふる心のます時なれば、こゝによくかなへり、おきもせずぬもせで、夜をあかして、春のものとしてながめくら

しつ、  
 閑疑抄此歌前の詞をよく心にもちて心得よとなり、夜はおきもせず、ぬもせぬやうにて明し、ひるは春の物として詠め暮しつといふなり、長雨は詠むるといふ詞に心おのづからこもれり、定家卿戀の歌よまむ時は、凡骨をはなれて、おきもせずの

歌に心をなしてよめと教へられしなり、古今集戀の三に入る、拾遺抄此歌戀の歌と心をつけて見れば、深き戀の心にて、た、おもてばかりは、戀の歌ときこゆる詞なし、これもぬしある女につかはす歌なれば、用心なるべし、詞書のけらしめめ男物がたらひいか、おもひけむどかさし心ばへにて思案すべし、臆断かへりきて其日の暮きどにつかはす心ならば、もるともにこしかたの心づくしを語り、ゆく末を契りなせして、はかなき短夜は、起くともなく、ぬるともなしにわけて、かへりきて、長き日の雨さへをばふるに、ひとりながめて暮しわぶる心なり、古意此歌古今集には逢ひてえ戀ふる篇に入れたり、さればひとたび物いひて後、夜はぬるとも起くるともなく、おもひあかし、晝はつれ、とあがめ暮せるてふを、をりからの春の長雨にて詞をなしつ、今此文にとりても、歌の心はことならず、た、端の詞をいとたふへて、もとのよみ人ならぬさまにせしにて、物語なるべし、さてこれには、かへりきてとあれど、なほ一二日ありて後におくりたるを見むも、あしからず、又直に其明日の夕なせにおくりたるともいふべけれど、さては歌の詞にかかはぬ所も侍り、ながめは、心に物おもひある時、默然として物を久しく打まもりをるをいふ、新釋此歌の心おきもせずぬもせでとは、もの思ひ亂れて、よもすがらぬ



られず、かゝるをりには、起さてもゐられぬものにて、おきもせず、ふしてつぐなく  
 と物おもふをいふ、かくてもわけなば、物にまぎれて、おもひのなぐさみやせむと、  
 曉を待ちあかしては、又をりからうち曇りたる空のけしきに、雨さへ降れば、心も  
 晴れず、しめぐとして、いと物おもひ加はれば、あゝせむかたもなし、かくはれ  
 くしからぬは、春のならひぢやといひて、ながめ暮しつといふ意なり、かうやう  
 に詞をわまた加へて解かざれば、其心のさだかにあらはれ難きは、業平朝臣の歌  
 のふりにて、其意あまりて詞たらぬ故なり、春のものとは、春のあらひととい  
 ふべきを、詞あまりてさはいはれぬ故に、ものとしてといへるなり、ものといふも、  
 ならひといふも、其心は同じことなり、とては、といひての意につかへる例多し、こ  
 のいひては、獨言なり、ながめは、詠に長雨をかねたることもとよりなり、此歌の  
 心詞を昔よりよくとき得たる人なかりき、逆鏡起るでもなし、寝るでもあしに、う  
 つらくとして夜をあかしては、又晝になれば、此頃の空のやうに、長雨は春の物  
 一日ながめて、しんきに思ひて暮すぢや、

(三)むかし男ありけり、けさうしける女のもとに、ひしきもの<sup>④</sup>といふものをやるとて、







問疑抄けさうの懸想と書く、おもひをかくるあり、ひじきもは海草なり、鹿尾菜と  
 書く、是を隠し題に歌のたよりとせしなり、臆断ひじきもをやるは、萬葉集四に、高  
 安王の、つゝめる鮓を、少女におくれる類なり、ひじきものにはとそへむ料におく  
 るなるべし、古意ひじきもは、和名抄に鹿尾菜を比須木毛ヒスギモと記せり、なつかしから  
 ぬものながら、歌の詞をまうけむ料なれば、さてもありぬべし、新釋ひじきもは、今  
 の世にひじきといふものにて、このものをおくるは、歌にひじきものにはとそへ  
 むためたりとやうに、臆断にも古意にもいはれたるは、わろしいか、でさる事のお  
 らむ物おくるにつけてこそ、歌をばよむものなれ、○かくさだまれるものにもあ  
 らざるべし、臆断古意の説よき、  
 おもひあらばむぐらの宿に寝もとなむひじきものには袖をし  
 つとも

拾遺抄此歌は萬葉集に何せむに、玉のうてなもやへむぐらはへらむ宿に二人こ  
 そ寝め此歌の心は、おもふ本意を遂げずしては、玉樓金殿も何せむとの義なれば、  
 此歌にすぶりて、おもひあらば玉のうてなに居ても何せむなれば、むぐらの宿に  
 も寝むとの上の句なり、下の句はさやらのむぐらの宿には、はかくしき敷物も



あらじなれば、引敷物には袖をしてもとよみて、鹿尾菜を隠し題の歌なり、此萬葉の歌につきてよめる五文字を心得れば、よく聞ゆるを、異説には、おもふ人もあらばの心といひ、又おもひなき身にあらばと詞を加へて義をとること、作者の本意に違ふべし、隠し題の歌は戀にも雜にもよみて、たゞ其物の名をよみ隠すをもとゝすることなれば、此歌も鹿尾菜を萬葉の戀の歌にてよみて、何となく后へ懸想をあらはせしにや、臆斷かばかり堪へ難きおもひわらば、玉のうてなもかひなし、むぐら生ひたる宿に敷物なくて、袖をひき敷物にしても、もろともにくる寝めどよめるか、おもひわらばとは、例の業平の心あまりて、詞たらぬなり、萬葉集十一に「玉しける家も何せむ八重むぐらはひたる小屋も妹とし住まば」六帖に「何せむに玉のうてなも八重むぐらはへらむ中に二人こり寝めむぐらおひておれたる宿の戀しきに玉と作れる宿も忘れぬ」新古今集秋上に「たへてやはおもひありともいかゞせむむぐらの宿の秋の夕暮」新千載集に「思ひあれば涙に袖は朽ち果てぬむぐらの宿に何を敷かまし」是等の歌を合せて見るべし、古意すべての意は萬葉に「玉しける家も何せむ八重むぐらおはへる小屋も妹とし居らば」てふをもてよめり、且その贈るひじきをも引敷物に詞をこめたり、君と我相思ふならば、いかあ

るむぐら生ひて、わびしげあらむ宿にも共寝せむ敷かむ物には袖をしつゝもとなり、このおもひあらばてふ詞、少しいひ足らねど、此記者の歌には常の事なり、和泉式部の歌に、月のあかく侍りける夜人の螢を包みてつかはしたりければ、雨降りける日申しつかはしける「おもひわらば今宵のうらはとひてまし見ぬしや月の光なりけむ」てのおもひは、螢をかねて例の火をうへたるにはあれど、すべての心は、われを思ふ心あらばと聞ゆ、さらばこの詞をとりけむ、これによりてもおもへ、新釋此歌の意、けさうしても女のつれなくとやかく物思ひするにうんじて、つらく思ふには、この苦しきれもひのなくば、君がかくつれあくて、ひとり袖をかたしきつゝ、いふせきむぐらの宿にねても堪へられなむを、苦しきれもひのある故に、ひとりねの堪へ難きといふ心なり、此歌の末を諸注に敷物なくて袖をかたしく心にとけるは、ひがことなり、こはせちなる戀のおもひをいひやる歌なるに、敷物のなきやうの事をいふべしやは、いみじき俗意なり、さて袖を敷くを獨寝なりといふは、すべて男女のあひて、うちどけてぬるには、夜の衣もぬぎて、ぬるよしなり、拾遺集戀の歌に「衣だに中にありしはうとかりさあはぬ夜をさへ隔てつるかな」といふ歌を見て知るべし、ひとりぬる夜は、よるの衣を着てぬれば、衣のか



たつかた敷かるゝ故に、衣かたしきといふを、こゝにいさいひ難き故に、かへて袖を敷くといへるが、おもしろき、ひとりまろねのさまなり、萬葉集十五の巻の長歌のとぢめにも、袖かくしきて、ひとりかもねむといへり、おもひわらばこれいなくは、をあらばと誤りたるなり、いづれの本にも、おもひわらばとあるは、はじめになくをあらにうつしたるが、世にひろまりたるなり、などわとくどらと、かなのかたちよく似たり、おもひわらばにては、かなはず、○昔一き思ひのある故に、ひとりねの堪へ難きといふ心なりと、どかれたるのいみじき誤なり、又男女のわひてうちどけてぬるには、夜の衣もぬぎてぬるよしなりといはれたれど、ぬぐとぬがざるとは、人々の随意なり、いかでかさることあらむや、又おもひわらば、おもひあぐはの誤寫なりといはれたれど、古書はみだりにあらたむべきにあらす、此歌の意は、相思ふ心だにあらば、むぐらの宿に袖を敷きてなりとも、寝むとなり、むぐらの宿にては、もとより敷物なぞなかるべければ、敷物には袖をしつゝといへるなり、女を誘ひ出さむとの歌なるべし、

二條の後のまだみかどにも、つかうまつり給はで、たゞ人にておほしましける時のことなり、

藤原作者の註なり、古意は後人の裏書なり、今ある古本にもあれど、後に冊子とせる時、表へ出して書けるものなり、されば古本に、或は行を異にし、或は本文の間に字を闕にして、別ちを見せたり、さて後人の裏書ありといふは、本文はたとひ業平朝臣の歌を擧ぐるも、端書を異にし、また名を出せる人をば、時世官位をさへいどこに書きかへて、必ず其人にあらぬさまに書きたるを、かく定々と後の御名を出せること、此文の旨に大にそむけり、悉しくは次々の條にことわるを待つべし、新釋これは後の人の書ける云々と古意に、いはれたり、後の人の、書きしものと見られしはいとよし、巻物を云々といはれしは、わろし、紫式部日記に、おまへには御さうしつくりいとなませ給ふとて、おけたてはまづむかひさふらひて、いろいろ紙ねりどとのへて、物語の本どもそへつゝ、所々にふみかさくばる、かつはどちあつめしたゝむるをやくにて、あかし暮すどあるを見るべし、いにしへもどち本ありて、かく物語をもうつし書くよしなれば、はじめは巻物なりきと、さだめてはいひ難し、此物語の本を持たる人の、おのが思ふすぢを、かたへに注の如く書き入れおけるを、つぎくうつす人の、おもひたがへて、本文にはつゞけ書けるなるべし、本文とは文のさま、いたく異あり、○此物語は紫式部の頭よりも、なほいと古



きものなるに、其日記の記事のみにて、卷物ならざりきといふこと、うけがたし、  
**(四)むかし東ひがしの五條ごじょうに、大后おほなごの宮おはしましける西にしの對たいに、住む人  
ありけり、**

臆断五條皇太后順子、閑院贈太政大臣冬嗣公の女、仁明天皇の后、文徳天皇の御母、  
清和天皇の御祖母なり、二條の後の御爲には、嫉なる故に、西の對に住み給ふなる  
べし、古意、西の對に住む人は誰なるらむ、實に知り難し、其御姪みま高子たかこ條じょうの二のいと  
わかうて住みたまへるにいへるは、例のおしはかりのみ、文徳實祿嘉祥三年四月  
詔曰、朕親母藤原氏乎皇大夫人、上奉云々同月又曰、皇大夫人移御東五條院云々と見  
えたり、此外にも見ゆ、こは高子のわかうておはしけむを、暗に思はるれど、本文に  
書かざれば、まづは誰とさうてこそあらめ、新釋西の對は皇太后のおはします御  
殿の西むかひにある房やうの處なり、そこに住む人を、誰ともいはぬこそ、此物語  
のふりなれ、ざるを名をさだめてとける注せも、いとわろし、○東の五條は、東の  
京の五條通なり、いにしへ京は右京左京の二にわかれて、左京は東の京ともいへ  
り、ひんひんがしは、ひむかしの音便にて、ひむしともいふは、むを省けるなり、ささいい、  
ささきの音便なり、

それを、ほいにあらで、心ざし深ありける人、ゆきとぶらひける  
を、

臆断はいは本意なり、種に出でをいふほにかよはして註せる人あれど、漢語和  
語混すべからぬことなり、心になふほをならぬを、ほいにはあらでとはいふな  
り、古意ほにはあらで、あらはにあらでなり、さて心ざし深かりけるとつゞけ  
て心得べし、其人をたゞとふらふさまにて、下には深く語らへるをいへり、よりて  
かよひけるなどいはずるなり、ほは草木などの事のみならず、何にもほにあらは  
るゝをいへり、其もとは火の氣ののぼりあらはるゝよりいふ語あり、よりてこゝ  
には、あらはならでの心にて、古本にかくある予よき、今本にほいにはあらでとあ  
るはわろし、ほいはいは本意にて、心に思ふ如くなるを、本意にかなふといひ、心の如く  
あらぬを、本意をしといへば、こゝにはかなはぬ言なり、ざるを俗は實なるを本意  
といひ、實ならぬをば、ほいにはあらぬといふと思ふよ、こゝにざる實と不實とを  
いふべきことかは、古今集の詞書も後人のなほせしなるべし、たはかた古意にた  
がへるは好事のわざなる言どもあまたあり、此文をあしく心得てより、正しき文  
どもをまで、なほしなごしつゝ、あやまること多し、よく此文をとかずはあるべか



ら新釋はいは本意の字音にて、昔の物語ふみにつかへるやう、よき事にもあれ、あしき事にもあれ、もとよりおのがしかせむとおもひいたるすぢを、はいといはいへり、さもあらぬを、はいにはあらでといふあり、ざるを昔の物知り人たち、よき事にのみいふと心得て、拾穂抄には親兄弟に許されぬ事といひ、臆断には心にかなふほどならぬをいふととける、どもに中昔の詞のつかひさまを知らざるひがことなり、物語ふみに女にあへる事、出家したる事などを、はいとげたるよしにいへるにても知るべし、はじめよりおもひいれしすぢを、爲<sup>し</sup>遂<sup>せ</sup>げたる意なるをや、師はこのはいにはあらで聞えずといはれつれど、よく聞えたる事なり、はじめより此女をと思ひいたるにはあらで、何となきことのついでにゆきかよひるめ、さてねんごろに尋ね問ひさすするより語らひつきて、心ざしの深くおれるを、はいにはあらで云々といはいへるなり、どふらふとは、ねんごろに尋ね問ふ意なり、ゆきどふらふ人心ざし深かりけるを、塗本に従ふ、真本のはいにはあらでは、伊の字の落ちたるなり、はいにはあらでといふ詞はなし、古意の説わるし、○此處の本文、古意には、はいにはあらで、新釋には、それをはいにはあらでゆきどふらふ人こころざし深かりけるを、とあり、今しばらく、拾穂抄臆断等に從ふ、古意の「はいにはあらで」あつか

しき詞とおぼえず、新釋には、はじめよりおもひいたるにはあらで、後に心ざしの深くなれるを、はいにはあらで云々といはいへるなりと、どかれたれど、ざる意として、あまりに詞たらぬやうなり、おもふに、こは前段の二條の後云々と同じく、後人の書入なるべし、又新釋に拾穂抄には親兄弟云々といはれたれど、かの抄は愚見抄を引たるにて、みづからは、いづれともいはれざりき、  
むつきの十日ばかりに、外に隠れにけり、

臆断しのびくにかよふを、それ然るべからずとて、外へ移さるゝなり、又の年む月に去年を戀ひてとあれば、此十日ばかりといふそのやめてさきにかよはれけるなるべし、古今のことば書には、十日あまりになむ外へ隠れにけりとあり、古意外に隠れにけりとはい、このみろか事をはかりて、男に知られじとするなり、さらずは外に移れりといふべし、新釋上のくだりに、心ざし深かりけるをといふを、のてにをはを味ふべし、さばかり思ふ男をすて、かゝる事と、ふみしても告げず、外に隠れける、俄なる事故なるべし、もとより女の身を心どもせぬ人やりの事、あらむとぞおしはからるゝ、次の文にあり處は聞けとあるは、外へ移りて後は、ふみしてかうくと告げおてせたるならむ、古意に女の心と隠れたるやうにどか



れたるはわろし、此段は心ある男のあはれに深くおもひそめたるさまなれば、さやうに心あさき女にはあらじ、隠るとは男の目に見え知られぬをいふ、月の雲隠るといふに同じ、月も心と隠るゝにはあらす、○此處の本文、拾穂抄臆断等には、ひ月の十日ばかりのほごにどあり、今古意新釋に従ふ、むつきは正月のことにて、親族朋友あひむつふ月なれば、睦月といひしを、はぶきてむつきといへるなり、加茂翁は、もどつき(元月)の約にて、日の初を元つ日といふが如しといはれたれど、元旦旦ころあれ、元月といふこと、いまだ聞かず、

あり處は聞けど、人のゆき通ふべき處にもあらざりければ、なほ憂しとおもひつゝなむありける、

愚見抄たやすくゆきかふべき處にもあらぬは、親たちの家などをいふにや、昔聞抄おほかたもかよひ難き人なるに、あまつさへ外にかくれて、なほうしとなり、つといへる詞にて、ほごを経たる心あり、おもひくゝて月日のうつりたる心なり、されば又の年の正月と次の詞にかけり、古意ひとを古本に他の字を書きて、他人のゆくべからぬ處を知らせたり、なほ憂しとは、はじめゆくへも知らず隠れたる時、いとうしとおもひつゝ、在處を聞きつけてはよろこぶべきを、さてしもゆき

通ふまじき處故に、まだうしとおもひつゝ、月日を経るとあり、新釋なほり、俗言にやはりといふに同じ、女のゆくへ知られずして、うしとおもひをりしに、あり處をきゝていよるこぶべきを、さてもゆきかよはれぬば、やはりうしとおもふ意なり、なほくゝうしといふ意にとけるはわろし、さておもひつゝなむありけるといふに、月日經たる意見えたり、

又の年の正月に、梅の花さありに、去年を戀ひて、往きて、立ちて見、居て見、見れど、去年に似るべくもあらす、

惟清抄みの字やすめ詞あり、ふりみふらずみと同じ、關疑抄たち居するまも去年に似ぬなり、さればたちてみるのみ、見の字にもすべし、臆断梅の花さかりは、世上の梅のさかりなるにもよほされて、せめてはうのありし處をだに、ゆきて見むとも思ひ立ちてゆくに、よろづありしにも似ず、立ちてみ居てみのみは、見の字なり、下にとみかうみ見けれど、いへる、これに同じ、たゞ目にて見るのみをいふにもあらず、ことわざにせんかたなき時のしわざを、立ちて見たり居て見たりといふ、また立ちても居ても居られぬといふが如し、古今詞書に、又の年の春梅の花さかりに、月のおもしろかりける夜、去年をこひてどあり、春は昔のと歌にい



ひ立ちて見居て見といふうちに、かしこにも梅あるべし、古意ありつる次の年の正月に其男の家の庭の梅のさかりに咲きたるを見て、去年かの西の對にありし事をおもひ出で、ゆくなり、かく古本にある予よろしきを、今本にはこゝに去年を戀ひてとあり、こは下にあるべき語なるを、亂れて處のたがひたるものなり、古本はこゝに、こ予をおもひ出でとといひ、下にこ予を戀ひてとあるぞ、語の次序もことわりもあきらかなる、古本に立而見出而雖見とあるは、西の對に往きて見るに、去年にかはれるけしきなるをいふかりて、立ちて見るにあらぬさまなれば、又庭などに出で、見れど、なほ去年に似ざるとおもひて、此男のいふかるさまを見るが如くに書きたるなり、出でとどは庭の梅によりて書けるならむ、今本には立ちて見居て見見れどとあり、かくてもことわりなきには侍らねど、此時のさまを書きうつせし如に、古本の文こそ意深く侍れ、今本の文は立ちて見居て見の下にて、いひ切るやうにて見れどと讀むべし、下の條にこ見かう見見れどとあるに同じさまなり、これによりて出で、見ればとはわやまり予とおもひて、後人のさかしらになはしたるなるべし、出で、見ればといふ處の意まで心をやりておもひ得る人はあらねばなり、今本の或説に、たちてみるてみの二つのみをば、ふりみふ

らずみのみの如く助辭と心得べしといふはわやまりなり、たちてとてにをはをおきて其下にみの助辭をおく例なし、さらばたちみみとこそいはれ、こゝは見を三つまでいひて、ことわりをなす語例なるをや、新釋梅の花盛としもいへるは、歌に春や昔の春ならぬとある春のもじのためなり、又陌頭楊柳の色を見て女の夫を戀ふるよしに、から歌につくれるやうに、梅柳の春の色香には、戀の心のもよほさるゝ故にもあるべし、西の對にゆくは、臆斷にせめてありし處をだにゆきて見むとおもひたちてゆくなりといへるが如し、たちて見むて見は、たちつゝつして見るなり、おもひ出で、かの西の對に塗本真本などにかくあるぞよき、さて真本にまへの梅のさかりなるに、又たちて見出で、見れど、あるは、文つたなくなりて、いみじうわろきを、古意にはいとよしとていはれたることいも、さらにうけられず、かの大人よ、など文のよしあしのけぢめを、むげに見知られざりけむ、○此處の本文、古意にはまへの梅のさかりなるにこそをおもひ出で、かの西の對にいきてたちてみ出で、見れど、新釋には梅のさかりなるにこそを思ひ出で、かの西の對にいきてたちて見居て見みれどとあり、今拾穂抄臆斷等に従ふ、かの西の對など、なきかた簡潔にて古文のさまなり、



うち泣きてあばらなる板敷に、月のあたふくまでふせりて、去年をれもひ出でよめる。

問疑抄あれたる体なり、あながちあれずとも、主人のなければ、あれたるやうにおぼえ侍るにや、月のかたふくまでといへるは、名残をおもふなり、脛断月のかたふくまでは、下に夜のほのく、とわくるに、とあれば、十五六日の夜なるべし、以上古今集戀五に今の歌を載する詞書相似たり、古意あばらなるとは、こゝに内に住む人のなきをいふのみ、故に其意を知らせて、古本に亭の字を書きつゝ、さてさる處に月のかたふくまで、去年を戀ひ慕ひつゝ、ながめ居たらむさまを、よく書きとりしかな、今本にこゝにおもひ出でてとあるは、誤なること右にいふが如し、思ひ出でむは、上の男の家の庭の梅の處にこそあらめ、古本のまことあるをおもへ、あばらを古本に亭と書きたるは、和名抄に亭はあばら屋とよみて、四壁なきをいふなれど、下にあばらなるくらを、亭有倉と書きたるは、内に物なき意に用ひたり、さるは此文にても内のむなしき心にて、こゝは人の住まぬをいふこと知るべし、あばらといへば、あれたることのみと思ふは、わろし、此西の對は、あらずまじき處なるをおもへ、新釋こははしつかたの板じきにて、戸障子なせたてめぐらさぬを、あばらとはいへるなり、ふせりて月見るにたよりあり。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

拾遺抄此歌詞書に、去年に似るべくもあらずとあるに心をつくべし、全体女の外に隠れて、こゝにあらで、去年に似ぬなげきをよめり、歌の心は、かく去年に似ぬは、月が昔の月ならぬか、春が昔の春ならぬか、我身ひとつは昔の身にて變らざるに、去年に變りたるはいかにと思ふ心なり、女の外に隠れたれば、去年に似ぬこと勿論ながら、處は同じ西の對の、來て見る心の去年に似ぬにつけて、かやうに變るまじき月春なを疑ひて、月やあらぬ春や昔の春ならぬとよめる所、おはれなる餘情深くこもり侍るにや、我身は我と知りて、もとの身なるに、月春なをも變るべきにはあらぬと、こゝは外物なれば、かく疑へるおるべし、此歌の肝心の餘情は、我身ひとつはといふは、の字にこもるべし、はの字に心をつけずは、業平の本意にはたがふべし、脛断よろづ去年に似るべくもあらずおぼゆるまゝに、さて、は月や去年の月にあらぬとおもへば、去年見しまゝのねぼろ月夜、春や去年の春ならぬとおもへば、それかほらず、たゞ我身ひとつは、なほうしとおもひつゝ、ありしまゝのもの、どの身にしてとよめるにや、又我身ひとつはなほうしと思ひつゝ、ありしまゝの



身にて、月やはおもしろかりし去年の月ならぬ、春やおもしろかりし去年の春  
 さらぬ、梅の花さかり、おぼろ月夜さながらありしまゝにて、去年に似るべくもあ  
 らぬもの故、何ぞやと深くとがめてよめるにや、これも心のあまれる歌と見わた  
 り、たゞ業平の其時の心になりて見侍るべし、下句を或説に我ももとの身にては  
 なきかと思へば、我身はもとの身にてあるよとよめるよしにあれど、ひとつはど  
 いへるところ然らず、よく心をつくべし、古意月もかつ見ながら昔の月にあらぬ  
 かとおぼぬ、梅もかつ見ながら去年見し春の花にはあらざるかとおもはるゝ故  
 に、立ちて見出で、見よく見れば、すべて去年に似ぬなり、さらば我身はいかにど  
 おもひめぐらすに、我身ばかりはもとの身のまゝにて、こゝに來てありといふの  
 みなり、かつ我身ひとつはのはは、去年に似ずと思ふ月と花とにむかへて、身のみ  
 かはらぬをわかつてにをはなり、さていかに月花のけしきの變れるやと尋ぬる  
 に、かの思ふ人のこゝにあらで、物かなしき情こころより、しか見ゆるあり、歌はをさなか  
 れといふ古人の教はこれなり、をさなきはは物を深くも思ひたせらで、いひも  
 おもひもす、老おきなすけても心の切に悲しくも苦しくもある時は、ゆくりなくおもひ  
 まどふことあり、うのまどへるまゝに歌をよむは、切なる時の限りあれば、後にど

なるにもあはれに身にしむこゝちすめり、後の人の歌に、此情を忘れて、まのあ  
 たりあることわりめきたる事をのみよむ故に、いにしへ人に及び難きなり、月や  
 春やの二のやは疑のやなり、あらぬはあらざるなり、春ならぬは春にあらぬのに  
 あをつめて、なといへるにて、同じくあらぬなり、さてあらぬは、古今に鶯の鳴か  
 ぬ限いあらじと思ふ、其外あらずもある、かかどよみし類、皆同じく非の字の意  
 なり、或説にこのやをやはのてにはに思ひ誤りつれば、下の我身ひとつはのはを  
 心得られぬによりて、このははすて、見よなといふは、いと誤れり、右の詞に去年  
 に似るべくもあらぬといふを此歌にかけて、やを疑のやと見る時は、いとやすく  
 心得られ、かつ古歌は見あたる所をいひて、何故にてあるてふ事を知らぬ顔によ  
 めり、其何故ぞてふ事は、はし書を合せ見て外より知らるゝ事なり、これらをよく  
 心得ぬ故に、とき誤る人多し、かゝれば餘情多くて見るに感の出で來るあり、後世  
 は詞のみならず、心をも皆ことわる故に、詞多くありて、姿もしらべも、いやしげに  
 かり侍るなり、新釋此歌の解、師説に、まづ二つのやもじはやはてふ心にて、月も春  
 も去年に變らざるよしなり、さて一首の意は、月やは昔の月にあらぬ、月も昔のま  
 月の月なり、春やは昔の春にあらざる、春も昔のまゝの春なり、然るにたゞ我身ひ



とつのみは、もとの昔のまゝの身ながら、昔のやうにもあらぬことよとよめるなり、昔とは思ふ人にあひ見たりしはどなり、もとの身といふも、其時のまゝの身といふことなり、さて身にしてといふは、身ながらの意にて、かくとぢめたる所に、昔のやうにもあらぬことよといふ意を含めたるものあり、にしてといへる語のいきはひ、上句に月も春も昔のまゝなるにといへるとあひ照して、おのづから含めたる意は聞ゆるなりといはれき、これにてよく聞えたり。

とよみて、夜のほのくどあくるに泣くく歸りにけり。

臆断其人故に處を慕ひて、夜深くも歸らぬ心、尤あはれなり、萬葉に體字を、ほのかとも、ほのともよみて、ほのくは分明あらぬなり、古意こはあはれなるさまをいふのみ、新釋昔のなごりを慕ひて、歸りかねたるに、あぐれば人目をおもひて、泣くく歸るなり、いとくあはれにかきたり。

(五)むかし男ありけり、東の五條わたりに、いとしのびて往きけり、みそあなる處なれば、門よりもえ入らで、わらはへのふみあけたる、ついひちのくづれよりあよひけり。

尙聞抄前の段と同じく二條の後の事なり、臆断此段は右の段よりも先の事あり。

次の段は又これより先あり、ついひちは、又ついがきともいふ、つきひちつきひきなり、きをいにかよはず、常の事なり、土をひちとよめり、土方といふ氏を、これあり、土をもてつきたる垣あれば、つい垣ともついひちともいふなり、世に木竹にてゆへるをのみ、かきといふやうにならへり、もとはしからぬことなり、されば古今に垣のくづれよりと書けるも、ついひちのくづれに同じ、古意密なる處なれば、童等のふみあけたると、隔て、句つこゝろくなり、古今集にはたゞ垣のくづれよりとあるをわらはへのふみあけたるといひて、いと人少なに守る人もおろろげなるを知らせたり、新釋みろかなる處といひ、みそかにかよふ處といふ意あり、俗言に表はれぬ處なればといふに同じ、古意の説はわろし、さて昔のついひちは今のついひちのやうに、かたくつきかため、瓦ふきたるものならぬば、くづれやすきなり、和泉式部物語に、四月十日あまりにもなりぬれば、木のしたくらかり、もていていしのかたをなむれば、ついひちの上の草の青やかなるもといひ、大鏡五の巻に、なでしこの種をついひちの上にまかせ給へりければ、おもひかけず四方にいろくくに唐錦をひきかけたるやうに咲きたりしなどをといへるにて、昔のついひちのさまを知るべし、○みろかなる處は、ひそかに住む處なり、みそかにかよふ處といひては、



男がひそかに通ふ爲に設けたるやうに聞えてわろし、みそかは、ひろかといふに同じ。ひみ同列の通音なり。

人しげくもあらねど、たびかさなりければ、  
新釋ついでひぢのくづれたるをさておき、わらはべのふみわくるなど、おとるへたる家の人目まれあるさまなれば、人しげくもあらぬといふ詞よくかなへり、あるじきよつつけて、うのあよひ路に、夜毎に人をすゑて、まもらせければ、あゝの男、往けども、えあはで、かへりけり、さてよめる、

拾穂抄いけどもえあはでは、いけどもく、と心をつけて見るべし、さまざまとかくれてしのび入らむとすれども、心なり、古今集此歌の詞書に、いきければえあはでのみかへりてとあるも、たびく通ふ心あり、臆断あると、五條の後なり、古意いとも世におとるへたるあるじにて、垣のくづれをしも、えつくろはず、うちよろばへる人をや伏せつらむ、かくてもかの宮といはひや、且今本に人をすゑてとあれど、古今集の古本に伏せてとあるが、こゝにはよき新釋拾穂抄にいけどもく云々といへる、此考はじめのはどはよし、とかくして云々といへるは、文のおもてに見えぬ、つけろへ言なり、このいけどもは、夜毎に人をすゑてといふかに照し

合せて見るべし、例の如く往きたるに、守る人あれば、あやしとおもひて歸り、又いけどもく、毎夜人をすゑて守らせければ、えあはでといふ意なり、古今集の歌に、梅が枝に來居る、鶯春かけて鳴けども、いまだ雪は降りつゝといへるも、なげどもく、の意にて、同じ格なり、○夜毎に人をすゑて古意には古今集によりて「夜毎に人を伏せて」とあらためられたれど、かの集は撰者の筆加へて出されたるもの多ければ、證とし難し、

人知れぬわが、かよひ路の關守はよひく、毎にうちも寝ななむ  
拾穂抄人知れぬわが、かよひ路とはかのわらはべのふみあけたるついでひぢのくづれなり、或説にあるじきよつつけたれば、人知れぬかよひ路といふべからず、我身の數ならぬ事をいへる五文字なり云々、又云逢坂白河の關なとの如く、人の知りたる關ならねばなぞいへり、皆非なり、たゞ業平の心に人に知られじとおもふかよひ路なれば、かくよめるなり、又宵々毎にうちも寝ななむといへるに、つよくわびていへる所あり、さまざまとかくしてしのび入らむとすれど、かなはねば、さては此關守の寝ぬかぎりは、かなふべからずと歎く心より、うちも寝ななむと願へる所、深切にあはれなり、此歌の深さあはれをいはむとて、次の詞にも、あるじきよつ



けて、云々と書けり、古意たいおもふ心のまゝにいひたるが、切なる時のさま知られて、實に古意あり、これはたをさなきおおもふ一すぢ心に侍り、新釋人知れぬは、人に知られぬといふべきを、つめていへる歌詞あり、古今集の歌に「人知れぬおもひやなすとあしかきのまぢかけれどもあふよしのさき」人知れぬおもひを常にするがなるふじの山こそ我身なりけれ」人知れぬおもひのみこそわびしけれわがなげきをばわれのみぞ知る」とあるを見わたして知るべし、人に知られぬといふ意なり、關守はまもる人をたとへていふ、なむは願ふ意なり、一首の意は、人に知られぬ我通路あれば、關守の寝なば、外にとがむべき人なし、此關守はよひく毎にうちも寝よかし、さあらばかよひて逢はむものをとといへるなり、拾穂抄に業平の心に人に知られじとおもふかよひ路あれば、かくよめりととさたるは、人知れぬといふ詞にも一首の意にも、さらにかなはず、臆斷古意には此歌の説なし、さて此かよひ路は今あるじの知りて人をすゑて守らすれば、人に知られぬといはれぬ道理なりと、昔より人の疑ひて歌の意をとさ得ざりしなり、この道理にたがひたることいふ、おもふ心のせちなる時のしわざにて、あはれ深かりける、すべて歌は深き情をいふものにて、ことわりにたがひて、をさなきこといふ、よ

き、古人の歌はをさなくよめと、教へられしも此意なるべし、

とよめりけれ、いといたう心やみけり、あるじ許してけり、

臆斷此歌をさして二條の後の心やましく歎き給ふを見て、順子のあはれみて、またく、かよふを知らぬよしにておかせ給ふなるべし、心やみの清正集の「おぼつかちくもれるうらの色なれば心やましきよはにもあるかち」とあり、古意此歌をさして女のいといたく心やめるによりて、あるじ許してかよはせしといふなり、新釋うちも寝なむのわび歌を、しのびたる人づてに娘のきよて、あはれにいとほしくおもふあまりに、關守の事をなさけなしと、おろかにもうちゑんじたるさまの心苦しさに、あるじの許したるなり、あるじも娘も物のあはれ知りて、なさけ深し、此心ばへぞ此物語のおほむねなりける、○此處の本文、新釋には「とよみけるをさして、いといたうゑんじけり、あるじ許してけり」とあり、今拾穂抄臆斷古意等に從ふ、

二條の後にしのびて参りけるを、世のきこえありければ、兄たち  
の守らせ給ひけるとぞ、

臆斷抄堀河大臣基經公、大納言國經寺の事なるべし、臆斷作者の註なり、以上二



段は清和天皇の御代となりて、まだ初の事なるべし、古意こはすでにいへる如く、後人のうら書なり、新釋これは後の人のかきそへたるものにて、本文にはあらず、  
 (六)むかし男ありけり、女のえうまじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、あらうじてぬすみ出でて、いと暗きに、きけり、

拾穂抄えうまじかりけるは、我物としがたきなり、おくに五條わたりなりける女をえ得ずとあるが如し、よばひは、いひかよふことなり、臆断えうまじかりけるは、えもらまじきにて、共に得の字なり、よばひは萬葉に「結婚」と書けり、源氏玉かつらに「けさう人は世にかくれたるをこそ、よばひといひけれ」とあり、からうじて、辛勞してなり、古意得べきやうあき女を、年経ていかでとうかひありきたるに、やうくにして女も心合せたる故に、ぬすみ出でて將て行くなり、よばひは古本に夜這と書けるが如し、竹取物語に「夜はやすきいもぬす、闇の夜にも穴をくぐりかいま見まよひあへり、かゝる時よりなむよばひといひける」とあり、新釋女のえあふまじかりけるとは、女のかたに故ありて、此男には更にわひがたきよしあり、女のとてにをはと、えといへるを心と、いめて見るべし、年を経てよばひわたるといふ、よそながら女のもとに、年経て絶えずゆき通ひて、そのめし使ふ人などによりて、とかくいひわたるをいふなるべし、よばひは、夜にかくれてはひわたるをいふふもとにて、すべて戀する人の女のもとにゆくをいふ、わたりけるをのを、俗言にがといふ意なり、からうじては、俗言にやうくとしてといふ意、女の心合せてとは、かみに女のえあふまじと書けるを思ふに、いじめより此男をいとひてにはあらず、深き故ありて、とてもわひがたければ、つれなくいらへて過ぎぬれど、年経ていふがいとほしくて、今の身をすてゝあひなむと、女の心合せて、かくてはあひがたし、もろともにとかたに行かむとて、しのび出づるかまへして、ぬすみ出でらるゝをいふ、いと暗きにといへるは、やみの夜はしのび出づるにたよりよければなり、おてゆくは、俗言につれてゆくといふ意なり、○此處の本文、古意はむかし男ありけり、女のえうまじかりけるを、年を経てよばひわたりけるに、からうじて女心あはせて、ぬすみ出でて、いとくらきにゐて、いきけり、新釋にはむかし男ありけり、女のえあふまじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて女心あはせて、ぬすみ出で、いと暗きにゆきけり」とあり、今拾穂抄臆断等に從ふ、女の心あはせてなど、なきかた簡潔にて古文の体なり、えうまじは、拾穂抄臆断等にいへるが如く、得難き意なり、よばひは新釋にすべて戀する人の女の

によりて、とかくいひわたるをいふなるべし、よばひは、夜にかくれてはひわたるをいふふもとにて、すべて戀する人の女のもとにゆくをいふ、わたりけるをのを、俗言にがといふ意なり、からうじては、俗言にやうくとしてといふ意、女の心合せてとは、かみに女のえあふまじと書けるを思ふに、いじめより此男をいとひてにはあらず、深き故ありて、とてもわひがたければ、つれなくいらへて過ぎぬれど、年経ていふがいとほしくて、今の身をすてゝあひなむと、女の心合せて、かくてはあひがたし、もろともにとかたに行かむとて、しのび出づるかまへして、ぬすみ出でらるゝをいふ、いと暗きにといへるは、やみの夜はしのび出づるにたよりよければなり、おてゆくは、俗言につれてゆくといふ意なり、○此處の本文、古意はむかし男ありけり、女のえうまじかりけるを、年を経てよばひわたりけるに、からうじて女心あはせて、ぬすみ出でて、いとくらきにゐて、いきけり、新釋にはむかし男ありけり、女のえあふまじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて女心あはせて、ぬすみ出で、いと暗きにゆきけり」とあり、今拾穂抄臆断等に從ふ、女の心あはせてなど、なきかた簡潔にて古文の体なり、えうまじは、拾穂抄臆断等にいへるが如く、得難き意なり、よばひは新釋にすべて戀する人の女の



もとにゆくをいふとどかれたれど、大和物語に「故式部卿の宮を、かつらの皇女せ  
ちによびひ給うけれど、おはしまささりける時どあれば、戀ひ慕ひてよびいざな  
ふにもいふなり、

あくた川といふ川を、おていきければ、草の上におきたりける露  
を、かれは何ぞどなむ男に問ひける、

闕疑抄あくた川、作り物語なれば、禁中の芥流す川などといふ義もあれど、それ  
も及ばず、たいあくた川にて置くべし、かれは何ぞは、夜深くかゝる道おと見給  
つることなければ、露を何ぞと問ひ給へるなり、古意あくた川は攝津國島下郡に  
阿久刀神社あり、此處の河をいひつらむ、かれは何ぞ云々、いかなる人か露を知ら  
ざらむ、又間に露は見えざるを、かく書けるは、いとも里ばあれたる川邊を、闇の夜  
深きに行くが、いと物おそろしきに、雷の光のをちこちの露にきらめくを、物の  
目なぞのにらまへるさまにおぼえて問ふ心あり、はた次の人といはむ本あり、古  
人の文のさまをおもふべし、新釋川を往くとは、河にそひてゆくをいへり、しか  
いふは、水のはどりは、草の露深ければなり、其深き露の闇夜の星の光に、さら〜と  
見えたるを、白玉か何ぞと男に問ふよしなるを、おくの歌に白玉かどある故に、こ

には省きて書かぬ文のたくみなり、すべて昔は歌にいへると同じやうあるこ  
とをば、はしの詞には書かざりき、此事はおのれ早うさき草といふ書に例を引き  
出でていへり、こゝに合せ見るべし、さて露を白玉かと問ふは、うち見たる時にふ  
と思へる情にて、櫻の花を雲か雪かと思ふに同じ、これ此物語の雅情なり、古意に  
いかなる人か露を知らざらむといはれたるは、俗意なり、また雷のひかりの露に  
きらめくが、おのの目のにらめるさまおぼえて問ふ意なり、とどかれたるは、いふ  
にも足らぬひがごとく、さて又秋成がよしやあしやといふ書に、問ひけるをの  
下、何とか詞の二句ばかりおちたるならむ、かくては文章と、のはすといへるは  
たがへり、こゝはしか〜と問ひけるを、ゆくさきはいと遠く、夜もふけにければ、  
急ぐ心に答もえせず、そのうへ神あり雨ふれば、鬼ある處とも知らで、あばらなる  
倉のありけるに云々といふ意なり、夜もふけにければといふ詞の下に、こめたる  
心は、問ひけるをといふを、のてにをはにて知られたり、かくいひ殘したる詞へか  
ゝるてにをはは、昔の文にあまたあることあるを、さばかりさかしがりても、え知  
らざりけり、○此處の本文、古意と新釋とは、あくた川といふ川をいきければ、草  
の上におきたりける露を、かれは何ぞどなむ男に問ひけるを、とあり、今拾穂抄臆



斷等に從ふ、新釋に夜もふけにければといふ詞の下に答をこめたるやうにいはれたるはわろし、夜もふけにければ、あばらなるくらに云々とつゞくにて、答の詞は「何ぞとまひ男に問ひける」の下にこそ省きたるなれ、そはしかいはすとも、次の「ゆくさき遠く云々」といへるにて、急ぐ心に答もえせざるさま、いとよく知られたればなり。

ゆくさき遠く、夜もふけにければ、鬼ある處とも知らで、かみさへいといみおろ鳴り、雨もいたう降りければ、

尙聞抄鬼は女をとりかへしたる人を鬼といへり、末の詞にも見ゆ、断夜に深くゆくべきはどの多ければ、答へずして急ぎてさし過ぐるなり、鬼ある處云々、時といひ處といひ、物すさまじきさまなり、清少納言にかきくらし雨降りて神もおどろくしうなりたれば、物をおぼえず、たゞおろしにおろすと見えたり、古意心さしてゆくさきも遠きに夜さへ更けて、せむすべなければあり、この文は夜も更けにければあばらある倉に女を云々とつゞく意あり、さてるの間のさま、わびしき事をあつめていふに、いづれの詞よりも倉に云々とつゞくべく書けるは、いふべき詞の多き時の一の文例なり、いみじうは何にてもわびしき事には、心に

いみおそるゝ故に、いみじき大事、ゆゑしき事などいふあり、轉じては甚しく嚴しくなごいはむが如し、新釋鬼ある處とも知らで、あばらなる倉のありけるにとつゞく意なり、次の詞も同じくあばらなるといふ處へかゝれり、一の文法なり、かみは雷の事、いみじうは物のすぐれて甚しきをいふ詞なり、さて鬼といふものは中昔までは、をりく出で、人をとりくひなごもしけり、仁和三年八月十七日の夜、武徳殿の東の松原に鬼の出でて女をとりくひて、手足のかぎり残りといふこと三代實録に見えたり、古意に鬼ある處とは、狸めくものゝ住めるあらむといはれしはあたらす、鬼一口にくひてけりといひ、あてこし女なしといへるを見れば、女の身鬼にくひ盡されたるなり、狐狸のたぐひのわざならむやは、今昔物語には古寫本なり今の世にもてはやす印昔業平の妻被食鬼之話とあるは、此段の事本は今昔物語には此一條もれてなしなるに、かの昔には女の頭のかぎり衣とばかり残りたりといひて、それよりなむ此倉は人とり倉とは知りけるといへり、又かみなり光りつるは、まことの雷にはあらで、倉に住みける鬼のしけるにやあらむといへり、鬼はあやしきわざをなすものなれば、こゝにとめてくはむとてしたるにやありけむ、男をくはざりしは、弓矢太刀など具したる故なり、鬼のくはしき事は、松の落葉といふ書にかきお



きたれば、こゝには省きつ、〇ゆくさき遠く拾穂抄臆断等には、ゆくさきおほく新  
 釋には、ゆくさきはいと遠くとあり、今古意に従ふ、さて鬼の事は宵聞抄の説より  
 きとりかへしたる人を鬼といひ、かみ鳴り雨降るまど、いどものすさまに書  
 きたるなり、いかで鬼なせ世にゐるべき、  
 あばらなるくらに、女をば奥におし入れて、男弓やなぐひを貢ひ  
 て、戸口に居り、

宵聞抄あばらなるくらは、いつくにも人なきやうなる處にや、座の字をくらと  
 もよめり、臆断くらは座の字をも註せることあり、あばらなる座といふことも、其  
 座の奥くちといふ事心得難ければ、たゞ庫藏倉廩等の字にて、物をおくくらなり、  
 下にも女をくらにこめてしをり給ふとあり、くらのあばらなるを道に見つけて、  
 しばし入れ置きて風雨をしのぎ、あくるまを待つ心なり、弓やなぐひを負ふとい  
 へるにつきて、業平近衛司の説あり、用ふべからず、作れることなれば、たゞそのま  
 とに見るべし、もしきびしくいは、業平は貞觀六年三月に、左兵衛權佐より左近  
 權少將に遷らる、此段の末に、いどこの女御の御許に仕うまつるやうにてと書き  
 たれば、樂殿の後の女御にておはしけむほと、二條后は童女におはすべければ、あ

はぬことなり、竹取物語に、此守る人々も弓箭を帶して、おもやの内は女どもばん  
 にをりて守らす、女ぬりごめの内にかぐや姫をいだかへて居り、翁もぬりごめの  
 戸さして戸口に居り云々、源氏繪合に、まづ物語のいできたるはじめの親ある、竹  
 取の翁に、うつぼのとしかけを合せて、あらそふとあれば、こゝは竹取をまなびて  
 書けるなるべし、あばらなるくらは、ぬりごめの内にといへる心に同じ、古意に  
 しへ郷には、おほやけの稻を納め置く倉必ずあり、それが今は稻を出しはて、内  
 空しく戸をも放ちて、あばらにてあるを、幸に見つけて女を奥におし入れて、我は  
 戸口に用意しつゝ居て、夜のおくるを待つさまあり、かゝる倉は火をさけて、郷は  
 なれたる川邊なせにかまへてあるが、稻を出して守人なき後は、狸めくもの、住  
 めるなめり、これまことに田舎のありさまにて、こゝにかなへり、さるを倉にあら  
 ず座なりなせいへるは、いかにや、戸口とさへいへるをや、今の世にすら田舎に  
 はさる倉のあるを、いにしへ稻にて倉につみおくには、彌里廻には多かりけむ、弓  
 やなぐひ負ひて云々、中頃の世には、仕ふる人はもとよりにて、たゞ人すら遠く行  
 くにも夜行なせする時にも、これを負ひたること、今昔物語なせにいと多く見ゆ  
 るなり、そのうへかく女をぬすみて行くには、いかなる男も弓矢刀なせ負はぬ人



やはある、こは時世のありさまにかなへるのみならず、この文の勢を得たるものなり、新釋あばらなるとは戸のなきをいふ、おし入れてといふ詞に意をつくべし、ほぞなく鬼にくはるべき女なれば、いとものれろしくおぼえて、暗き倉の内には入りかねたるさま見るが如し、日本後紀三の卷延暦十四年の處に、每郷更建倉院之狀下諸國畢と見えたり、人ばなれたる處のさまなれば、此郷の倉に予ありけむ、さならば大きく内も廣ければ、奥に鬼の住めるを知らざりしなり、弓やさぐひの事、古意に中比の世には夜行なせする時は、皆人これを負ひたるよしにいはれたるはげにさる事なり、さて此弓やなぐひ、道のはぞこる負ひてもありかめ、かくやすらふには、かたへにうち置くべきを、ものおそろしき夜のさま故に、うち置かず負ひてといふ意あり、戸口に居るは、何にまれ、入りくるものを防がむためなり、○あばらなるくらに、新釋には、あばらなる倉のありけるに、また、戸口に居るを「戸口に」とあり、今拾穂抄臆斷古意等に從ふ、あばらなるは、あれたるをいふ、前にも「あばらなるいたじき」云々と見えたり、やなぐひは、箭を入る、具にて、細長く筒の如きを盡やなぐひといひ、平たきを平やなぐひといふ、

はや夜もあけなむとおもひつゝ居たりけるに、鬼はや一口に

ひてけり、

悪見抄女を人に奪られたるを、鬼よくはれたるにたとふるなり、岡疑抄人をぬすみてゆくには、夜も長かれかしとこそおもふべきに、神あり雨ふりて物さびしきをりなれば、夜も早くあけよかしとおもふ心なり、つゝといへるに、わかしかねたる心あり、臆斷あけなむは、願ふ詞あり、古意おもひつゝとあるに、よるに、あくる夜のおそきを急ぐ心から、今ははや夜もあけあむするよと、いくたびもおもひつゝ居たるをいふあり、鬼とは今の童等の恐るゝばけものゝ事にて、物語ふみにいふ皆是あり、新釋弓やなぐひを負ひて、たけささましても、心にはおそろしくうとましくおもひて、はや夜もあけよかしと思ひつゝ居るなり、なむは、願ふ意なり、古意の説は、わろし、鬼一口にくひたりといひて、次にあなやといひければ、とあるは、ことわりたがひたるやうなれど、これはまづひとわたりいひ終りて、たちかへり事のよしをこまかにいふ文法なり、女をば塗本によりて加へつ、此詞あくては男をくひたるやうなり、○夜もあけなむ、古意には、夜もあけなむす、また、鬼はや一口に、を新釋には、鬼はや女をば一口に」とあり、今拾穂抄臆斷等に從ふ、

あなやといひければ、神なるさわぎに、え聞かざりけり、



阿・疑抄あぢやば女のあぢといへる聲なり、臆断あなやは古語拾遺に古語事之甚切皆稱阿那萬葉に痛の字をわなとよめり、古語拾遺にいへるにかなへり、古意こゝは詞のたらはぬやうに聞ゆるは、語の落ちたるにや、今助けていはい、あなやといふ聲の聞えつれど、物のまぎれに、さる事ならむとも、後聞かざりしてふ意とすべきか、且此鬼はや一口にといふより、聞かざりけりといふまでは、落着をまづいひて、次にことわりをどく文なり、新釋え聞かざりけりは、たゞに聞かざりけりといふとはことにて、奥なる女をおぼつかなく思ひて心はつけたれどもといふ意、えといふもじにこもれり、さて古意に、このわたり詞のたらはぬやうに聞ゆるは、語の落ちたるならむといはれしは、ひがことなり、よくととのひたる文なるをや、○神なるさわざに「新釋には神のなるさわざに」とあり、今拾遺抄臆断古意等に從ふ、これら異なる所によりておもふに、新釋のむねとよられたる塗籠本は、いみじきものにあらす、後人のかきうへたるものなるべし、

やうく夜もあけゆくに見ればおてこし女もなし、足すりをし、  
て泣けどもかひなし、

臆断やうくといへるは、はや夜もあけなむと思ひつゝ居たりといふ首尾あり、

足すりは、文選に蹉跎を足すりとよむと、今の本にはしか點せるなし、廣雅に蹉跎失足也、これは足すりの心にあらす、萬葉第五山上憶良の子を失はれたる時の長歌に「たちをせり足すりさけびふしあふぎ」などよみ、同第九浦島子をよめる歌にも「さけひ袖ふりこひまるひ足すりしつゝ」云々源氏總角に見るまゝに物のかれゆくやうにて、消ぬはて給ひぬるは、いみじきわざかな、といひべきかたなく、足すりもしつべく、と云々同蜻蛉に「今はかぎりの道にしも、我をおくらかし氣色をさに見せ給はざりけるがつらき事と思ふに、足すりといふことをして泣くさま、わかき子どものやうなり」とあり、古意かく鬼にくはれたるをいふは、昔物語の常にて、さることもあらでは興なき故なり、たゞ此文の如く鬼にくはれしと心得べし、新釋足すりといふは、昔はいみじうかなしき時は、をさなき子の如く左右の足をすりて泣きつるなり、女なし塗本に従ふ、女もといひては、外にもうせたるものとあるやうあり、○おてこし女もなし「新釋にはおてこし女なし」とありて、女もといひて、外にも云々といはれたれど、このものは、あしすなどの前に用ひて、其力を添ふるもはて、彼も此もの如く、ならべいふもに異なり、

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消なまじものを



岡疑抄草の上の露を、かれは何ぞと問ひし時、返事もしかく申さで來たりし事、今思へば後悔あり、白玉か何ぞと問はれし時、露と答へて消なましければ、如此の思はずまじきものをとなり、此歌新古今には、哀傷の部に入りたり、實には鬼のくはざれども、物語のまゝに鬼のくひてなきものにして入れたるなり、臆断歌の心あきらかなり、元興集に「白玉か露か」と問ひむ人も、かな物思ふ袖をさして答へむ、これは今の歌をとりてよめり、古歌草の上の露を雷の光に見て何ぞと問ひし時、露なりと答へながら身も消えなむものを、今かゝるうきめを見るかなど、いとくやみたるさまなり、其時白玉かとは問はねど、歌の詞にかくいふのみ、されど白玉てふ語、一首にのこなへど、前の文によくかなはず侍るをおもへば、かゝる古歌のありしをとりて、詞を作りたるにも侍るべし、此文おほかたは、さる例なればなり、新釋一首の意、白玉か何ぞと人の問ひし時、いうがはしくていらへもせざりしを、今思へばいとくやし、そのをり露なりと答へて、其露のはかなく消ゆるやうに、命消えなましものを、なむらへをりて、今かくかなしきめを見ることよといへるなり、かくおろかなる事をいふが、おはれ深しげに思ふ人のあくなりたる時は、いさゝかなる事もくやしう思ひ出でられ、うれにつけては、おろかなる事も思ふものに

にありける、そのおもふ情のまゝをつくるは、いふが歌なり、

これは二條の後の、いとこの女御の御許に仕うまつるやうにて、居給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、ぬすみて負ひて出でたりけるを、御兄堀川のおとど、太郎國經の大納言、まだ下らうにて内へ参り給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへし給うてけり、それをかく鬼とはいふなりけり、まだいとわかうて、後のたぶにおはしける時とや、

昔聞抄まだ下らうにては、殿上人の時分なるべし、岡疑抄作者の詞なり、いとこの女御は、染殿の后あり、堀川のおとどは、昭宣公、二條の後の御兄なり、太郎國經の大納言、國經は昭宣公の御兄なり、それ故太郎と書く、昭宣公は弟なれども、忠仁公の御養子なれば先に書くなり、臆断作者の註なり、古意後人のうら書なる事、すでにいへり、いかにぞといはゞ、凡此書には、業平朝臣の歌を多くあげて、其人の事を作れりとは、聞ゆれど、時世官位をも其人ならずかへて、業平ならぬさまに書きたがへ、其外にも古人の名をあらはせしもあれど、いと不義にはふれたる所には、名をあらはせしは、あらず、一興とせしあとなし事なれば、あらはにすべからぬ故な



り、新釋後の人のかきそへたるなり。○此處の末文、臆断には「たゞ」におはせし時の事なり。古意には「たゞ」におはしけるをりの事とかやとあり。また堀川のおとゝ太郎國經の大納言を古意には堀川の太政大臣國經の大納言とあり、後人の書入なれば、いづれにてもよからむか、今拾穂抄に従ふ。

(七)むかひ男ありけり、京にありわびて、あづまにいきけるに、

臆断業平の關東下向は、其故物に見えたることなけれど、古今に載せられたるも、此物語と同じければ、さだかにありけることなり。二條后にまゐりかよはれけることおとづきて、しのびながらなどいふは、そのことありけるにや。續日本後紀第十九に、嘉祥二年正月丙辰朔壬戌、授無位在、原業平從五位下、此時廿五歳也。三代實錄第六に、貞觀四年三月七日乙亥、授正六位上在、平朝臣業平從五位上、此時三十八歳也。文德實錄には一處も見えず。從五位下にて叙せられたる人の、かへりて一等降して四十歳に及ぶまで、六位すがたにてあられるに、二條の后のそのかみの事など、おはかたの人ならば、ことなる勅勘もあるべきは、その罪なるを、其身阿保親王の子にて、又藤原氏の榮花の盛なれば、后の御爲にも然るべからぬ事なる故に、勅勘ともなくて、わづか一等を降して、すて置かれたるはその事か、新釋あづま

とは東の國々をすべていふ名なるを、後の世には東鑑といふ書をあづまかゝみともいふによりて、東をあづまともいふことゝ、ひび心得する人のあれば、くはしくいはむとす。日本書紀の景行天皇の御卷に、登碓日嶺東南望之三歎曰吾婦者耶。故號山東諸國曰吾婦國とありて、正しくはあづまの國といふべし。あづまとは省きていふ詞なり。こゝは京にありわびて、東の國々のうちに、住みよき處やあらむとて、ゆくなれば、あづまにとはいへるなり。○今も本所區に、業平町業平橋などあれば、業平のあづまくだりは、まことの事にして、正史に見えざるは、藤原氏をはかりたればあるべし。

伊勢尾張のあはひの海づらをゆくに、浪のいと白くたつを見て、

背聞抄浪のいと白く云々、此詞また感あき、都をはなれて、萬物かなしき時は、波のよせかへるも、目に立ちてあはれあるべし。臆断海づらは海邊なり、川づら濱づらなどいふたぐひ皆同じ心なり、萬葉に河邊と書きて河づらとよみたれば、海邊を海づらとよむべし。頬の字をつらとよむも顔のうばなる心なり。後撰集に今の歌の詞書に、あづまへまかりけるにすぎぬるかた戀しくおぼえけるは、そのに、川を渡りけるに、浪の立ちけるを見てとあり。古意は後撰集にあづまへまかりけるに



云々であるにて、ことわりあきらけし、此物語にとりて端書を右の如くかへたるは、おもしろけれど、此二國のあはひの海頭を行くとは、今の桑名と宮の驛の間の入海のはてに道ありて、ゆくてにまめるにや、古き道知らねばおぼつかなし、すべてこのわづま下りの條々、國所につきて、おぼつかなきこと侍るなり、歌は後撰集に業平朝臣とて入り、且歌のすがた情もしかなり、さて、此朝臣のわづま下りの事、すでに古今集にも見えて侍れば、さこそありけめ、それをとりて例のはし書をかへて物語とせしなり、新釋磯邊の道をゆくに、浪のうち寄せて、高くたちあがる、いと白く見ゆるをいふ、かく心得ざれば、歌のかへる浪も聞え難きに、昔より皆人おろそかに見過して、ときおけることなし、

いとどしく過ぎにし方の戀しきにうらやましくもかへる浪哉

拾穂抄さらでだに都戀しき時分に、浪のかへるを見ていと過ぎて來たりと跡の事戀しき心ある義なり、後撰十九驛旅に入る、藤原歌の心あきらかなり、文選張景陽が雜詩に、流波戀舊浦行雲思故山とあり、古意もどより過ぎにし方の戀しく思ひつゝ、浦浪のうらやましくも來し方へ歸るかなとなり、實に業平朝臣の歌にて、かぎりなくあはれあり、今本に二の句をすぎゆくかたとあるはあやまれり、こ

れは都戀しき心なれば、こゝに至りて過ぎにし方とあるべきあり、古本に過往方と書ける往は、去往の意に用ひたるなり、且後撰集には、過ぎぬるかたの戀しくと書けるも、過去方の意なり、いぬるとは、過ぎ去りたることをいふ、故に萬葉に過去と書きて、すぎぬるとよめる多し、すぎにしも、すぎいにしの畧言にて、同じ意なり、新釋歌の意あきらかなり、浪のかへるといふは、磯邊にうち寄せたる浪の、ひきてかへるをいふなり、海の面の浪は、かへるものにはあらず、いとどしくとは、事のひとつあるうへに、又事のひとつそふ意にいへる詞なり、此歌にては、さらでも旅は過ぎにしかたの戀しきに、うらやましくも浪のかへるを見て、又戀しさひとつそへたる意なり、萬葉集にいとどきてといへる詞、このいとどしくと同意なり、萬葉五の卷、いとどきて短きものはしきるといふが如く、同卷、いとどきて痛き傷にはから損をそゝぐちふが如く、あせ見えたり、〇過ぎにしかた拾穂抄藤原等には「すぎゆくかた」とあり、今古意に従ふ、眞字を假字に書きかへし時の誤なるべし、これらによりても、此書はもと眞字本なりしをおもへ、

となむよめりける、

(八)むあし男ありけり、京や住みうかりけむ、あづまのかたにゆき



て、住處もどめむとて、友とする人ひとり二人してゆきけり。

臆断此段より奥州まで下られたる事は、別段に書けども、皆前の段の末あり、友とする人は、次の段の友とする人にて、下にある人のいはくかきつばたといふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめといひければとあるは、此友の中なり、古意友とする人は友だちの事といへど、かくてまかるに、うちあひて住處求むる友は、あるべきにもあらず、さて古本に將求とあり、今本にもどめむとては詞たらず、○住處古意には、住むべきところとあり、今拾穂抄臆断等に從ふ、すみかといふべし、もどめむとて拾穂抄臆断には、もどむとてとあり、今古意に從ふ、新釋には此段を除きて九段に加へられたり、いはく、塗本にかくあるに從ふ、此わたり他本とはいたく異なり、塗本にては八段と九段とひとつにして、一段なり、いづれの本も皆二段にわかれたれど、それは後にうつす人の同じ事を二處にかきなと、何くれとつし誤りて、まぎらはしくありけるまゝに、また後の人の考へて、もとは二段にやあらむとて、すこし詞を加へて、二段にはなしたるものあるべし、ざるからに此物語のふりにたがひて、文いどつたなくなれり、うのつたなしといふゆゑは、あづまのかたに住むべき國處もどめにとていくこと、友とする人ひとりふたりあること、

二處に見えていとうるさし、又京やすみうかりけむは七段の京にありわびてと同意なり、此作りぬしは文書くことのですぐれて上手なるに、かうやうに同じ事をいたづらにつたなく重ねて書かむやは、これらの同じ詞を、かたへ省きたらむには、外に異なる事なきにても、後の人のしわざなる事し、こゝは塗本がいとたゞしきといはれたれど、前にもいへるが如く、塗本は後人の筆加へたるものにやとおもはるゝふし多く、ひたふるによしとはさだめ難きを、いまだ確証も得ずして、みだりに此段を除き去られたるは、いと輕卒の擧といふべし、又同じ事重りて文拙きよしはれたれど、此書は詞書長き歌集やうのものにて、他の物語とはいたく異なるれば、重れるとて、どがむべきにあらじ、

信濃の國あさまのたけに、けぶりのたつを見て、

岡野抄伊勢尾張の方よりは、信濃のあさまの烟見えまじきか、昔は過分にたちけるものにてこそ、ゆりつらめ、拾穂抄次の段に道知れる人もなくて、まどひゆきけりといわれば、伊勢尾張の方より、又あさまの邊にもまよひありさしにてこそ、臆断あさまの烟は今は東海道よりは見え侍らぬよしなり、後拾遺集に爲善朝臣、三河守にて下りけるに、すのまたといふわたりにおり居て、信濃國三坂のかたを見やり



てよみ侍りける、能因法師白雲のうへより見ゆるあしびきの山の高嶺や三坂を  
 るらむともわれれば、あさまの烟も見ゆる處あるなるべし、古意此つゞきの條々お  
 のく別なるを、類をもて書きつらねたるものなれば、こゝは淺間の嶺見ゆるほ  
 どの處にてよめりとすべし、或人は尾張三河のほゞにて此嶺の烟の見ゆるなら  
 びといへど、信濃の東北にて上野の碓氷坂にのぼりて近く見ゆる山なれば、いか  
 に晴れたりとも見ゆべからず、されどこゝに此條をあげたる意は下にいふべし、  
 ○火山は時代によりて變るものなれば、此頃は淺間山の烟も多くたちのぼりて  
 東海道にて見えたるなるべし、拾穂抄の説はわろし、

信濃なるあさまのたけにたつ烟をちち人の見やはどがめぬ

拾穂抄見やはどがめぬとは、見どがめまじきかは、見どがめむとの詞なり、上句は  
 其景氣をわりのまゝによみいで、たけ高き体なり、新古今集に入る、臆断をちち  
 ち人は旅人なり、萬葉に彼此をちちとよめり、こなたかかたの人のゆけば、を  
 ちち人といへり、見やはどがめぬとは、はるかにて見ゆまじき淺間の烟の見ゆ  
 れば、見どがめぬ人はあらじとよめるか又は此道よりかく見ゆることの昔から  
 聞えぬは、見どめたる人のあさかどよめるにや、古意遠近の道ゆく旅人、此嶺にた

てる烟を見て、彼はいかにと見どがめ、あやしまぬはなしとあり、さてその見どが  
 むこと事を強くいはむとて、見やはどがめぬとやはの辭をおきたり、且かくあり  
 のまゝにいひくだして、げにとめでらるゝころ、いにしへのよき歌なれ、新釋おも  
 ひもかけず高山のみねより煙のたてば、われはいかにと遠方人の見どがめま  
 いか、大に見どがむといふ意なり、やはのてにをは、意のうらにかへりて、甚し  
 くいふよしにあるなり、遠方人とは此歌にては、みづからのうへをいふなり、をち  
 かたといふゆゑは、高山のたけのけふりは、遠くより見ゆるものにて、見どがむる  
 はその見つけそむる時の事なればなり、此歌の解、古意はおほかたよろし、臆断は  
 いとわろし、をちかた人塗本に従ふ、他本にをちち人とあるはわろしをちかた  
 人は、古今集後撰集の歌源氏物語の文にも見えて、優なる詞をちち人は、さゝつ  
 かず、ちちといふ詞もいたづらなり、○をちち人は彼此にて、こなたにても彼方に  
 ても人々の烟を見るとなり、新釋に、をちち人はさゝつかずとあれど、をちち  
 は副詞にて、をちちびとといふ詞にはあらず、こゝは、をちちにてきりて、人は  
 云々どよむべきなり、見やはどがめぬは見どがめぬやは見どがむといふ意にて、  
 やはを中にはさみたるなり、どがむはいふかかしむ意にて、いかなる故よしにて、か



く烟のたちのぼるにかとおもふをいふ、今も瀬車の通る毎に、人々のめづらしげにうち見るが如し。

〔九〕むかし男ありけり、その男、身をえうなきものにおもひなして、京にはあらし、あづまのあたに、住むべき國もどめにとて、ゆきけり。

古意えうなきは古書には無益の字をよめり、後世無用とかくはわろし、萬葉に無用はいたづらとよめり、意いかよへども、えうなきと書きなれたるは無益の字あり、今本に處を國とあるはわろし、上世に國とは、よしの、國はつせの國など、ひろき處をさして皆國といひしかど、今の京となりては、六十餘國の外はいはず、新釋やうなきは無益といふ意なり、まことにやうなきにはあらねど、みづからさやうにおもひなしてといふ意なり、○身をえうなきものにおもひなして京にはあらじ、あづまのかたに、新釋には、身をやうなきものにおもひなして、みやこにはをらじとありて、あづまのかたにの七字なし、住むべき國もどめにとて、古意新釋に「住むべき處もどめむ」とありて、新釋には此次に「信濃の國あさまのたけに烟のたつを見て、信濃なるあさまのたけにたつ烟をちかた人の見やはどがめぬ」といふを出せり、住むべき國は、住むべき處の意にて、處を國といふは古文の常なり、もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり、道知れる人もなくて、まどひいきけり。

岡疑抄業平のみならず、友とする人も道を分明に知らざるなり、臆断もとより友とする人とは、前の段に友とする人ひとり二人してゆきけりといふをよみて、もとよりといへるか、又昔からともなひたる人といへるか、道知れる人もなくて、あはれに心細く書けり、古意もとより云々は、前をうけたる詞あり、前の條の淺間の獄、すでにいへる如く此順路にたがひたるに似たれど、なほ相離れぬ意ありと見ゆ、よりておもふには、はじめの二條目、かのため男を書きたるも、其上にまめ男てふ語なくては、いひ難けれど、はじめより奥を兼ねて書ける文にて、すべて此男のさまを、まめ男と戯れていふ意あればあり、此條もおのゝ別、のさまして、又相離れぬ意なる故に、もとよりとは書きたるなりけり、又道知れる人一人もなくて、まどひいきけり、と書ける、さすらふ旅のかなしみをよかむる詞なるは、もとよりにて、行き歴る國處の次をも知らず、あらぬ國までゆきかへりまどひたる意を含めり、故に右の信濃の歌は上にねき、又下の五月のつどもりに富士の根にいたれ



るがおろきなどを含みたり、これぞ此書のすべての意ありける、新釋もとよりとは、はじめよりといふ意にて、俗言に都よりのつれ一兩人にて、同行するといふが如し、さるは旅の友は途中よりつれてゆく事もあればなり、古意にも臆断にも此詞を心得かねて、前段をうけたるにやともいひ、又昔からといふ意ならむかともいへる、皆たがへり、道知れる云々、かくいへるよしは、信濃の國のあたりにゆきては又三河の國にいたり、八橋にてかきつばたの咲きたるに、富士の山を見るは、さつきのつごもりなるは、都人のあづまのかたの道知らで、まよひありきたる故なり、とことわりおけるに、予ありける、○ひどりふたりしていさけり、新釋には、ひとりふたりして、ももに、いさけり、又、道知れる人もなくて、を古意には、道知れる人ひとりもなくて、とあり、扱もとより友とする人の、以前より親しき友の意あるを、新釋に、出立のはじめ、都よりの道づれのやうにとかれたるは、わろし、又まよひいさけりは、同行者の中道知れるものなくて、道に迷ひたること多しとなり、いかに道知らずとも、信濃より三河にまよひかへることあらむやは、

三河國八橋といふ處にいたりぬ、そこを八橋といひけるは、水ゆく川のくもでなれば、橋を八わたせるに、よりてなむ、やつはしと

いひける

岡疑抄橋を八わたせるは八に限るべからず、水ゆく川がたてよこなるに、あなたこなたへかけたるをいふなるべし、物の數八を限にしていふものなれば、かくいふなるべし、拾遺抄といふ處を、書けるも、はじめの旅行の心なり、臆断水ゆく河のくもでなればとは、水の蜘蛛のやうに流れゆくなり、ものゝ多かる數を八といふは、常の事なれば、八には限らで橋の多かるを八橋といふにや、といふ説もあれど、まことに八わたせるにこそ、名も高く聞え侍れ、後撰集に、うち渡し長き心は八橋のくもでおもふことば絶えせじ、六帖に、懸せむとされる三河のやつは、のくもでおもふことば絶えせじとあり、古意八橋の事古今歌集には、三河の國八橋といふ處にいたりてとのみあるをもて、此文には其橋の八あるさまをよくいひ知らせたるものなり、さて今此文の古本を見るに、水堰河の蜘蛛なればと書けり、これによるに、今本ももとは水せく河とあり、つらむを、後にせくをゆくに誤まれるなるべし、うもく、田舎に河水をせくは何の爲ぞ、たい田に引かむ料のみ、さて其水を引くには河の左右に多くの溝をまうけて、方々へまかすめり、さればこゝは其河水をせきとめたるへおきて、左右へ四つ、八の溝をなして引くなり、



そのさま蜘蛛の手の左右に四つゝあるが如く流るゝ故に、くもでなればといへり、さて其田面の川の左右の堤の上、或はほとりなごにも、里人のかよふ路あるものなり、そのひだり右の路をきりて、横に入の溝あれば、橋も八わたして、かよふべし、今も田舎の田面に橋を四ばかり間近く渡したる溝多し、こゝには八つまでありて、世にめづらしければ、おのづから處の名ともなれるふりけり、いにしへも今も田舎のさまは、かはらぬものにて、かつ田舎には益なく物をなすことゝあらず、川をせくは田にまかせむ爲なり、橋を渡すは人のかよはむ料のみなり、後のみやこ人ぞと田舎のさまを知らずして、おしはかりの説をいひ、又繪にも此橋を書くにいと誤れるさまにかきなしなごせるよ、皆其本を極めざるが故なり、狭衣に山より落つる水をおのゝ竹の樋をも蜘蛛手にまかせやりつゝと書けるも、ひとつの山水をわかちて、右へも左へも多く樋を渡して引きたらむを、蜘蛛手といひしならむ、おもひあはずべし、新釋これは大なる澤にて、其水左右なる數々の小川にながれわかれたれば、田つくる人のかよはむ爲に、木を橋にかけたるが、そのわたりに入つありける故に、八橋と處の名にいひなしたるなり、古意に左右へ四つゝ八の溝をなし、溝毎に橋ひとつかけたるよしにいはれたるはうけがたし、蜘蛛手とは、たとへていへる詞なれば、まさしく蜘蛛の手には似ずやありけむ、涙の雨とふるといふも、まことの雨とはいたくことなるが如し、たゞ澤を中にて、その水のながれ出づる小川の左にも右にもあまたあり、にて、數はさだめがたし、右と左と數のひとしきにもあらず、道のたよりにまかせては、一筋の川に橋を間近くふたつかくまじきにもあらず、くはしくはさらに知られぬことなるをや、古意には今本の水ゆく川をわろしとて、眞本の水せく河によりてとかれたれど、うれもうけがたし、澤につゞきたる溝ならば、せき入れずとも、常にいさゝかの水はあるべく、もどより橋は渡してあるべし、五六月の頃、水をせくによりて、川のくもでなるにもあらず、その頃に限りて橋を渡すにもあらずをや、○此處の本文、古意にはそこをなむ八橋といひけるは水せく河のくもでなれば云々、新釋にはうこを八橋といふことは水のくもでながれわかれて木八つわたせるによりてなむ八橋といへるゝとあり、八橋の事は、とやかくと水掛論せむよりは、處の人に聞くこそよけれ、古意の説の如くならば、こゝのみにも限らざるべく、名所としもなれるからは、さほ説あるべし、

うの澤のほとりの木のかげにおりゐて、かれいひくひけり、



臆断かれいひは餉の字なり、ほしいひといふやうあれど、たゞ飯のことなり、古今集にも、ふたみの浦といふ處にとまりて夕さりのかれいひたうべけるにと書けり、おりゐては、日本記に下の字をおりゐるとよめり、古意上に河といへど、こゝに澤と侍るを見るに、小河にてせきとめらるゝほどの水なりけり、且田のへに野林などある處のさまなり、おりゐては、下の住の江の條にも同じくて、古本に下居と書きたれば、馬よりおりゐてなり、かれいひは乾飯あり、和名抄に餉を加禮比於久留とも加禮比とのみもよめり、いにしへより、かれいひを略して、かれいといへり、もちいひをもちひといふ類なり、旅にかれ飯を持つ、昔の常なり、新釋木のかげにおり居るは、此時かきつばたのさかりなれば、やよひの末か、う月の上旬なるべく、日影さす處は、やゝ暑ければ、すゝしき陰によりて馬よりおりゐたるなり、さらでも飲むべき水木陰などあらむは、おりゐてかれいひくふにたよりよかるべきなり、りあすか井にやどりはずし陰もよし、みもさむし、みまくさもよし、といひしふること、おもひ合はずべし、また日本書記允恭天皇の卷に、到倭春日食干櫟井上といへるも、こゝなると同じく、井の水櫟の木陰ありて、おりゐてかれいひくふにたよりよければなるべし、さてこゝにかれいひくふといへる、ちひさきわり

こやうの物に入れたる飯をくひたるなるべし、かれいひとはいへど、ほしいひにはあらず、旅の飯をかれいひとはいふなり、古意にはかれいひ持つは昔の常なりとて、ほしいひをくひたる事とおもはれしはたがへり、臆断にはほしいひにあらぬよしにいへるはよけれど、たゞ飯のことゝのみおもへるは、なほたがへり、おのれ此事をくはしくときわかさむとす、萬葉集の歌を見れば、昔は宿かす人なくて、旅人は野に假庵つくりて宿りよしなり、うのころは飯をくはする人もなければ、ほしいひを袋に入れて、ちもちありきけむ、かく旅人の苦しかりしは、錢といふものを世の中に用ひざりしゆゑなり、さるによりて續日本紀に、令行旅人必齎錢爲資、因息重擔之勞、亦知用錢之便、といふ事見えたり、此おほせことありつるは、元明天皇の和銅五年にて、奈良の都のはじめのほどあり、息重擔之勞とは、かれいひをもちありくことをやめて、錢もて飯を買ふやうの事なり、さて後、やうゝ世の中に錢を用ふることゝありぬれば、今の世になりては、かれいひを旅にもちありくやうの事は、をさゝくなければ、昔よりいひなれたるまゝに、旅の飯をかれいひとはいへるなり、中昔のかなぶみにも、干飯の事まれゝには見ゆれど、もはらいやしきものゝくふよしなり、榮花物語玉の臺の卷に、干飯などいふものをめしい



で、池堀り木をも挽くものに賜ふとあるを見て知るべし、このわづまにゆく  
 はいやしからぬ人のさまに書きたれば、まことの干飯をくふにはあらじかし、岡  
 部の大人はいにしへのかれいひを知りて、中ごろにもものゝかはれるを知られず、  
 契沖法師は、かはりたる中ごろのさまのみ知りて、いにしへのを知らざるになむ、  
 さてまた蜻蛉日記に、大なるあふちの木たゞひとつたてる陰に、車かきおろして、  
 馬もうらにひきおろして、ひやしなせして、こゝに御わりを待ちつけむ云々と  
 あるは、こゝと似て書きざまくはし、あはせ見るべし、  
 その澤にあきつばた、いとおもしろく咲きたり、うれを見て、或人  
 のいはく、あきつばたといふ五もじを句の上にすゑて、旅の心を  
 よめといひければよめる、

臆断古今集には、かきつばたといふ五文字を句のかしらにすゑて、旅の心をよめ  
 ひとよめるとあり、今とすこしかはれり、昔意いひければの下によめるとあり、  
 なくともよからむ、○古意にはいとおもしろく咲きたりけり、またたびこころを  
 よめといひければありて、よめるの三字なし、

あら衣着つくなれにし妻しあればはるく來ぬる旅をしぞお

もふ

岡疑抄「きつゝつましはるく」皆衣の縁なり、常の歌ならば、あまり多くて悪しか  
 るべし、これのかきつばたを折句に置くはどにかくよまでいかなはざるなり、お  
 はかたの旅なりとも、かなしかるべきに、いはむや故郷におもふ人をおきては、ひ  
 としほかなしきとよめり、臆断旅をしずおもふは、故郷を思ひ、ゆく末をおもふ心  
 こもれり、鳥かくれゆく舟をしずおもふといふに同じ、古麻萬葉集に奈良の里を、  
 から衣きならの里といひかけし如く、なれにし妻あればといふに、から衣着つゝ  
 なれにしといひかけたるならむ、さて下を衣の語もていひくだせり、にし、いに  
 しを上略せるなり、過去をすぎにしといふに同じ、妻しのし、助辞なり、旅をし  
 しも例の舟をしぞおもふあとの如く、助辞なり、さて妻をばおきて、はるく來た  
 る旅をかなしむてふ意のみ、且五句のかしらごとくに、ざる字をおきて、かくあだら  
 かによむことのかたきなり、新釋から衣着つゝなれにしは、古意にいはれたる如  
 く、から衣きならの里といへるに同じ、歌の意は都になれにし妻あれば、はるく  
 來ぬる旅をかなしくおもふといふ意なり、妻し旅をしのは、ふたつともやすめ  
 詞なる、つまはるあは、衣の縁語なり、臆断は旅をしずおもふのときやうわる



し。

とよめりければ皆人かれないひの上、涙おとしてほとびにけり。

岡疑抄ほとびにけりは、すこしはいかしの躰にいへり、臆断清輔歌に「旅つども  
てるかれいひほろく」と涙を落つる都思へば、これはことを思ひてよまれたる  
あり、古意誰も京の戀しさに、此歌をきいてさらに堪へやらぬこと、前にいふ道知  
れる人もちくたくだれるほどのかきしおもひやるべし、ほとびにけりといふ  
を、俳諧なりといふ説は、いかにや、上の詞の首尾にて、且旅のさまおもしろく  
そあれ、清輔朝臣の旅つどもてるかれいひとよめるは、俳諧歌といふべし、道の  
記をよみやびたることのみ書かむ、何の興かあらむ、處につけ事に従ひて、い  
やしげなる事をおも、しるくもわかれにも書くこそ上手のわざなれ、土佐日記  
などにはさるさま多く書きたり、よりてうのをりの事も、げにとおもひやるる、  
あり、後の人は女房などの書きしもののみ、さる事とおもふ故に、此物語には卑  
辞を好むなどいふ、皆心得たがへるものなり、この語をのみ、いかで俳諧とせむ  
や、新釋ほとびにけりは、岡疑抄にいへる如くはいかあり、  
ゆきくして駿河の國にいたりぬ、うつの山にいたりて、わが入ら

むとす道はいと暗う細きに、つたかへでい茂り、物心細くすゞろ  
なるめを見ることとおもふに、修行者逢ひたり、あゝる道はいと  
でかいまするといふを見れば、見し人なりけり。

尙問抄すゞろは不意とも書く、心ならざるなり、岡疑抄ゆきくしては、三河をすぎ  
て駿河に至るなり、其中に遠江をこめたり、つたかへではのはは、てにはなり、拾遺  
抄いと暗うは、夏山の茂れるあり、臆断すゞろは、漢書に辛の字をよめり、からきめ  
を見る心か、遊仙窟には不覺をすゞろとよめり、坐の字をそいるとよむは、文選に  
無故と注せり、漫の字をそいるとよむにあはすれば、ゆゑなくみだりなるめに  
逢ふなり、見し人は、もとより知りたる人なり、古意ゆきくしては、前よりつゞけた  
る詞なり、駿河の國の道に、うつの山路は今もあれど、古道いすこしことにて、いと  
さかしく谷も深くあれば、さこるゆくさき暗く物おろしかりけり、和名抄に、有  
度郡に内屋の里見たり、或説に、葛かへで者と心得たるは、誤れり、古本に葉繁と  
書きたるによるべし、はは物をわかちいふ語なれば、葛かへではしげりといは  
れ、他にしげからぬもの、今ひとつなくてはかなはず、葉しげりといふあるぞよき、  
すゞろは、うゝるといふに同じく、こゝはおもひがけぬからきめ見るてふ意な



り、文選の註に、坐者無故辞といひ、また不慮不覺など心得るも、皆かなへり、古本に御坐とあるは、例によるに、おはしましとまじべし、といふに見ればとあるも、文の勢あり、且此物さびしき處にて、修行者に逢ひたるなど、おもひやりよく作りたり、新釋いと暗うは、木の茂りたるさま、道につたかづらの茂れるは、人のゆきゝのまれなるゆゑにて、皆物心細きけしきともなり、師説につたかづらはのは、てにをはにて、上の道はのはと重ねて、かうやうにいふ一の格なり、といはれたるはよし、古意の説はわろし、すゝろなるめを見るとは、さはあるまじきめを見るといふことにて、都にをりなば、かうやうに心細き事はあらじを、道知らぬあづまのかたに來れるゆゑに、わが身にさはあるまじき心細きめを見ることがなど、心の中に都出しをくやしうおもふ意なり、大和物語に、すゝろなるものに、何か物多く賜はむといへるも、さはあるまじきものにといふ意と見て、よくかなへり、さてかうやうに、ことといひとぢむるは、なげきの意をふくめたるなり、此事は消息文例に例をひき出で、くはしくいへり、臆断には、すゝろなるめといふ、ゆゑさくみだりなるめに逢ふ意なりといへるは、漢字のよみにまごへるひがことなり、心細きめに逢ふは、旅ゆく人のならひなるを、ゆゑなくみだりあるめといひ、いかでかおもはむ、され

ば古意におもひかけぬからさめ見る意なりといはれたるもかなは、修行者の事をいへるは、夢にも人のとかとむ爲なり、さて修行者のかゝる道にはいかでかといひ、詞つきのかしてまりたるさまあるをおもふに、此往く人は、かるからぬ身にて、都にあるべく、感さだめぬありきなど、すまじき人と知られたり、すゝろなるめを見ることとおもひしも、ことわりなりけり、つたかづら、塗本に従ふ、他本につたかへでとあるは、皆うつしあやまりなり、すべて松杉萩萩など、本草をならべいふは、皆對するものをいふことなるに、菰とかへでとは、さらに對せぬものなり、○古意には、駿河の國うつ山にいたりてとありて、にいたりぬの五字なし、また「つたかへでの葉繁りて、またかゝる道にはいかでおはしましつる」とあり、新釋には「つたかづらはしげりて、またかゝる道にはいかでかたはする」とあり、かゝる道はのはは、に字のうつしあやまりにや、

京にその人のもとにとて、ふみ書きをつく、

問疑抄つくは、ことつくるなり、臆断その人の御もと、は、しかるべき人なるべし、二條の后か、ふみ書きをつくは、附なり、ことつくるなり、古意今本に御もと、あるは、かの西の對なる人などをおもひて、後にぞへたるにや、古本に御の字なきぞ、事



ひろくてよき傳をつぐとよむは、下にもかた／＼に告ぐる意なる處に、傳と書きたり傳へ告ぐる謂あり、つくをすみていふ時は、附にてわたす意なれば、さてもことわりあるやうなるを、下の例によりて告ぐる意とす、新釋の人は、せちにおもふ人をさしていふ詞なり、ふみ書きてつくは、臆断にいへるやよき、くをすみてよむべし、古意の説はわるし、○拾穂抄臆断には、「その人の御もとに」とあり、今古意に従ふ、三段に、けさうしける女のもとにひしきもといふものをやるるとてとわり、このみ御もとにといふべきにあらす、又「つくを古意には、つぐとあれど、修法者に告ぐるやうにて、ふみ書きてといふにかなはず、

駿河なるうつつの山へのうつつゝにも夢にも人にあはぬなりけり

關疑抄夢にもあはぬといはむために、上句をいへるなり、歌の心は、うつつゝの事は、いふに及ばず、夢にも人にあはぬといへり、あはぬなりけりといひつめたる所、おもしろきなり、臆断新古今集羈旅の部に入る、うつつの山べをうけて、うつつゝとつけて、うつつゝのみならず、夢にも人にあはぬなりけりといひつめたり、古本忠岑集に「駿河なるうつつの山べのうつつゝにも夢にも君を見でややみなむ」六帖音にさくうつつの山べのうつつゝにも夢にも見ぬに人の戀しき、新續古今後京極「うつつの山こ

えし昔のあとふりてつたのかれ葉に秋風ぞ吹く、家隆おもふこと、菰の紅葉にかきつけつ都におくれうつつの山風とあり、古意六帖に音にさくうつつの山べの歌あり、此一二の句は、まうけてたゞ序にいひたるを、此文には、うつつの山路のありさまを詞に書きて、さて其處にてよめる歌としたれば、上は今越ゆる山のありさまをいひて、即序として、下の意をいひくだせる體となりぬ、さて下の句の意は、京にて其人にわかれしより、すべて現はもとよりにて、夢にすら見ぬがかなしきこと、いふなり、見るけしきを述べて、すなはち序とし、末に心をいへる例もあれば、右の如くはとくなり、一二の句をも歌の心とする時は、うつつゝに人目なきは、もとよりにて、夢にだに人を見ずといふべけれど、さては心あきらかならず、聞ゆ、新釋駿河なるは、駿河にあるのにあをつゝめてなといふなり、うつつの山べのは、今越ゆる山を、すなはちうつつゝの序にいへり、さて歌の意は、かゝる道なれば、したひ來まさて、うつつゝにあひたまはぬは、ことわりなれど、それがしをおもひ給はど、いるけき道にても、心のかよふものなれば、夢にはあひ給ふべきことあるに、さらに此方をおもひ給はぬ故に、夢にも君のあはぬなりけり、つれなしとらみをいひやりたる意なり、すべて人を夢に見るは、その人のおもふ意のかよひきて、見ゆるよしに、昔



よりいふことなり、古今集戀の歌に夢にだにあふことかさくなりゆくは我やい  
 をねぬ人やわするとどあるを見るべし、人が忘るれば、心のかよひ來ぬゆゑに、此  
 方の夢に見ぬざるよしなり、さるからに大のあはぬなりけり、あなたのとどに  
 して、うらみをいひやるなり、のゝてにをはに意をつくべし、かくいふを戀する人  
 の情なりける、人の塗本に従ふ、他本に人にとあるは、人のあはぬといふときさな  
 れぬやうなりとおもふ後の世意のさかしらにうつす人の書きなしたるにやあ  
 らむ、いみじきひがことあり、古今集の歌の詞書にも、あなたよりあふことは、女の  
 あへりける、又は人のあひてなといへり、

ふじの山を見れば、さつきのつてもりに、雪いと白う降り、

鹿断上に入橋のあたりにて、かきつばたを見られたれば、五月晦日は歌のかざり  
 にいひて、實語にはあらざるべし、古意三河の澤にかきつばたをよみつるは、三月  
 の末、四月の中、ころにもせよ、うれよりゆきく、て五月の晦日に、ふじの山本なら  
 むは、あまりに日敷過ぎたり、よりて或人は物語のうら言なりなといふは、一わた  
 り見てはさることながら、此文の意はしからず、既にもいふ如く、住處求めむとて  
 くだるに、道知れる人すらなくて、まをひゆく旅なれば、こゝかしこに處をも求め

まをひありきなをせむには、おほかたの驛路のさだめなを、いひ出づべきにもあ  
 らず、三河にも遠江にも幾月日てふさだめあるべからずを心得よとて、はやく右  
 の詞をたき、かく月日をも隔てたるやうに書けるなりけり、且淺間の嶺の歌をす  
 でにあげたるも、さる意にぞ侍るべきは、此文の心なり、新釋さつきのつどもりと  
 は、五月の下旬にといふことなり、さて歌には、かのこまだらにとよめるに、はしの  
 詞には雪いと白うといへるを、昔より人のいふかしのることなり、こたびいひあ  
 さらめなむ、昔は歌にこまかによめるをば、はしの詞にはおほらかに書けり、三代  
 集の歌の詞書など皆さやうあり、こゝも歌よ、かのこまだらにと、こまかにいへる  
 故に、はしの詞に白うとおほらかにいへり、歌を合せ見て、白うとはあれど、くはし  
 くいはい、かのこまだらなりとしられておかしきなり、又いとといふ詞は、五月の  
 つどもりといふ詞にかけて甚しくいへるなり、つどもりには、つどもりなるにと  
 いふ意なり、たとへば俗語に寒中にまッはぶかにてといふが如し、此寒中にも寒  
 中なるにといふ意にて、寒中にはだかはめづらしければ、寒中といふ語にかけて  
 驟をまはだかど、まをそへて甚しくいふと同じことなり、さて又三河にて、かきつ  
 ばたの花盛にて、五月の下旬にふじの山本なる故は、古意に道知れる人もなくて



云々といはれたるにて聞えたり、臆断の説はわろし、

時知らぬ山はふじのねいつとて鹿の子まだらに雪の降るらむ

臆断新古今集霸旗に入る、ふじのねは時知らぬ山にもあるかな、今日は五月のつごもりなるを、今をいつとおもひてか、雪の降るらむとなり、山のたぐひなく雪のめづらしきを興じていへり、時知らぬ山はふじのねといへるわたり、まことに中将の口なり、鹿の子まだらば、むらくと見ゆるなり、これを詞にはいと白うといへり、風雅集に定家卿時知らぬ里は玉川いつとてか、夏の垣根を埋む白雪、古意時知らぬは、日本紀萬葉集さどに、非時と書きて時じくとよめるに同意なり、新釋古意に時じくと同意なりといはれしは、たがへり、時じくは時となく常に變らぬ意、此時知らぬは、冬は雪ふり夏は降らぬがさだまれる時なるに、其時を知らぬといふ意にて、いたく異なり、

其山は此處にたとへば、ひえの山を二十ばかり重ねあげたらむ  
ほどして、なりは、しほじりのやうになむありける、

古意こゝにたとへばとは、都方の物にたとへて知らせば、てふ意なり、新釋しほじりは、塩やく濱に砂をつみあげて塚の如くして富士の山の形によく似たるものあり、うれならむと師のいはれしぞよろしかるべき、塗本には此處、此山は上は廣く下は狭くて大笠のやうになむありける、高さはひえの山を二十ばかりかさねあげたらむやうになむありける」とあり、此本にては記者の詞にはあらで、うのかみふじの山見たる都人のおもへる心をかきあらはせる文なり、大笠は笠有柄也と和名抄に見えたり、これは都に目なれたるものあれば、たとへていはむにつきしく、しほじりよりはまさりたれば、これを本文にせむともおもひつれど、今の本はたむげに聞えぬこともなく、しほじりも昔より名高ければ、わろしとてとりすてむも、さすがにあたらしく、なほしほし今本に従ひぬ、かゝれば塗本の文をこゝに記して、後の人のさだめを待つになむ、

なほゆきく、むさしの國と、しもつふさの國との中に、いと大なる河あり、それを隅田川といふ、

惟清抄大なる河と書ける、尤面白し、此河を越しては、いよく故郷は遠くなるべしとおもへる心あり、新釋こゝはよく聞えたる文なるを、臆断古意などに、むさしどさがみどの中にゐてあすた川といふは、在五中將のいざことゝはむとよみけるわたりなりとある、更科日記の文によりて、處たがひたりとて、こゝなるを疑は



れたるは、ひびきことぞ、それは二人ともに、かの日記の寫し誤りたるをのみ見て、正しき本を見られざりし故なり、おのれこれかれと、あまた見たりし中に、古き印本に下つふさの國とむさしのさかひにてあるおすた河といふは、在五中將のいざこととはむとよみけるわたりなり、中將の集には、すみだ河とあり、かゝみのせまつさとのわたりの川に泊りて、夜ひとよ舟にてかつく物なぞ渡すとありて、むさしの國の日記をはりて、むさしとさがみとの中にてふとむ川といふ舟にて渡りぬれば、さがみの國にありぬとあるは、此物語に同じ、

其河のほとりにむれおて、おもひやれば、かぎりなく遠くも來にける、あなとわびあへるに、

岡疑抄同道の人など一處に集りて、さてもはるくと來にけるかなど、わび給ふなり、新釋旅路のあらひ、友だちもあつとさきに離れてゆくものなれど、河のほとりにては、わたし船に同じく乗らむとて、待ち合せて一むれになるを、むれるてといへり、よく心をつけてかける文なり、おもひやるは、都の方をなり、道をゆくは、まぎれて忘るれど、しばしつくくとやすらふうちに、故郷の事をおもひ出づるなり、わびあへるとい、かぎりなく遠く來て物心細く故郷の戀しくてもせんかた

なきことなど、いろくのかなしきすぢをいひあへるよしなり、さてかく日々にかなしくつらき事ともいふほどに、時うつりて、わたし守が待ちかねたるなり、わたし守は、や船に乗れ、日も暮れなむといふに、乗りて渡らむとするに、

藤原からうじてあまたの國をすぎ來たるに、又いと大なる川を渡らば、いと故郷の遠さからむことをかなしびて、心のすまねば、船に乗りかねて、やすらふほどに、わたし守がなさけも知らねば、しきりにもよほしなむそのをりを思ひやるべし、土佐日記に、かちとり物のあはれも知らず、おのれし酒をくらひつれば、早くいなむとて、汝みちぬ、風も吹きぬべしとさわげば、船に乗りなむとす、古意渡守ハ野守山守てふが如し、船こぎわたすものをもいふゆり、わたり守といはむと古意ならむ、新釋わたし守は、わたしを守る人をいふともにて、うつりては船こぎ渡す人をもいへり、こゝなるは舟長なり、船に乗れといふは、なめき詞にて、そのかみわたし守は、船に乗り給へ日もくれ侍りなむとぞいひたるべきを、うのいひし詞のふりをたがへて書きたるなり、古今集後撰集の歌の詞書にも見えて、ひとつ合格なり、さきなる修行者の詞は、いひたるまゝのかしこまりたるふりに書きて、す



いろなるめを見るといへる詞と合せて、此都人はよき人なるを知らせ、こゝは殊更にかへて書きたるにて、おもしろし、さて乗りてと句をきりて、渡らむとするにとよむべし、乗らむとする意にはあらず、船には乗りて、むかひの岸へ渡らむとするに、川中にてしかくゝの事ありて、しかくゝの歌よめりといふを、川中の事故に、船をりてなきにけりといふなり、

皆人物わびしくて、京におもふ人なきにしもあらず、さるをりしも、白き鳥のはしとあしと赤き、鳴のおほきとなる、水の上にあそびつゝ魚を食ふ、

拾遺抄都鳥は鴨といふ鳥あり、おほきさ鴨ほそなり、腹断はしと足と赤きといへる下に鳥のと入れて心得べし、式抄に都鳥は、せなかは黒く腹は白しといへり、或人は此鳥かもめにうちまじりて、あつびありきて、おまたあるものなり、鴨よりは大なれど、遠めには物のちいさく見ゆれば、見たる所を書けるよし申しき、古意或人間ふ、古今集には川のほとりにあそびけりとなりて、ことわりあきらけし、此文には水の上にあそびてといへば、足は見えじやと、答此鳥はかもめにて、むれつゝあそぶ故に、飛び立つも、ほとりに在るもあるべければ、此問はかたくなし、且これ

はかもめなるを知らせむとてや、詞をうへつらむ、新釋渡邊重豊云、京におもふ人なきにしもあらずと書ける意は、此段のはじめにいへる如く、身をやうなきものにおもひなして、都にはをらじすむべき處もとめむとてゆきける身なれば、京にはだしなせのあきさまに見ゆれど、京におもふ人なきにしもあらずといふ意ありといへり、げにさやうなるべし、此重豊といふ人は、みちのくの酒折の宮のみや人にて、はやうよりいにしへ書をひとりとよくよみけるを、近き年ごろは高尙に従ひて、物學ふ人になむ、さて都鳥は白き鳥の、背と足と赤くて、大きさは鴨ほそなるを、しかいひきと心得て事足れり、さてくふとは俗言にくはへたりといふ意にもいへり、くはへたるを見てぞ魚とは知らるべき、されどこゝは、くはへてのみ入るゝ心なり、くはへたるをくふといふとは、古事記の上巻に、爾其鼠咋持其鳴鶴出來而奉也、其矢其鼠子等皆喫也とあるを見て知るべし、くはへもてくるを、くひもていできてとも、くひたりきともいへり、又萬葉集十三卷の長歌に、上瀬之年魚矣、合昨下瀬之鮎矣、合昨といへるも、鶴にくはへさせて、其鮎をとるをいへり、さて又和名抄に、魚和名宇乎俗云伊遠とありて、うをといふかた正しけれども、此物語はいづれの本にも、いをとあり、うの世のものいひぶりに書きたる故なるべし、



京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず、わたし守に問ひければ、これなむ都鳥といふをききて、

古意萬葉に「船ぎほふ堀江の川のみなぎはに來居つゝ鳴く」都鳥かもとあり、其後もよみたれば、此鳥の名はきゝ知りて、見るものはじめある故に、これなむと書けり、白き鳥の鶯と足とは赤くて、みやびたるかたち故に、みやこ鳥てふ名を得たるか、新釋わたし守がたゞにみやこ鳥とは答へずして、これなむといへるを心とめて見るべし、問ふは都の人なれば、みやこ鳥は知りておはせむものをと、わたし守がおもふ心の詞にあらはれて、これなむ都鳥とはいへるなり、これぞ都鳥御存知なきにやといふ意こもりて聞ゆ、

名にしおひいざこと問へむ都鳥わがおもふ人はありやなしやと

惟清抄此鳥を問へば都鳥といへり、我故郷の名にて、ひとしほなつかしくおもへり、名にしおふことあらば、都の事を問ふべし、我思ふ人はありやなしやと、都といふ名をかこちてよめるなり、背聞抄此歌は大なる河ありといふより、皆人物かなしくてといひ、ざるをりしも白き鳥といひし詞など、心にこめて見侍るべきなり、

限もなき餘情なるべし、藤原古今集羈旅に入る、歌はあきらかななり、右の詞を心にもちて見るべし、拾遺集に「心ありて問ふにはあらず、世の中にありやなしやのきかまほしきぞ」齋宮集に「人をなほうらみつべしや都鳥ありやとだにも問ふをきかねば」和泉式部ことゝはむありのまに「都鳥都の事を我に告げなむ」續古今集に「ふく風ものどけき花の都鳥をさまれる世の事やとはまし」古意此鳥の名におひたる如くならば、都の事をも知りなむ、いざやわがおぼつかなくおもふ消息を問はむとあり、かく遠き國までさすらへ來て、故郷人はいかにぞ、たひらかなりや死に失せざるはせずやとおもふは、旅なる人の常の情なるに、いとしく物かなしきをりから、此鳥の名をきいて、いとせめてよみ出でたる心のはせのかなしさ、いはむかたなし、かくをさなくおもふ事をよむぞ、極めて切なるわざなる、前の詞どもに此わはれを催して書きたる文のよろしさ、心をやりて見るべきなり、新釋みやこといふ名に負ひたる鳥ならば、都の事を知りて予あるらむ、いざ物いはむといひかけて、さてその物いふは、わがおもふ人はありやなしやといふことなり、と、末にことわりたる歌なり、ありやなしやは、いきて世にありやなしやといふことなり、限もなく遠きあづまの國にて都をおもひやれば、此世の外のこと、ちし、



あなたよりのせうそこはたえてなし、ものあはれに心細くて、思ふ人のいきて世にありやなしやの聞かまほしきも、ことわりなりけり、都鳥といへばとて、京の事知るべきにはあらねど、かくおろかにいふが、せちなる情にて、いとくわはれ深し、ことゝふといふ詞は、大祓の詞に、語問志磐根樹立と見え、萬葉集の歌にもあまたありて、ものいふことなり、さればいざことゝはむい、いざものはむにて、俗語にいざもの申さうといひかくるに同じ、さてるのいふ詞は、わがおもふ人のありやなしやといふなれば、尋ね問ふ意は、したにあれども、詞のおもてに問はむといへるにはあらず、さるを近代の人は皆問ふことゝ心得て、歌によめるもあまた聞え、師の古今集遠鏡にも、どりやものとはうと譯されたれど、それは誤なり、いにしへの歌文には、問をことゝふといへることは、ひとつもあることあり、後撰集に忘れ侍りにける人の家に花をこふとて兼説王年を経て花のたよりにこととはいとい、あだなる名をやたらなむとあることゝは、いはものいひやりなばといふ意なり、ようせずは問ふことゝにあやまりぬべし。

とよめりければ、船こぞりて泣きけり、

關疑抄こぞりては、翠世といふが如く、船中の人おのゝといふ意なり、藤原舟の

うちの人皆泣くあり、莊子に舉世而舉之不加勤、註舉皆也、京にありわびてといふよりこれまで、ことに餘情かぎりなし、心をつけて見るべし、古意上にはまだ船に乗れりとも見えぬを、此歌はすでに乗りてよめるを詞にて知らせたり、此詞と歌とをよく見ば、今の人も泣きぬべし、新釋古意に上にはまだ船に乗れりとも見えぬを云々といはれたるは、のりてわたらむとするにといふを、俗語のふりにさゝまよひて、乗りむとする意に見あやまられたる故なり。

(十)むかし男むさしの國までまどひありきけり、さて其國にある女をよばひけり、父へこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人にと心つけたりける、父はなほ人にて、母なむ藤原なりける、さてなむあてなる人にとおもひける、

曾聞抄女の父は業平を過分におもひて、こと人にといへるなり、愚見抄なほ人はたゞ人といふ心なり、品いやしきをいふ、拾遺抄母なむ云々は、我むすめはよき人、はころあはせめとなり、臆断あてなる人といふ、やさしき人、則業平あり、なほ人は直人にて、直はたゞとよめば、たゞうそのおみくにて種姓たふとからぬ人なり、父が心の時を得たる人にとおもひて、種姓を好まねど、母は藤原にてよしある人な



れば、あてなる業平にとおもふなり、古意なほ人とは、古今に直人と書きたる意にて、直は平直にて平人といはむが如し、あてなるとは、下に有常の事を心うつくしくあてなる事を好みてといひ、こゝを古今に高貴と書きたるをむかへ見るに、雲上よりたるてふ語なり、さてこれをもとにて、うはてなる人はおのづからうるはしく姿もたをやかなるものなれば、形のよきかたにも轉じいへり、枕草子に物乞尼の姿のよきをすら、あてやかなるのといへり、新釋こと人の他の人といふ意にて、此都人ならぬ他の人にあはせむといふなり、さいふ父の意、住處定めず感ひありくなるをいとひて、おなかうとは田舎人どちといふなるべし、母は上品なるを好みて、此人にと心つけたるなり、あては俗語に上品といふに當れり、枕冊子に物乞尼の姿のよきをあてやかあるがといへるも、さる乞食の中にては上品なるをいへり、古意のうはての説はわろし、父はなほ人といひ、なみくの人にて、種姓尊からぬをいふ、母の藤原なりといふ、藤原氏の貴姓なるはもとよりにて、中昔の頃はことにすぐれて盛なりし故なり、さるからに都の人の氏尊く上品なるにとおもふなり、さてなむはうれでなむといふ意なり、

このむこがねによみて、おこせたりける、住む處なむ入間の郡み

よしのと里なりける、

・ 關疑抄むこがねはむこの器量あり、源氏紅葉の賀に后おねとあり、后になり給ふべき人なり、拾穂抄母藤原あれば、なみくの人を簪にせじとおもふに、業平ころは器量なれといふ心にていへる詞あり、臆断むこがねは簪の器量なり、うつば物語に「女御后がねなどの對に住み給はむにはいかでか上にのぼり侍るべき、又令の后にこそ、坊がねを一人にもわらず二人まで玉を磨きて持ち給へれ、源氏未通女に「かういふさいはひ人のはらの后がねこそ又おひすかひぬれ、此等のたぐひなり、入間の郡は、歌によめるみよしのを、入間郡にありと知らせむためなり、大和の吉野にきくなれて、まがはむことを思ふなるべし、いるまを萬葉には、いりまちともよめり、古意むこがねは、やぶて簪になるべき儲なる人をいふ、むこがねは、簪の器量といへる説は、いとつたふし、新釋むこがねは、かねてより契りおくをかね言といふに同じことにて、かねてむこにどらむとおもふ人をいふ、ちり、后おねもかねて后になり給はむとおもふ人をいふにて、同じ、拾穂抄臆断等に簪の器量なりとどけるは、いみじきひがことなり、古意にやぶて簪になるべき云々とあるも、すこしたるがへり、こゝは母のむこにせむとおもふにつきていへる詞なり、父は



こと人にといふにあらすや、儲とはことなりをどめの巻なる后がねも世の人の后になら給はむと思ふよりいへるにて同じ、おこせたるといふは、此物語は都人のいへる物語なれば、すべて京をこなたとしていへる例なり、此男も京人なれば、さる意はへにいへるなり、さてすむ處なむといふよりは、歌にみよしのとよめる故をことわりたる記者の語なり、

みよしのと田のもの雁もひたぶるに君があらにぞよると鳴くなる

愚見抄たのむのかりは田の雁なり、ひたぶるは一向にといふ心なり、雁はよると鳴くやうに聞ゆる故に、君が方にぞよるとよめり、藤氏の母、此男をむこにて、よみてやれる歌なり、惟清抄雁がねも君の方へよるとなくぞといふは、うなたへ心のひくといふ心なり、鹿断續拾遺集戀三に入る、たのむのかり、むともと音かよへば、田面雁なり、憑むの雁といふ異説われど、此贈答二首ともに六帖に雁の歌に入れたれば、田面雁正義なり、ひたぶるは日本紀に永の字頼の字を書けり、永をまたひたすらともよみたれば、同じ心なり、君がかたによると鳴くとは、雁のうちむれて一かたにゆきており居るをよるといふ、それに我は君をむこにせむと

心をよするといふ心をそへたり、よるとなくといへるは、雁のさ鳴くやうなれど、しかいふにあらす、雁もおもふ心を音にたつれば、我思ふ心をことにはあらはしていふを、雁によせてよめば、なくとはいふなり、下に今日ばかりとてたづもなくなるとよめる心に同じ、定家卿たがかたによるあくかりの聲たて、涙うつるふ武藏野の原、古意田面にむれ居る鴈すらも、皆君が方に心をよせて鳴くと、鴈をかりて我心のよれるをいふなり、古本に田面と書きたれば、たのもとよむべきを、わろき説につきて、今本にいたのむと書けるなるべし、ことわりもなきことなり、よると鳴く、い寄るとて鳴くてふを、てを略せしなり、萬葉に葦の屋のうなむをどめが奥檜をゆきくと見れば、ねのみしなかる、これゆきくとてを略していへるなり、今と同じ、兼盛の集に「白妙の雪降り埋む梅が枝に今日ぞ鶯春と鳴くある、此春と鳴くなるも、同じ格あり、さて鴈の一時毎に處をかへて、かなたへより、こなたへよりて、其度毎に鳴くものなれば、これによせて、よるとて鳴くてふ語は、いひ出でたるにや、新釋たのもは田の面なり、ひたぶるには、ひたすらにといふ意なり、下の句は君が方にぞよるといふ心に鳴くなるといふ意にて、古今集の歌に君が御代をば、八千代とぞ鳴く、兼盛の歌に今日ぞ鶯春と鳴くある、此物語の歌に今日ばか



りと予たづも鳴くなるとよめる、皆同じ格にて、八千代といふ意に鳴く、春といふ意に鳴く、今日ばかりといふ意に鳴くにて、皆つらぬきて聞えたり、とてを畧して、**どいへるにはあらず、又鴈のよるく**と鳴くやうにとけるは、いふにもたらぬひぐことなり、一首の意は、田の面の鴈もひたすらに君が方によるといふ意に、ひとかたによりて鳴くが、我もそれと同じ意なり、といへるなり、鴈はげに、一かたによりておりぬ、鳴くものに予ありける、されどまことには雁は心ありて君が方によるものにはあられぬ、娘の心の君が方によるを、雁になすらへていへるなり、**のてにをは、母がみづからの事をこめたるなり、**むこがねかへし、

わが方によると鳴くなるみよしの、田の面の雁をいつう忘れむ

惟清抄わが方によると鳴くといへる、それこそ本望なれ、其心ざしをいつか忘れむとなり、臆断いつか忘れむとは、心ざしのほぞを感ずるなり、古意一すぢにうけよるこふよしと、たゞ言によめるなり、これは此記者の歌なり、同じたゞ言にても、よひく、毎にうちも寝な、むと業平のよまれしとは、心詞いとたがへるものなり、

り、新釋わが方によるといふ意に鳴くある田の面の鴈なれば我も又なくれもひかはして、いつか忘れむ、忘るゝことはあらしといふ意にて、母が娘を鴈にならずへて、いひおこせたる故に、かへしも娘を鴈にして、ゆく末かけて捨れぬよしをいひやりたるなり、おもしろき返歌なるを、昔より娘を鴈になすらへたるを見知れる人なかりし故に、此返歌の意をも聞き得たるなかりき、

どなむ、ひとの國にても、なほかゝることなむ、やまざりける、

關經抄他國にてもかく好色の事やまずとなり、これ又作者の詞なり、他國にては用捨あるべき身にてとなり、臆断作者の註なり、萬葉に他國をひとの國とよめり、かゝることは好色あり、此註にて見れば、好色にそこおはれて、あづまへ下れるなるべし、古意京にて放縱なるによりて、さすらふる身となりたることを含みて書けるなり、されどこゝはさせる好色も見ぬねど、下の條々にさること書くべきは、しめなれば、かくいへるか、さて右よりみちのくまでの歌は、皆業平朝臣のにおらず、記者の作れるなり、新釋都にてはさらなり、ひとの國にても、かく歌よみかはすやうのみやびたること絶えざりきといふ意なり、

十二むあし男あづまへゆきけるに、友だちに道よりいひおこせ



ける

忘るなよほどは雲おになりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで

見抄ほどは雲とは遠き心なり、兩疑抄はるかに隔るとも、わがたち歸りて、又逢はむまで忘るなとなり、拾遺抄此歌業平なり、拾遺集第八には橘忠幹が人の女にしにびて物いひ侍りけるころ遠き處にまかり侍るとて此女のもとにいひつかはしけるとあり、此橘忠幹は作者部類に天曆の比の人云々とあり、しからは業平の伊勢物語にある歌を、忠幹が書きてつかはしたるなり、古意こは拾遺集に橘忠幹が人の女にしにびて云々と端書して入れたれば、忠幹が歌なるを、こゝに似つかたれば、一條とせるなり、これも又此書は村上の御代の末に出でたる一の證なり、或説に歌の右に忠幹とするさぬにつきて、こはもと業平の歌なるを、忠幹の書きて女につかはしたるならむといふは、拾遺には端の詞によみ人の名をわけていさらにもいはぬ例なるをもおもひはからず、もとより此書は他の歌を集めて作れるをも心得ざる故なり、忠幹は後撰集に「おもひやる心ばかりはさはらじを何隔つらむ峰の白雪てふ歌もありて、口つき相似たり、且此人は天曆の比まであつし博士なり、新釋ほどとは道のほどなり、雲おとは、遠き處は雲のおりゐるやうに見ゆればいふことにて、いと遠くなりぬともなり、下の句は月は天空をめぐりては、又同じ處へめぐり出づるものなれば、空ゆく月の如く同じ都にめぐりあふまでといふ意なり、

(十二)むかし男ありけり、人のむすめをぬすみて、むさし野へおてゆくほどに、ぬす人なりければ、國の守にあらめられにけり、

臆断此段の作れることなり、からめられにけりといひて、にげにけりといへること、たがひたるやうなれど、此段の終に女をばとりてともにゐていにけりとあれば、女をば草むらの中にかくしおきて逃げたれど、終にからめられたれば、落着よりまづ書きたるなり、古意次に逃げにけりといへば、事のついでたがへるやうなれど、こゝはまづ落着をいひて、次にたち返りて其ありさまをどく一の文法あり、既にも此体は侍りし、且こゝには男のさま、次には女の上を書きたり、新釋むさし野へつれてゆくは、里遠くて人なき處をしのび走らむとせしなるべし、國の守はぬす人なを制する役なれば、人衆を出し、追ひてからめたるなり、こゝは男の上をまづ一わたりいひ終れるあり、

女をば草むらの中にかくしおきて、にげにけり、みちくる人、此野







もにこもりをれば、火をつけるとあつらふるなり、萬葉第十四雜「おもしろき野をばな焼きそ古草に新草まじりおひはおふるかに」古草を焼くは若草をよくおひたせむためにて、若草は焼くものならねば、其心にあるべし、古意古今集に春日野は云々として、春のはじめの野遊の歌なるを、初の句のみかへて、詞を右の如く、いともことざまに作りて、一の條とせしなり、春日野は今日はなやきを云々としてよめるは、えもいはするはしうおもしろし、且こもれりとは、其野の中にあるを、おはやうにいへるにて、みやびたるを、此文にては女も男も草むらの中にかくれこまれることにあせるは、語もせまり意もいやしげにて、古人の意にあらず、さるに顯昭等をはじめて、此文は古今集より前にありしを、春日野となはして、えらびとれりといふは、いふにもたらず、古歌をよく心得ぬさまはいふかし、六百年ばかりいにしへの人は、みづからよめる歌は心得しさまなるを、古歌といへば心得のたがへるが多く侍るは、いかなる事にやとおもふに、歌よむとても古學のなかりし故なりと知らる、すべての道の人も、ろのなすわざと學とふたつのかねがたきなり、たゞ歌を時につけてよまば、學文なくともよかりなむといふべけれども、學文なき故に、其歌も後世のいやしく苦しき姿となりゆきぬるなり、新釋此歌の五

もとは春日野はとありて、古今集にては野遊の歌なるを、武藏野として意をかへたる記者のたくみなり、此物語にては、つまも我も草むらの中にかくれこもりをれば、今日はを焼きうとあつらへいふ意なり、さて男はにげたれど、このわたりに、かくれをるらむと女はおもひてよめるなり、草深き野のさま見るが如し、古意の説はひがことなり、

とよむをきゝて、女をばとりて、ともにおていにけり、

臆断ともにあてどは、女をとりかへし男をからめて、ともにつれて歸るあり、大鏡に二條後のいまだ姫君にておはしける時、業平中將しのびてかくしてはべりけるを、御せうどの君たの基經の大臣、國經の大納言などの、わかとおはしけむは、このことなりけむ、かくとりかへしにおはしたりけるに、つまもこもれり我もこもれり、とよみ給へるに、此御事なるべし、これは虚を實にせるものなり、古意女をばとりては、男をば既に他所にてとらへつれど、女をしもまだ得ねば、此野にこそとて、火つけむとするに、女のかくよめるをきゝつけて、どめ得つるなり、ともにあては、既にからめられたる男と今得たる女と共にひきゐていぬるをいへり、此文の始終なり、且女をばてふ語は、歌をよみけるをきゝて、女をばとりてと心得べし、



さらでは助辭におもひたがへのあるべきなり、或説に、道來る人の具してゆくならどのみいへり、さらばゐていにけりにて足りおむを、ともにとあるは、男をかねたるなり、古文の言少くで首尾あるをおもへ、又此條を俳諧なりといへる説は、業平朝臣のかゝるめにあふべきにあらずとの意なり、此文すべて業平ならぬ業平と心得ば、いかにもありなむを、此條は雅言、此條は俳諧なといふは、すべてあらぬひごととなり、新釋いにしへは歌はよみては聲あげてうたひしもの故に人のさくなり、聲するにつけてこゝにありと知りて、女をばとりたるなり、ともにゐては、男は見えず、歌よむをきいて女をばとりたる處へ、他所にて男をからめたる人もかへりきあひて、さてこゝよりともにつれていにしといふ意なり、此處いと詞すくなに省きてかけり、○業平武藏にありて國守の女にかよひけること、十段にも次の段にも、其意見ゆ、此段は其女をつれ出して、かくれしのおを、人々に見つけられたるよしにて、いとおもしろくかきたり、あなむちにつくり事とのみいふべからず、古意にも新釋にも古今集の春日野はといふ歌をとりて、此段をつくりたるやうにいへど、さにはあらず、此書よりとりて、古今集には春日野はとかへて出し、大鏡には二條の后にとりなして出せるなり、

十三むゝ、武藏なる男、京なる女のもとに、きこゆればはづかし、きこえねばくるとかきて、うはがきに、むさしあぶみとあきて、れこせてのち、音もせずなりにければ、京より女、

拾遺抄きこゆれば云々は、申せばはづかし、申さねば苦しとあり、かくいふ心は、武藏と京と遙なる處より、詔書をことづけむ事心もとなければ、まづ心見に何となくおほかたにかきて、ことごとくにはかきつくさでやるなり、むさしあぶみ、これも武藏の國よりなぞかくべきを、彼用心に武藏證とかきまぎらはしたる心にや、かやうにおほめかしくかきやりても、心を通じたる女は、業平の手跡にても、日ごろの心ざまにても、やがて其人の文とおもひ知るべし、又東國へ下りし業平なれば、武藏證とかきたるからに、そのまゝおしはかり知るべければなり、音もせずは、彼文のたしかにといきたる返事きくまでは、わざと音づれ給はざりまなるべし、其業平の心づかひは尤ながら、女は其心を知らねば、かくおほめかしき文ばかりにて、其後無音をうらみたるなり、臆断武藏なる男は業平なり、聞ゆれば云々は、さきにたのむの雁とよめる一段の心、人のむことなれりと見ゆれば、京にちぎりおきし人に、さる事ある身なれば、おとづれ聞えさせむも、おもはむする所はづかし



く、ざりとて音づれざらむは苦しとあり、うはがきは、日本紀に題をうはふみとよめり、紫式部の歌に「北へゆく雁のつばさに言づてよ雲のうはがきかきたえずして」むさしあふみは信濃まもみなとのたぐひ、彼國の名物なり、かくかけるやう、あふみはかくる者なれば、きこえやせむ、きこえずやあらむ、ふたつの間をかけたるといふ心なり、古今集に「なる世の中の玉たすきなる」とよめるたぐひなるべし、古意こはあづまにて、又女を得てありと聞えさせば、京の妻のおもはむ心はづかし、いはざらむ、いたもとのめをおもはずしもあらぬ心よりはうしろめたく苦しとなり、よりて右の如く文書きて、表書（うらな）にかけてうこをもおもふといふ心にて、むさしあふみとは書きてやりつるなり、此文おもしらく短くかきとれり、武藏鑑は、むかし此國より出せし故のなるべし、此國に、むかし高麗人を多く置れしなれば、（武藏國に見ゆ、即、郡名ともなりしこゝ）さるものらむ作りうめたる高麗やうの鑑をば、後までも出せし故に一の名となれるにや、古今六帖に「さだめなくあまたにかくる武藏鑑いかにのればかふみはたがふる」てふ歌もあり、新釋これは男よりおこせたる文の中に、むねとある詞をとり出で、いさゝかかけるなり、きこゆればはづかしといふは、あづまにて又女を得たる事をほのめかして、いひまぎらはしたる詞なり、きこえねば苦しといふは、京の女とは初より又なくおもひかはしたる中なれば、はづかしとてひたふるにこめていはねば、心のへだてあるやうにて、苦しといふ意あり、よき人がらならずや、物のあはれ知りてなさせ深き人は、げにさやうのものにて、此物語のをかしくすべれたる所なり、これをまねびて明石巻に紫の上におくり給へる源氏の君の文の申に、又あやしう物はかなき夢をこる見侍りしか、かうきこゆるとはすがたりに、へだてなき心のはきは、おぼしあはせよとかけり、これは明石の上にあひ給へる事を、ほのめかし給へるにて心ばへ同じ、むさしあふみは、蜻蛉の日記に、うはふみに西山よりとあるをおもふに、これは武藏よりとかくべきを、うなたをのみかけておもふといふ心をこめて武藏鑑と風流にかけるなり、音もせずありぬるは、京と田舎の文のかよひ、昔は今の世のやうにたやすからねば、おもひながら久しくえ音づれせざりしなるべし、

武藏鑑さすがにうけてたのむに、いとは、ぬもつらととふもうる

さし

拾遺抄武藏へふりすてゆきし男の、一向はじめより音せずは、おもひ絶えてもあるべきになまじひにきこれば、はづかしなど、おぼめかしきながら音づれ給



へば、女もさすかにかけて頼むからには、かく其後足ひ給はぬもつらし、又一度と  
ひたるにつけて、頼む心も出来、其後とはぬうらみもろくば、とふもうるさし、とあ  
り、断證をば、さすといへば、さすかにとついたり、たのむの雁の事をさして、あ  
た人とはおもひあがらさすかにかけたのむ心には、か言たえてとはぬもつら  
し、まめならぬ心と見れば、とふもうるさすおもふとなり、古意は、いひやりつ  
る心をうけて、うらみもはてす、たのみもやらぬさまの答なり、さて證は左右にむ  
かへてかくる故に、かけておもふといはむ冠辭とせし、さすも證の語なりといへ  
ど、六帖の歌にも、かくるのる、ふむとはあれ、さすといはず、こは玉あづら君を  
かけつゝなせよめる如く、語を隔て、つゝ古歌の例なるをや、今の入證の小は  
世をば、さすかねといふは、此歌をさすとつゞけたるとおもふよりいふならむを、  
又そのさすかねを証として、此語をさすとさむとするは、かまにもたらすうるさし  
は古本に愁と書けるにて、意は知られたり、新釋證はかくるもの故に、かけてたの  
むには、といはむために、武藏證とはいへるあり、さすかにといふ詞を中にへだて  
たるは、一の格ありと古意にいはれたるが如し、うるさしは、あるをいとふやうの  
意にいへり、物語ふみにあまたある詞にて、皆さやうなり、愁の字の意にはあらず、

古意の説ひがごととなり、一首の意は都あづまとへだりて久しくわかれをり、又  
あたし心のおはするやうなれど、おしちぢぎりをおもへば、さすかにかけてたの  
みにするには、たねて音づれ給はぬもつらし、又とい給ふにつけては、他女にかよ  
ひ給ふよしをさけば、其事のいとほれもするといふ意あり、第三句其本におもふ  
にはとあるは、わろし、他本皆たのむにはとありて、こゝによくかなへり、  
とあるを見てなむ、たへがたきことちしける、  
とへばいふと、ねば恨む武藏證あるをりにや、人は死ぬらむ  
古意とへばうるさしといふ、とはねばつらしとらむるに、せむすべなく苦しく  
おぼゆるがあまりに、下の句はいへり、新釋とひてへだてなくいへば、うるさしと  
いひ、又とはねばつらしといへば、戀ひ死ぬるより外にいかたともせむかたなし、  
人の戀ひ死ぬるといふは、かゝる時にやあらむといふ意なり、〇とへば恨をいふ  
とはねば又恨をいふ、さていかせばよからむ、かゝるをりにや、人は死ぬらむと  
なり、武藏證は、かゝるといふはむがために、前の武藏證かけてたのむといへるが  
如し、死ぬは、戀ひ慕ひて死ぬるにはあらで、當惑して死ぬる意なり、  
(平四)むかへ男みちの國にすぐるにゆきいたりけり、そこなる



女京の人はめづらかにやおぼえけむ、せちにおもへる心なむありける、さてかの女、

拾遺抄中將の美男にて、女のおもひかけたりとはいはざるかささま、おもしろきにや、古歌ことわりおさらけし新釋みちのおくの國をみちの國といふは、はぶきすぎたることなれども、そのころさやうにいひなれたるまゝにかけけるなるべし、さてはるけきみちのおくまではゆくまじき身のゆくをす、いとはいへり、  
なほくゝに戀に死なすはくはこれぞなるべかりける玉の緒ばかりあり

愚見抄くはこは、かひこをいふ玉の緒ばかりは、しばしといふ心なり、古今集に死ぬる命生きもやすると心見に玉の緒ばかりあはむといはなむかひこは一年の中に死ぬるものなれば、かくいへり、拾遺抄なかゝには、なまじひにといはむが如し、うき戀になまじひに死なで物おもはむよりはの心なり、斷これ、萬葉集第十二になかゝに人とあらずは桑子にぞならましものを玉の緒ばかりこれをすこし作りかへたり、戀といふものは、あひ見ることを樂む、さもなければ、せめて忘れむとおもふに、うれも又かなはねば、なかゝに戀にも死あであるものな

らば桑子のふたこもりなををもして、ちぎり深きものなれば、玉の緒のみじかきはどのしばしだに、この桑子とならばやとよめるなり、なかゝに桑子にさへあらばやといへるわたり、せちにねむる心なむありけるといへるにかなへり、淮南子に蠶食而不飲二十日而化、かく命みじかきものをあれば、玉の緒ばかりといふもかなへり、古歌こは萬葉集になかゝに人とあらずはてふ歌をすこしかへて、戀に死なすはとは、同卷にいつまで生きむ命予おほよそは戀ひつゝあらずは死ぬるまされり、此意にて戀のならぬには死なばやとおもへど、なかゝに死なすは桑子となりて、雌雄ふたこもりてもありぬべきものを、とても玉の緒ばかりみじかき命なるをといへり、さては三の句にあまり事多くこもりてわるかれど、此記者の作れるは、かくのみむつかしきぞ多かる、よき歌とおもふべからず、たゞ興に備ふるのみ、新釋此歌の戀に死なすはといふ意、師の詞の玉の緒といふ書に、此歌のすははむよりはと解べしといはれたるにて、よく聞ねたり、一首の意は、なまじひに戀に死なむよりは、かひこにぞなるべかりける、しばしの間なりともといへるなり、かひこは命短くても、雌雄ちぎり深きものなる故に、うらやみていへり、



歌さへぞひなびたりける。さすがにあられどやおもひけむ。いき  
てねにけり。夜深く出でにければ女。

同疑抄ひなびたりは、田舎めきたるなり。夜深く出でにければは、心とめむやうも  
なきか、あくるを待たで出づるなり。源氏末摘花の巻に、何事につけてか御心もど  
まらむ。夜深く出で給ふとあり。断歌さへといふに、人がらのひなびたる事は知  
られたり。古意源氏末摘花の巻に、何事につけてか云々とかけり。こゝには心のど  
まらぬ事をいはず。知らせたるが古文なり。古文今文のわからぬに、これらにてあきら  
かなり。夜深くは、古本に三更と書きたり。夜半のすぎにたるをいふなり。五更を曉  
とすれば、いとやく出でたるを知らせて書けるなり。新釋るなかびて心のおく  
れたる女をも、さすがにあられどおもふころ、なまけ深くよき人あれ、されど心の  
とまるべきにあらねば、夜深く出で歸るなり。諸註に末摘花の巻をひき出でた  
るげによく似たり。こゝをおもひて、紫式部のかきつらむ。

夜もあけはきつればめなむくたうけのまだきになきてせなを  
やりつる。

拾穂抄断等にはきつにはめなてとあり。今古意新釋に従ふ。

同疑抄くたかけは家鶏なり。たかけとはかりもよめり。里中になくなるかけの  
よびたてといたはなかなぬかぬれづまかも。断きつは、きつねの下略なり。萬葉  
集十六にも、さす銅に湯わかせ子と。櫻津の檜橋よめ來む。狐に浴さむとよめり。  
はめなては、狐にふはせてといふ詞なり。下にもかれなてあまのどよめり。竹取物  
語にさらは菫にぬれたる衣だにぬぎかへなてなむ。たあまうできつ。明詠集にな  
かたにきえはきえなて埋火のありてかひなきものおもふ身はとあり。これに  
同じく、くたかけは、東國の習家をくたといふといへり。元真集に物名にからくたも  
のをよめる歌に、こゆるぎの渚の風のふきしからくたものこさす波もよせけり。  
此くたものこさすは、東の風俗によめて、あまのすむ家をいへるなるべし。かけは  
家鶏なりと字音につきていふ説あれど、古事記には八千矛の御神の御歌にはつ  
どりかけはなとよませ給へば神代には和語ならぬ。異朝の音の詞はあるべか  
らぬ。うへに、神樂歌に庭鳥はかけるとなきぬとあれば、かれがなく聲をききて、や  
がておぼせたる名なり。もろこしにからすを鴨といふも、かれが聲をもて名とせ  
るは同じ。また、日本紀に豫の字をよめり。此字を又はあらかじめともかねて  
ともよめり。皆同じ心なり。せふは夫をせといふに、なの字をうへたるなり。六帖に



「夏の夜の子持がらすのさがすかむ夜深くなきて君をやりつる言心のとまらぬ故すとは知らで庭鳥のはやうなきのるまゝに夫の歸りたりとおもひて夜明けは鶏を狐に食せむとくみていへるがをかしきなりはめなむは古本に爲食と書きたるにて知らる今本にはめなむとあるはんをてにあやまりしものなり萬葉にあづま歌多かれどはめなむをはめあててふ如くいへるはなしあづま人とても五十の音の外に出でたる言語はなきなりくだかけは百濟鶏ならむと我友興津正辰てふ人のいへる實にかあへり神代紀に常世長鳴鳥といへるも其始は他の國より渡れる故なるべし後にしやむ鶏ちやば鶏などよべるも出でたる處を名によふをもて百濟より渡れるを略してくだかけといふこと疑ふし或説に東國にて家をくだといへば家鶏の義なりといふは附會の説なりあづまにても家をくだといふことなしこれいもし元興集にこゆるぎの云々よめるこのくだを家のこととおもふにや波もよせけりとおるからは芥木つみあをものこさず波と共に寄せくるとこそ聞ゆれ新釋一首の意は夜もあけなば狐にはましめなむわろき庭鳥のいひも鳴く時より早く鳴きて夫をかへしやりつるといふといへるなりくだかけのくだはあらくいへるなりとおもふよゆ所は奥儀抄にくだはくづといへるにやくづ庭鳥とよめるにやとあるをいじめにて都にて賀茂季鷹縣主も腐かけにて庭鳥をわろくいへるならむといへりしこはとゞきすの類なり宇治拾遺にやすからぬ事こそわれ物もおぼえぬくさりめにかなしういはれたるとあるも同例なりさて又立入信友字は伴州五郎といふ人の江戸よりいひおこせけるは此歌は鶏の宵鳴といふことをしたるをまことの曉すと心得て男のかへりたるおとにてよみたる歌と聞ゆ夜深く出でにければといへると歌の意とを考へ合すべしさて歌の意きつは吾友平田篤胤が物語におのがうまれし國の出羽の秋田のあたりにては木もてつくれる大なる箱を家々にすゑおきて水を蓄ふる器とせり其器の名をきつといふ老人の物語にこのきつ昔はおしなべて家ごとにありしものありといへるが近きころはおほかた瓶を用ふる事となりてきつをすゑおく家は少く其名を知るものも多からずこれ古き東語にてきつにはめなむの歌は鶏をきつといふ器の水中へうちはめむといへるなるべしといへりこはいとめづらしき證ある考なるにつきてなほ考ふるに今も雞の宵鳴するをにくみてしかさせじとするには雞の腹を水にひたし冷せば其事やむものなりすは腹の熱をさます術なりとすはめあむは水に入るこ

にくだはくづといへるにやくづ庭鳥とよめるにやとあるをいじめにて都にて賀茂季鷹縣主も腐かけにて庭鳥をわろくいへるならむといへりしこはとゞきすの類なり宇治拾遺にやすからぬ事こそわれ物もおぼえぬくさりめにかなしういはれたるとあるも同例なりさて又立入信友字は伴州五郎といふ人の江戸よりいひおこせけるは此歌は鶏の宵鳴といふことをしたるをまことの曉すと心得て男のかへりたるおとにてよみたる歌と聞ゆ夜深く出でにければといへると歌の意とを考へ合すべしさて歌の意きつは吾友平田篤胤が物語におのがうまれし國の出羽の秋田のあたりにては木もてつくれる大なる箱を家々にすゑおきて水を蓄ふる器とせり其器の名をきつといふ老人の物語にこのきつ昔はおしなべて家ごとにありしものありといへるが近きころはおほかた瓶を用ふる事となりてきつをすゑおく家は少く其名を知るものも多からずこれ古き東語にてきつにはめなむの歌は鶏をきつといふ器の水中へうちはめむといへるなるべしといへりこはいとめづらしき證ある考なるにつきてなほ考ふるに今も雞の宵鳴するをにくみてしかさせじとするには雞の腹を水にひたし冷せば其事やむものなりすは腹の熱をさます術なりとすはめあむは水に入るこ



となりはめははませにて、すべて物の中へこなたより入ることをいふ詞にて、今水中へ物を投るゝを**はめはむる**などいふこれなり、女此鶏の又宵鳴せむことをにくみきらひて、しかせむといへるあり、くたかけのくたは鷹にて鶏を深く悪みての、しりたる言なり、此歌をおきて鶏をくたかけといへること聞えず、一首の意は夜あけなば、きつにうちはめなむ腐鶏よ、汝が宵鳴せし故に、曉すとおもひて、夫をかへしやりつるが、くやしうかあしきを、かさねてしか宵鳴はせさせじといへるなりといひおこせき、いとめづらしき説に予ありける、又同じ人のいひけるは、奥儀抄に此歌の初句を、我宿のとあるは、そのかみさる本のありしにこそ、水槽を家々にすゑおきし例は、日本書紀皇極天皇の巻に、毎門置盛水舟一木釣數十、以備火災とありといへり、はめなむ真本に従ふ、はめあむとかける古寫本もあり、と信友いひおこせき、さるを臆断にさえはさえなでと、同じ事にとけるは、たがへり、さやうならば此歌宵のまにきつよはみなでとあるべきなり、夜もあけばといふ詞にも、きつにはめなむは、水槽にうち込む意といへるぞよき、又狐に食はすべしといふ意をかけたりと見むも、よからむか、くたかけのくたは腐の義あり

といへるいかゞ、古意に百濟の意といへるぞ、おだやかあるべき。

といへるに、男京へなむいぬるとて、

くりはらのあねは、の松の人ならば都のつとにいざといはましを

臆断これは古今集第二十みちのく歌に「をくろさきみつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを」といへるを、かくひきかへたり、くりはらは栗原郡の名なり、續日本紀に神護景雲元年十一月乙巳、置陸奥國栗原郡、本足伊治城也、和名抄に栗原郡栗原、あねはの松は、あねはといふ處に、高砂武隈などの如く名をいふ松のありけるなるべし、都のつとは都への土産なり、萬葉に山づと濱づと道行づと家づとなどよめり、苞の字なり、俗にわらにて物あせつゝめるをつとといふ此義なり、うつば物語「きく人はあねはの松の風なれや昔のこゑをおもひいつるは」古意あねはてふ處におもしろき松のあるをもて、うれめづるさまにいひなして、さて女の人がまゑくば都へいざなひてむ者をといふ意をそへたり、其意は下の詞にて見ゆ、あねはは、栗原にあねはてふ地の名ありつらむ、今もあねは村てふありといへり、昔の處にや、新釋みちのおくにての事なれば、其國の栗原郡あねはとい



ふ處に、名高き松のありけるをとり出で、うの松が人ならば都人に見せまほしければ、都への土産にいざといひて、さうひゆかましを、人ちらぬ故に、さもえせぬといふが、歌のおもてにて、下には此女の人らしくはといふ意をそへたり。○古意には人がましくばといひ、新釋には人らしくはといはれたり、こは些細の事ながら少しく意たがへり、わねはの松の名物なるが如く、此女のすぐれたるものならば、都へつれゆかむものをといふ意をそへたるなり、古今集雜上に住吉の岸の姫松人ならば幾世か經しとどはましものを水の上にかべる船の君ならばこゝがとまりといはしもの、をどある、此歌のさまに似たり。

といへりければ、よろこほひて、おもひけらしとぞいひをりける、  
 應斯よろこばひては、新拾遺集に花山院の御製、なには江にいひつたひたる、ふることばなからの橋のながらへて人を渡さむ、かまへをしたくみいでなむ、ひたらくみよるこほしくは、おもへとも云々、かげろふ日記に年月はつもれとおもふやうにしあらぬ身をしなげくは、聲あらざるもよるこほしからず、此よるこほしくに同じ、たやすきをたはやすくなせといへる類なり、おもひけらしとは、我を深くおもへばこそ、都のつとになせは、よみければといひ居たる心なり、古意下つ心には

そしりて人ならばといへるを、おろかなる女にておもふ故にいへるとよるこほを笑ひて、しか書けるなり、よろこほひは、よろこびをのべていふのみ、新釋わねはの松の歌の下の意をばさし知らで、さうひていなまほしげにいへるをよるこびて、此男我をおもひけりくと言種にいひをりけるなり、あなかびたる女の、かく心のおくれたるに、かるくしくさし出で、歌よみ、がちに我はめする、よにくちをしきさはに、ありける、かゝる女のしわざをもいへるは、次の段の用意ある女のさまを、いとをかしく見せむとてなり、おもひけりく、塗本に従ふ、けらしは、けりくをうつし誤れるなり、かなの形よく似たり、○都のつとにといへる歌を、あさはかにもおのれを都につれゆく意と心得て、かの人は我をおもふや、うなりといひて、よろこび居たりとなり、けらしは推量にいふては、にて、二段にも「ひとりのみにもあらざりけらし」とあり、新釋にけらしはけりくをうつし誤れるなりといへど、いかでさる誤のあるべき、けらしといふかた古文の体なり、

(十五)むかじみちの國にて、なでうことなき人のめらあよひけるに、あやしうさやうにてあるべき女どもあらず見えければ、  
 古意にはむかし男ありけりさやうにてあるべき女にてもあらずければ新釋



に「なでふことなき人のむすめにかよひけるに」さやうにてあるべき女にはあらず見えければとあり、今拾穂抄臆断等に従ふ、  
 愚見抄なでふことなきは何事もなきといふことなり、あしからずよからぬ人をいふ、源氏東屋の巻に、なでふことなき人のすさまじき顔したるとあり、あやしうさやうにては、始終かよはずべき女とおぼぬぬを、あやしとおもひて、其心を知らまほしくねもひて、歌よみてやるなり、拾穂抄かよひけるとある詞をうけて、あやしうさやうに夫ありあがら人をかよはずべき女ともならずとの義なり、臆断なでふことなきは、何ばかりの人にてもあらずといふ心なり、これは夫をいふなり、枕草子にくきものゝ中に、なんであうことなき人のすゝろにゑがちにて物いたういひたるとあり、あやしうとは、此女はよしありて、さやうのなでふことなき人のめにてあるべき人と見えねば、あやしうねもひて、歌をよみておくるなり、又あやしうのしづなといふあやしは、いやしなれば今もいやしうといへるか、古歌なでふことなきは何といふ事なきにて、とりていふばかりもなき人をいへば、上になほ人といへるに同じ、なにといふを音使にて、なんであうといへり、あやしうは上の條の女とはいと異にして、これは用意ある女なれば、かのなんであう事なき人の妻

にてあるべうもおぼえず、されば女の本意を疑はるゝ故にあやしうといへり、今本に女ともあらず見えければとあるもあしからぬと、言すくななるが此書の例なれば、古本を用ふ、新釋なでふことなき人は俗言になんでもなき人といふやうのことにて、親のよしあるにはあらずぬに、おもひの外に其娘のすゞれたるをいひむとてなり、むすめ塗本に従ふ、人のめとある本は、むすのむしを落せるなり、あやしうとは、いかある故にかあらずむとあやしみおもふをいへり、さやうに男をかよはまてあるべき女にはあらず見ゆとは、女のうちとけず、よきはどにてとぢめてむとするやうなるをいへり、さるは物のあはれ知りて男のねき言に従ひて、あひてはあれども、末つひにわかるべき中なれば、あかてこそれもはむ中ははなれなめと古歌にいへるやうの心づかひにやありけむ、いよゝ深き用意ある女にて、其心のおくの知り難ければ、こゝろ見むとて歌よみておくれるなり、女には塗本に従ふ、他本皆わろし、○人のめは、人の妻なり、竹取物語にめのおうなにあづけて養はずとあり、新釋に人のむすめとあらずためられたるは、次のあやしうさやうにてあるにかなはず、あやしうは、あやしういふかしくおもふなり、さやうにてあるべき女云々は、かくかよはるべき女とも見えずとなり、此女は用意ある女にて、



しかも夫ある身なるに、我身の事心得ずと、いふかりおもひて、歌をやりしあり、  
志のお山志のびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく

闕疑抄しのびてかよふ道もがなといふは、人の心の中へしのびてかよふ道のあ  
れかしとなりしからば人の心のおくも見るべきものとなり、古今集に「おもふて  
ふ人の心のくまごと」にたちかくれつゝ見るよしも「な」麻斯志のお山は處につ  
けたる名をかりてしのびてとつゞけたり、我身のしのびてかよふ如く人の心に  
もしのびてかよふ道もがなしからばおもひおもはず心のおくも見るべきすと  
なり、古意さる人にしたがひはつべくも見えねば、つひには離れて我によらむの  
したつ心ありやなしや、其心の奥を知らばやといふなり、古今集に「おもふてふ人  
の心のてふ歌をとりて處にかなへる名所もてよめるあるべし、此記者の歌なら  
むにはよろしきなり、ては心によしある女あれば、男のよみてやれる歌も心せる  
さまならむ、新釋信夫山は陸奥の山の名にて、しのびてといはむためにいへり、さ  
て、かよふみち、おく、なほも山の縁語にてしたてたる歌なり、一首の意は、人の心へ  
しのびてかよふ道もあれかし、さならばわけ入りて心のおくを見るべくといへ  
るなり、深き用意ある人は心の奥のげに知り難きものにぞありける、○古意に古

今集の「おもふてふ人の心のてふ歌をとりてよめるやうにいはれたれど、此歌は  
新勅撰集に業平朝臣として戀五に入たり、古今集は業平死後の撰なるを知られ  
ざりしにや、

女かぎりなくめでたしおもへど、さるさがなきえびす心を見て  
はいあふはせむは、

古意には「えびす心を見えていかいせむ」新釋には「えびす處にていかいせむ」と  
あり、今拾穂抄臆斷等に從ふ、

拾穂抄其心を見ぬはせは、ゆかしくて、すでに見ぬては、ゆかしげさむること、世に  
あることなり、又一説に、さるさがなきといふより、女の用心なり、女我心をかへり  
みれば、さがなきあづま夷のおく深き心もあきものを、それを男の見ては、いか  
せむとおもふなり、せむはのほの助字なり、臆斷まことにおもふか、おもひぬかを  
知らまほしきも、人を永くおもふ故なれば、人の心のおくも見るべくとはいへる  
を、これもよろこびて我をおもひけるよとめづるなり、さがなきり、日本紀には惡  
の字をよみ、萬葉には恐の字をよめり、すこしよしあるやうなれば、心のおくも見  
ばやとはよみたれど、まことにさるおそろしきえびす心のおくを見たる、いか



いせむと用意するなり、古意此女は彼京人をいじめたしとおもひぬるからは、心のおくをもあらはさまはしけれど、なほ我東夷のさがなき心を見えあらはしてはいか、いせむいはでやみてむものなりと、みやこ人をやさしみて、いよく用意の深きなり、右になでふことあきが妻にてはあらじとほめたる、この用意と始終したる文なり、上の條のしれたる女は、用意もなくひなびたる歌をも多くよみて、笑へる事をもよろこべるに、此條にはかくよしある女をいひて歌の答をもわざとつゝしみてせざるをもて、二條を對にしたる文のさま、えもいはすれもしろし、今本に見てはいか、いせむはとありて、えびす心とは、ぬしある女にかくいふは、えびす心よと、女の思ふことにいふ説は、いとしたり、さること、すき心ところいはめ、はた都人は放縱なりとも、いかでえびす心といはむ、此處は殊に字の乱れたるをも正さず、すべての文意をも心得ぬ故のみ、古本に見而如何詮とあれば、見えていか、いせむとよみて、女の用意せるさまをいふこと明あるをや、詮は借字にて、爲ひなり、今本せむはのは、衍字なり、さがなきは、神代紀に神性の字をさがとよみて、其外うき世のさが、春のさがなと歌によめるをも合せ見るに、くせてふことなり、さてならひくせをもいへり、さがあきとは、不祥又悪の字をもよみて、悪はあしきくせ、不祥はあしきさざしのこと、なれり、これらは轉せるなり、さればさがなきえびす心とは、あしきひなびせをいふなり、新釋都の人にていやしからず、歌もおもしろく、何事もうちあひすぐれたれば、かぎりなく結構なる事とはおもへど、さるさがなきえびす所にて、いかはせむ、深きおもひのそはぬうち、かくとぢめてむとすといふ意をこめて、いひ残したる文なり、さていかはせむといふ故、都のよき人のえびす處に住みつくべきにあらず、さる處にねひたちし身の、ともに都にのぼらむは、はづかしくて、せむかたなくおもふなりけり、歌のかへしせぬも、おなかびたる手つき口つきを耻ぢて、えさし出でぬなるべし、さて又みちのおくを、えびす處といふよしは、日本書紀の齋明天皇の卷に蝦夷の事をいへる所に、國有東北とて、類有三種、遠者名都加留次者粗蝦夷、近者名熟蝦夷と見えたり、いにしへは三種の夷とも都加留よりこなたに皆ありしかば、陸奥は夷のすみかなりけり、又元慶五年五月三日授陸奥蝦夷譯語外從八位下物部斯波連永野外從五位下といふ事三代實錄に見えたり、これは此物語の時代に近き比なるに、かく通事の官人のありつるは、其頃も陸奥は夷多ければなり、えびす處にて塗本に従ふ、他本にえびす心とある、ところをこゝろにうつし誤れるなり、

て、悪はあしきくせ、不祥はあしきさざしのこと、なれり、これらは轉せるなり、さればさがなきえびす心とは、あしきひなびせをいふなり、新釋都の人にていやしからず、歌もおもしろく、何事もうちあひすぐれたれば、かぎりなく結構なる事とはおもへど、さるさがなきえびす所にて、いかはせむ、深きおもひのそはぬうち、かくとぢめてむとすといふ意をこめて、いひ残したる文なり、さていかはせむといふ故、都のよき人のえびす處に住みつくべきにあらず、さる處にねひたちし身の、ともに都にのぼらむは、はづかしくて、せむかたなくおもふなりけり、歌のかへしせぬも、おなかびたる手つき口つきを耻ぢて、えさし出でぬなるべし、さて又みちのおくを、えびす處といふよしは、日本書紀の齋明天皇の卷に蝦夷の事をいへる所に、國有東北とて、類有三種、遠者名都加留次者粗蝦夷、近者名熟蝦夷と見えたり、いにしへは三種の夷とも都加留よりこなたに皆ありしかば、陸奥は夷のすみかなりけり、又元慶五年五月三日授陸奥蝦夷譯語外從八位下物部斯波連永野外從五位下といふ事三代實錄に見えたり、これは此物語の時代に近き比なるに、かく通事の官人のありつるは、其頃も陸奥は夷多ければなり、えびす處にて塗本に従ふ、他本にえびす心とある、ところをこゝろにうつし誤れるなり、



かなよく似たり。○えびす心は、拾穂抄に一説にさるさかなきといふより女の用心なり云々といへるをよき、おく深くもなきえびす心を見ては、男も此後我をおもふまじ、さては答せざるべきか、答せざるもわろきやうなり、いかゞはせむはとて、つひに歌のかへしをせざりきといふ意を、いひ残したるなり、古意の説もおほかた同じ、さるは、かゝるなり、さかなき、源氏筆木の巻に、しのび給ひけるかくろへ事をさへ語り傳へけむ人のものいひさがなきよとあり、えびす心は、新釋にえびす處とわらためられたれど、すでに陸奥にありて此女にかよひけるを、えびす處を見てはとありては、前後の詞にかなはぬやうあり、さればこのを見てはをもにてとせられたれど、これにつきては、うつし誤とも何ともいはれず、とにかく古文はみだりに改むべきにあらず、見てはは、男の見てはなり、せむはのは、いひ残したるを知らするに必要なり、古意新釋に除けるはわろし、

伊勢物語講義卷一終

伊勢物語講義卷二

(十六)むかひ紀有常といふ人ありけり、三代の帝に仕うまつりて、時にあひけれど、後は世變り時移りにければ、よのつねの人のことともあらず、

臆断三代の帝とは、仁明文徳清和なり、或説に淳和仁明文徳の三朝に仕へ奉りて、清和天皇の朝に至りて衰へたるよし見えられたれど、これは國史をよく考へずして、強ひて此段にかなへていへるなり、三代實錄第三十に、元慶元年正月廿二日乙未、從四位下周防權守紀朝臣有常卒、有常左京人正四位下名虎之子也、性清警有儀、皇少年侍奉仁明天皇、承和中擢拜左兵衛大尉、數年右近衛權將監兼近江權少掾云々、貞觀九年爲下野權守、秩滿爲信濃權守、十五年授正五位下、十七年爲雅樂頭、十八年至從四位下爲周防權守卒、時年六十三とあり、始終を擧げて文徳天皇の御世の昇進を略せり、元慶元年より逆に數ふれば、承和元年は有常十九歳なれば、少年侍奉仁明天皇といへるにかなひて、淳和天皇には仕へ奉られざること明らかし、又貞觀の末に至るまで、官位の昇進をとゞこはること見えねば、此物語はおのづから



家の貧しかりけるを、かくいひなせるにや、實錄にあらざること、史傳に合せて知るべし、世變り時移りにければは、陣鶴長恨歌傳に時移事去樂盡悲來とあり、よのつねのごともわらず、ごとはごとくなり、さる人あれども、おどろへたるさまは、平人の如くにちきなり、古意史によるに、まだ十九ばかりより仁明天皇に仕うまつりて、さて妹の腹に文徳の一の皇子維うまれ給へば、時にあひける知るべし、ざるを文徳位につかせ給ひて、其年の冬、四の皇子維仁これを清を太子に立給ひて、後は、げにさせる榮も聞えずして、清和天皇の貞觀十五年となりて官位昇れり、よりておもふに、右の貞觀の中ころより前嘉祥の末のあひだ、時にあはぬやうにてありしを、いとく衰へたるやうに、物語には作りなせしなり、新釋仕うまつりてと句をきりて、時にあひけれを後云々として、つゞけてよむべし、しかよまざれば三代時にあひたるやうにきよまがふべし、時にあへるの三代のうちにては、はじめのほどもあり、

人がらは心うつくじう、あてのかなるを好みて、こと人にも似ず、貧しく経ても、なほ昔よかりし時の心ながら、よのつねの事も知らず、

古意には、人がらは心わてなる事を好みて、こと人にも似ず、わたらひ心なく、貧しくても、新釋には、世のわたらひ心もなく、貧しくても、なほ昔よかりし時の心ながら、とあり、今拾穂抄臆斷等に從ふ、

臆斷わてはかは、たいわてにて、はかはそへたる詞なり、うこはかなどの如し、こと人にも似ずとは、けだかき心なみく、の人に似ぬなり、貧しく経ても云々は、大方の人は貧しければ、暗ふ心なとのあるを、此人は貧而無諂といへる如く、むかし時にあひて世のよかりし、時のまゝにて、心ざしをくださぬなり、心ながらのながらは、それながら、さながらの如く、日本紀に隨任天神を、かみながらとよめるながらもこれなり、よのつねの事も知らずとは、世務を知らぬなり、論語に子曰吾少也賤故多能鄙事君子多乎哉不多也、莊子に聖人不從事於務、これまでは有常をはむるなり、性清警有儀望といふにあたり、以上此段の中にての序あり、古意實錄に此人をほめて清警有儀望てふを、かくかきひろめたるものなり、わたらひ心の語、古本にあり、こは賤民のうへにのみいふこととおもふ人、今本にこの語を去りしにや、新釋わてはかなる事は上品めきたる事なり、心ながらには心のまゝにといふに同じ、よの常の事とは朝夕のくたくしき家の内の事あり、貧しくなりては、知



りてとやかくとすべきことなるを、昔のまゝに知らずであるあり、さる人につきそ  
 ひをりては、ゆく末いかゝあらむ、家出すべしと妻のおもひとれるなり、○今按貧  
 しく経てもは貧しく年経てもなり、よの常の事も知らずは、世のさまにうとさを  
 いふ、新釋に家の内の事云々といへるいかゞ、  
 年ころあひなれたる妻、やうく床離れて、つひに尾になりて、姉  
 のさきだちてなりたる處へゆくを、男まことにむつまじき事こ  
 そなかりけれ、今はとてゆくを、いとあはれとおもひけれど、貧し  
 ければ、するわざもなかりけり、

尙聞抄有常が妻の性おもしろからず、かゝる時節を堪忍せずして離るゝをもて  
 知りぬ、平生も有常が心に誠にむつまじとおもはずもありぬべし、臆断やうく  
 は漸々なり、床離れての離別せむとてのもよほしかり、今はとてゆくを、あはれと  
 おもふは人の心なり、六帖ある時は、ありのすさびにかたらはでなくて、人戀  
 しかりけるとよめるも此心よりなり、貧しければするわざもなしとは、尾の装束  
 てうじてやることもえせぬなり、古意するわざもなかりけりは、土佐日記に、かう  
 やうに物もてくる人になほしもあらでいさゝけのわざせさすものもなしとあ

り、新釋とてはなれては床離れてぬる言のものとて、すべて夫妻の中の疎くな  
 る事を、昔はとてはなるとぞいひ、さらひけむ、やうくうとくなりて、つひに尾に  
 なりたるなり、此間にはさまぐの事ありつらむ、省きてかける女なり、道心ま  
 すみてにはあらねど、五十にあまる女なれば、こと人にもあひ難く、姉の尾になり  
 てあるを、たよりに頭おろしてうとへゆくなり、

おもひわびて、ねんごろにあひ語らひける友だちのものと、かう  
 く今はとてまかるを、何事もいさゝかなる事もえせで、つかは  
 すことゝかきておくに、

臆断おもひわびてとは、おもひわまりて業平へいひやるなり、末にある天雲のよ  
 そにもといふ歌、古今の詞書に、業平の朝臣紀有常の女にすみけるをどかけり、  
 古意此おもひわびて云々てふを、奥の歌にかけて見るべきなり、さて友だちは、か  
 の昔の男なるべけれど、これを業平朝臣とさだめていふ説はいかにや、古今集  
 に有常の女にすむといへれば、友だちとはいふべからず、新釋おもひわびては、お  
 もひくてもせむかたなくといふ意、かうくは俗語にかやうくといふ意  
 なり、さてかうくよりつかはす事といふまで、友だちのものとにねくる文の詞な



り此文のはじめには尼になりたる故どもかきてあるべきを其詞をかきつらねては、さきにいへると同じやうの事かさなりてうるさければ、記者の心して省きて、かうくといふ詞にかへたるなり、まかるをとは、出で、ゆくをかしこまりていふ文詞なり、つかはすは姉のもとへ妻をつかはすをいふ、ことといふには例の嘆息の意こもれり、

手を折りてあひみし事を數ふれば十といひつゝ四は經にけり

新釋には、手を折りて經にける年を數ふればとあり、今拾穂抄臆斷古意等に從ふ、岡疑抄源氏繪木の卷に手を折りてあひみし事を數ふればこれひとつやは君がうさふしとあり、上の句此物語に同じ、女の離別のさまもあひ似たるか、臆斷手を折りては萬葉第八に、指折とかきて手を折りてよめり、環はゆびまさなり、又たまきともいふは手纏の心なり、しかればゆびをも手といふ故に手を折りとはいへり、十といひつゝ四は經にけりとは四十年あひすみたるなり、これに女の本性も見え、有常がおもひわびたる心もあらはれたり、古意たゞあひなれし年月の久しきをいふにて、今はと別るゝ時のさすがにわはれなる事は知らる、昔の歌は皆しかあり、十といひつゝ四とは、或は十四年或は四十年の意なといふ中に、四十年と

心得たる説多し、こは記者のよめる歌と見えれば、さのみことわりもたゞし難けれど、いで妻といはむには十四年ばかりは久じくもあらず、はじめよかりし時の妻の時うしあひなせしけるにつけて、床ばなれていぬほをとおもふに、四十年とするかたよろしきなり、すでにいへる如く有常承和のはじめ左兵衛大尉に補せられしかば二十歳ばかりならむ、そのころの妻にてありけむ、おほよそのさまかなへり、新釋此歌は指を折りて夫妻の中の經にける年を數ふれば、四十年になれりといふなり、さてかく年經し事なれば今はとていでゆくに、いさゝかなる物も得させぬ、いとくはいなきをわはれとおぼせといふ意、詞の外に見えたり、經にける年、塗本に從ふ、他本にあひみし事をとあるは、繪木の卷に手を折りてあひみし事を云々とある歌の上句と似たる故に、うつす人のふとかの歌の上句をかけるなり、かれはあひ見し折くゝにうさふしのありける事を數ふる意にて、さいへり、此歌をあひ見し事としては四十度あひ見しになりて返歌とあらず、○今按、新釋にふとかの歌の上句をかけるなりとは、いふにもたらぬひびことなり、さてあひ見し事は、あひ見し年といふかた、よきやうなれど、さいひては、あひ見しとし、音ふたつかさなりて、きく苦しければ、あひ見し事といへるにや、



かの友だちこれを見て、いとあはれとおもひて、夜の物までれりてよめる。

庭断夜の物までといへるにて種々を贈ると知られたり、古意夜の物とは被カサなり、尼の晝の装束は専ら調じたらひてやりつること、夜の物までといふ詞にて知らせつ、新釋夜の物までといふは、衣をおくりて事たれるに、貧しき人のうへをおもひやりて、とりうへて夜の物までおくれるなり、までといふはおもひやりのことまやかにいたれるほどを知らせたる文なり、古意に尼の晝の装束云々といはれたるはたがへり、おくれるは装束にあらず、常に着る衣あり、

年だにも十とて四は經にけるをいくたび君をたのみきぬらむ  
拾穂抄此だにもといふに心をつくべし、日を重ねて月となり、月を重ねて年となるに、其年だに四十年經たる中ならばどの義なり、庭断續千載戀四在原業平朝臣年さへ四十年の契なれば、いかにその程に君を頼みけむに、今たち別るゝ心さず悲しからむと、女をたすけてよめる心なり、古意あまた年をなるゝには、一人たち難き女の身の、ゆく末たのめし事も數々ありけむに、今おもはぬぬわかれすらむよとあり、此歌ことわりはよろしけれと、たゞ記者のよめる口つきなり、業平朝臣

の歌とし、後の集に入られしはいかに予や新釋十とては十といひてなり、といひてをついでとてといへること、歌文に多し、たのみきぬらむは、たのみにしきぬらむの意あり、さては一首の意は年だにも十といひて四は經にけるを、まして其間の月日は限もさく多きとあり、其多き月日のうちには、さまざまの事ありて、妻の君のいくたびか君をたのみにしきぬらむといへるなり、さて又それをおもへば物おくらまほしげに、のたまひおこせたるも、ことばりにあはれにうけたまはれば、此物をもまゐらすといふ意、詞の外に見ゆたり、古意にゆく末たのめし事も數々ありけむとやうにいはれたるは、いたくたがへり、たのみにするは、こととあるそのをりくなれば、いくたびといへるなり、

かくいひやりたりければ、  
これやこの天の羽衣うべしてそ君がみけしとたてまつりければ  
宵間抄業平のいろくの衣なぞつかはしたるを、あはれにしかもうれしさのあまりにかくいへり、心はこれや天の羽衣ならむと、まづねはやうにはめて、ことわるなりけり、君が着たる衣なればと自問自答したるなり、庭断着物をも贈られけると見ゆれば、それをさしてこれや此聞ゆる天の羽衣といふものならむ、此世の



物とは見ぬすといふ心なり、あまの羽衣といへるは、尼の爲の衣なれば、うへていへり、むべしこそは諸の字むべとよめり、げにこそといはむが如し、君がみけしと、君より贈はる衣裳なり、日本紀には衣裳をみけしとよみ、萬葉には御衣とかけり、たてまつるは、着るをいふ、車に乗るをもたてまつるといへり、天の羽衣なれば、げにこそ君の贈れる御衣を臣下の若て拜舞するが如くに、着てよろこびけれの心なり、古意これや此聞傳ふる天の羽衣に、予あるらむとまづはめて、うべなるかなこは君が御料とてまゐらせたる衣なればとなり、かくそのおくり物をほむるに、得たる喜はこもれるなり、みけし、萬葉に七夕歌足たまも手たまもゆらに織る機を君がみけしにぬひあへむかもとよめり、たてまつりければ君がみけしの料にとて調じて奉りし物をいふ、新釋これやかのきく傳ふる天の羽衣ならむ、うつくしき此世の物ども見えす、かくよき衣なれば、うべこそ世にすぐれ給へる君が御衣に奉りけれ、われらに賜ふは過分なりといふ心なり、君がみけしにといふ故は、とみの事にて友だちの、我料にありあひたる衣をおくりたればなり、さるを古意に尼の裝束をおくりたるならむといはれたるはたがへり、たてまつりければ、いふは、衣なともよき人には下より調じて奉るものなればなり、昔は男女の常に着る衣は、かよはしても着たりき、さるからに友だちの衣を有常の妻にもおくるなり、此歌の解古意はおはかたよし、臆斷の説はいみじきひがことなり、まづ天の羽衣を尼のための衣なれば、そへていへり、とどけるは、例の歌になき事をつけそへていふ、此人のわろきくせなり、又奉るとは有常のみづから着てよろこぶことなりとていへることども、いたくたぐへり、昔の文にみる奉り御車に奉りなごいへるは、着せ奉り乗せ奉る意にて、貴人のうへにいふ詞なり、みづから衣を着るを奉るといふことやはあるべき、

よろこびにたへて又、

秋や來る露やまがふと思ふまであるは涙のふるにぞありける

臆斷新古今雜上紀有常、人をかなしふる秋の來て袖をしぼるか、露のおさまがふかとおもふばかり、我袖のぬるはよろこびに堪へずして落つる、涙にてありけりとなり、秋や來るといへる、此時夏なりけるにや、古意よろこびに堪へやらで涙の多く落つるをよめり、秋の來て露の深くおくかとおもへば、我よろこびに堪へずして落つる涙に、予ありけるとなり、一二句をかくいふは語をのべてつゞくるのみ、新釋臆斷にとけるにて聞えたり、高尙此段をよみてつらく、ねもへるやう



をこゝにいはいはむとす、夫の貧しむていふかひなきをいとひて家にをらじとする妻をも、今はとて出で、ゆくにはいとあはれとおもひて、あひなれし年月のしるしに物得させむとて、とかくするは、いとく情深くよき人なりかし、かゝるをりには妻のもてる調度やうの物をさへ、事につけつゝ、家にとりとめむとするさぶなものに見せまはし、又貧しくてするわざなくば、さてやむべきを、友だちのものとへかうくゝと文していひやりたるをおもふに、昔は友のまじはりいとむつまじく隔なくして、まけをしみといふこと、露ばかりもなく、さらにくゝうはべをつくるひかざらぬならひに、予ありける、さて又友だちもいとあはれとおもひて、これをだにまゐらせ給へとて、我料に調じたる衣をおくり、うのうへに貧しき人の夜寒からむことをさへおもひやりて、ふすままでとりうへて、いくたび君をたのみさぬらむとあはれをふかめていひやりたるは、はかなき事にも、まめなる事にも、おもひやり多かる人になむ、今やうの心浅き人まねびても及ぶべしやは、かうやうにおもひつゝよますは、物語ふみやむかひはあらじ、

(十七)年ころ音づれざりける人の櫻のさゝりに見に來たりければあるじ、

古意には昔女年ころ音づれざりける人の櫻を見に來たりければとありて、あるじの三字なし、又新釋には昔年ころ云々とあり、今しばらく拾穂抄臆断等に從ふ、明疑抄此段にむかしといふ字なし、かき落したるか、又年ころにて昔をもたせたるか、作者の心いかり難し、臆断此段むかしとなきは落ちたるなるべし、古今には春上に櫻の花の盛に久しくとはざりける人の來たりけるときによみける、よみ人知らずとあり、かれをもてこれをおもふに、あるじといへるは女にはあらず、女ならば女といふべし、下にも女あるじとはいはれたれど、たゞあるじといへることなし、又有常が事よりつゞき、又年ころ音づれぬ女のもとに櫻をのみ見に來るべきにあらねば、かたぐゝたゞ或人のもとなるべし、古意昔女、今あきは語の落ちたるなり、古本によるべし、新釋いづれの本にも年ころとあれども、これハ月ころのかき誤なるべし、年ころにては歌に年にまれなるといへるにかなはず、○今按、新釋に年ころは月ころのかき誤云々といはれたれど、しばしば音づれせざることを年ころに及べる意なるをや、あるじは臆断に女にはあらずとあれど、女なること次の歌の心にて明なり、

あだなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人もまちけり



賦断櫻は散りやすくてあだなりといふ名にこそたて、かくばかり年にまれある  
 人をまらつれば、人よりはあだならずと、久しくとはぬをうらむる心なり、年にま  
 れなるといへるは、古今の詞書よくかゝへり、今年をろ音づれぬといへるは、二と  
 せ三とせのやうにも聞ゆれば、すこしかなはぬにや、古意古今集には春の部に入  
 たらば、まことの戀の意にはあらで、むつまじき男女のたはふれいひかはせるな  
 りけむを、此書には戀にとりなしたり、新釋櫻の花はあだなるうつりやすきもの  
 と名にこそたてれ、あだにあらすして一とせのうちにもまれに來る人ももちて  
 散らでありといへるなり、さてかく今はまれに來る人こそ、かへりてあだなれど  
 うらみたる心はへ詞の外に見えたり、○今按、此歌は櫻によせてよめる戀の歌な  
 り、古意の説はわろし、あだは薄情の意にて、花のうへにては散りやすきをいへり、  
 櫻花は散りやすきものなりといへど、稀に來る人をさへ氣長く待ちて散らであ  
 りたれば、あだなるものとはおもはれず、此櫻よりは、まれにとひ給ふ君こそ、なか  
 くにあだなれとの意をこめたり、  
 かへし、

今日來ずば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見

まじや

賦断此かへしも古今に入れり、今日來たればこそ、ありしなごらの櫻とも見れ、明  
 日は木のもとの雪とふりて、さえずしてはありとも、花とはいかゞ見むとなり、今  
 日きつる故にこそ人も待ちけりとはのたまへ、さらでは明日は心のかはりて其  
 人とも見じとあり、古意今日わが散らぬまに來たればこそ、あれもとはあだもの  
 にしあるからは、もし明日しもとひなば雪の如く散りつゝ、花とは見えむやはと  
 いひて、まけじにあらそふ贈答の常なり、こは業平朝臣の歌にて、上手のかへしと、  
 いにしへよりめで來れり、新釋これ花よりあだなりといはるれど、そこ  
 こそ今日來ずば明日は心かはるべければ、其人とも見えじといふ意をそへたり、  
 ○今按、今日來ずば明日は雪とぞ降りなましとい、花の咲き匂へる今日來ずして、  
 明日來たらば、花は雪の降る如く散るならむとなり、なましは、なむといふに同じ、  
 消えずはありとも、花と見えしやとは、散りたるはまことの雪ならぬば、たとひ消  
 えすにはありとも、花とは見るべきか見るべからずとなり、消えずは消えずに  
 はの意なり、見ましやのやはやはに同じ、さて一首の意は花の我を待ちて散らざ  
 るにはあらで、花さかりなる今日わが來たるなり、もし今日來ずして明日來たら



ば、花は散りて雪の降るが如くあらむ、たとひ消えずにありとも、花とは見るべしや、見るべくもあらずとの意にて、下には今日來すもあらば、おん身もおひく、年よりて、頭に雪の降ることもあるべし、さらむには全く色香は消え失せずとも、花の姿を見るべしや、見るべくもあらねば、花さかりなる今日こそとひたれとの意をこめたり、此歌の詞書に年ごろ云々とあり、前段にも年ごろあひなれたる妻とありて、此年ごろは四十年経にけるをいへり、されば此歌も年のうへをいへるにて、十四段の「あねはの松の人ならば」の類なるべし、白髪を頭の雪といふは、古今集卷上に「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき」後拾遺集雜に「春くれと消えせぬものは年を経て頭につもる雪にぞありける」千載集俳諧に「つらしとてさてはよも我山からす頭は白くなる世なりとも」新古今集神祇に「年経とも越の白山忘れずば頭の雪をわはれとも見よ、續後拾遺集雜上に「年を経て若菜をつむとせしほごに頭の雪も降りにけるかな」とあり、しかるに此物語の註釋にも古今集の註釋にも、此歌を今日來すば明日は心變るべしとやうにいへるは、いかたにぞや、そはうつろふなごいふ詞あるうへのことにて、雪とぞ降りなまし消すえはありとも、なごいふをさる意にいへる例なきやうなり。

(十八)むかじなま心ある女ありけり、男近うありけり、女歌よむ人なりければ、心見むとて、菊の花のうつろへるを折りて、男のもどへやる。

臆断なま心は物のまだよくも熟せずして、はしたなる心なり、下になま宮仕とかけり、源氏になまのの上達部ともいへり、なまこひにといふ詞もかよひて聞ゆ、男近うありけりは、此女は隣に住む女あり、女歌よむ人なりければ、心見むとては、業平は好色の人にて、歌も上手と聞ゆれば、かれこれを心見むとするなり、古意なま心あるとは、かく歌よみがちになまざかしき女をいふ、深き心ある上衆めかしき人かゝらむやは、折りて男のもどへやるは、歌をつけてやるを略せる例、下にもあり、新釋女のかたよりさし出で、歌よみておくりて男の心見るは、げになま心ある女のしわざありかし。

くれなゐに匂ふはいづら白雪の枝もどをよに降るかとも見ゆ、尙聞抄白雪のとは中將の心の色見ぬをいふふり、白色は色の本跡にて、うつろふ色のさき故あり、好色の人と見れば、さもなきといふ心なり、臆断白菊は、後は紅に匂ふものと聞きしを、いづらや、其紅はたゞ雪の枝もたはよに降りかゝりたる



となり、下の心好色の人と聞ゆるはいづらや、其人色ありても見えぬを、なぞか好色の人とはいふ事となり、色とは紅紫赤色の花にも衣にもよせていふ、白きは色のもとにて目にたゞねば、色とせぬ心にて、かくはよめるなり、古意一枝の菊のや紅にうつろふもあるが、白き花も数々あるをもて、紅に匂ふとも又雪の如くも見ゆるをば、いづれに定めて心得べきかと問ふを表にて、下には男のさまを見聞くに、色好めるあだ人ども、はたまめ心ありとも定め難きを含めて答を待つなり、新釋うつろへる白菊は赤き色のまじるものなれば、それにうへておもふ心はいへるなり、一首の意は白菊の花もうつろひては紅に匂ふといふことなるが、それはいづくぞ、たゞ白雪の枝もたわむほかに降るかど見えて、紅の匂へる色は見えぬといへるなり、さて色好む心を開くに、其色ある心はいづくさるけしき見えずといふ意をうへたるあり、少しうつろひたる菊にてぞありけむ、かくいひやるは、かへしにいかにいふとて、其心を見むとするしわざなり、匂ふは色のうつろしく見ゆるをいふ、萬葉集の歌に、つゝ花にはへる君とあるに同じ、いづらは、いづくぞといふ意なり、古意にいづれに定めむと問ふ意にとかれたるはたがへり、土佐日記の歌に「あるものと忘れつゝなほなき人をいづらと問ふぞかなしかりける」とよめるも、いづくぞと問ふ意にて同じ、とををば古事記に折竹さやたけのとをよとをいにと見えたるもたわむ意、又萬葉集には、しらかしの枝もとをいといふ歌の所に、或云枝もたわむとあるにて、いよくしるし、枝もとをいは枝もたわむといふ意なり、

男知らずよみによみける、

くれなゐに匂ふがうへの白菊は折りける人の袖かとも見ゆ

古意には「袖かどぞ見る」新釋には「白雪」は折りける人の袖かどぞ見る」とあり、今拾穂抄臆断等に従ふ、

臆断紅に匂ふも赤は白菊と見ゆるは、紅より匂へる人のよをれる白妙の袖にまがひておぼゆると、こなたの好色によするにはとりあはずして、かなたをほめてありのまゝによみてかへすなり、袖かともといへるは、雪の降れるかど見ゆといへるをよめるあり、このかは、疑ふ詞なるを、或抄に白菊の紅に匂ふは折りたる人の香にこそあれとなりとあるは、袖香と心得られけるなるべし、古今集に「花見つゝ人待つ時は白妙の袖かどのみぢあやまたれける」舌意女の下の情を知らぬ顔して返しせしき新釋おくれるうたの心を知らずよみによめるなれば、さらに



かへしの歌のやうにはなきなり、一首の意はうつろへる白菊にて紅に匂へる色のあるがうへに、白雪も降りたるやうなれば、折りける君が衣のかさねの袖口かとぞ見るといへるなり。

(十九)むかし男宮仕しける女のかたに、御たちなりける人をあひしりたりける、ほどもなくかれにけり、同じ處なれば、女の目には見ゆるものから、男はあるものかともおもひたらず、女

臆断宮仕しける女のかたにといふを、或説に男の宮仕しける女のかたにとついで、染殿の後の御事なりとわれどし、からは女とはいふべからず、たゞしかるべき宮仕する女のかたのこたちなるべし、かれにけりは萬葉に離の字をかけり、昔意此宮仕する女は女御更衣などをさすべく、御たちはうれに仕ふる女房をいふ、さて御とはいにしへはすべて女御御息所などの如き貴き女をいへるを、其後の貴家に仕ふる女をなれていふこととはなりぬ、此後の物語にいふは皆しかり、この意は同じ宮中に仕ふる男、かの御たちにあひつるが、ほどもなくかれたれど、女はえおもひ離れねば、常に目につくを、男は忘れにたれば、ふつに何ともおもはでありぬといふなり、新羅貴人の北の方附の宮仕を男のしたるなり、それ故に同じ

所なればとはいへり、古意臆断の説ともにあつし、御たちはそこにてよろしき女房兼をいへるなり、箒木の巻につかふ人ふる御たちなるとあるも、つかふ人の中に、すこしよろしき女房を御たちといへるよしなり。

天雲のよそにも人の成ゆくあさすがに目に見ゆるものから、此歌古今集戀五に業平朝臣として入りたり、其詞書に業平の朝臣紀の有常あひすめにすみけるを恨むる事ありて、しばしの間晝は来て夕さりはかへりのみしければ、よみてつかはしけるとあり、天雲のよそその枕詞なるを、下までうけてよめり、一首の意は、君は近ごろ天雲のやうに、いとよそくしうなり給へるかな、さすがに目には見えながらとなり、なりゆくかのかはかなに同じ、  
とよめりければ、男あへし。

天雲のよそにのみしてふること、わが居る山の風はやみなり、古今集には、ゆきかへり空にのみしてとあり、女の歌に男を天雲にたとへたれば、やがてそをうけて、かくよそにのみして月日を経ることは、わが居るべき山の風はげしきが故なりといひて、下には他にかよふ人あまたあるやうなれば、とよまり難しとの意をそへたり、ふることは月日を経ることなり、わが居る山は女を山



にたどへたり、風はやみは風早きによりてなり、他男あるをいふ、  
 藤原後撰集に「白雲のゆくべき山も定まらず思ふかたにも風はよせなむ」これは  
 今の歌をとれるにや、拾遺集に「白雲のかゝるそらごとする人を山のふもとによ  
 せてけるかな」古歌あまぐもを雨雲と心得るはわるし、前の歌は天雲てふ冠言を  
 下までかよはせて詞をなしたるを、これには其雲を詞としてあげつらひよみた  
 るなり、又古今にはゆきかへりとのみいひて、天雲のとおかぬは贈れる歌をうけ  
 て略せり、すべていにしへは心をのみ専らよむ故に、しか贈れる歌の詞にゆづり  
 ても、又端の詞なをにゆづりて、それがうへをよむなり、  
 とよめりけるは、又男ある人となむいひける、

返歌の註なり、古今集に恨むる事ありて云々とは、此事なるべし、

(二十)昔男大和にある女を見て、よばひてあひにけり、さてほを經  
 て、宮仕する人なりければ、歸り來る道に、やよひばかりに、かへで  
 のもみちのいとおもゆるきを折りて、女のもとに道よりいひや  
 りける、  
 新釋やまとは、奈良の京わたりをさしていへるなり、此物語は今京のはじめ

のはせにありつる事を書きけるよしなれば、其心ばへにて見るべし、今の京のは  
 じめの人は、久しう住みなれし奈良故に、やからうから、さらでも親しき人ありて、  
 かしこへは、をりくりにゆきかよふこと絶えざるべし、さるからにかやうの事も  
 あるなり、ほを經ては歸り來るといふ詞へつゞく意なり、其間の詞は歸り來る故  
 をことわれるにて、ひとつの文法なり、かへでの木の事、和名抄に鶏冠木加倍天乃  
 木雞頭樹加比留提乃木とあれども、此ふたつは同じ木にて、葉のかたち、かへるの  
 手に似たる故の名にて、かへではかへるを省きていへるなり、さて春の頃もみ  
 ぢとは、芽の紅なるをいへり、いとおもゆるきといふは、かへでの木は種々ありて  
 芽の色も薄く濃き、いろくあれば、其中にすやれたるをいふあり、古歌かへての  
 もみぢは、若葉の紅なるをいふべし、後拾遺雜に、太政大臣かれくになりて四月  
 ばかりに、ゆみのもみぢを見ては、み侍りける、藤原兼平朝臣の母、住む人のかれ  
 ゆく宿は時わかず、草木も秋の色に、あわりける、これも四月なれば、若葉の紅なる  
 をいふなるべし、

君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋の紅葉しにけれ

此歌玉葉集戀四に業平朝臣とあり、おん身の爲にとおもひて折れる此の枝は、た



ん身の心に秋あるをしめすにや、春ながら紅葉したりとなり、古意君が心に我をわきてふことあれば、御爲にとて折りたる枝すらも、うつろふ色の侍るよとよめるなり、新釋師説に此歌の意は、君にわが心ざしのふかきにかなひて、春ながらも秋の如く色深く染たりといふ意なるべし、注をみに秋といふ言になづみて、心のうつろふ事に心得たるはいかゞ、さていかへしの歌めづらしげなし、又女の心を疑ふべきよしも上の詞に見ゆすといはれき、此説いとよし、○今按新釋の説もさることながら、かくては返歌にかなはぬやうなり、

とてやりたりければ、返事は京につきてなむ、もてきたりける、

いつのまにうつろふ色のつきぬらむ君が里には春なかるらし  
古意かたみにいひつのは贈答の常なり、春なかるらしてふに、君が方にこる秋のわるならめと知らせたり、新釋此歌は男の心ざしの深きをかへての若葉の色こきによろへて、いひおこせたるをさし、知らぬ顔して、かくこるどのたまひおこせたるは、御心のうつろひかはれるよしにやあらむ、こもとはては、さやうの心とは見えざりき、いつのまにうつろふ色のつきぬらむおやじさよ、君が里には春といふ事なく、秋なる故にこるといへるなり、○今按新釋にさし、知らぬ顔して云

々とは、詞書にも歌にもなきうへ言なり、古意の説をよしとす、

(二十一)昔男女いとかしこくおもひかはして、こと心なかりけり、  
 さるを、いかなる事うありけむ、いさゝかなる事につけて、世の中をうじとおもひて、いでいなむとおもひて、かゝる歌をなむよみて、物にかきつけける、

かしこくはよくといふに同じ、こと心なかりけりは、深くおもひかはして他に心を移すことなき意にて、あたし心なかりけりといふに同じ、世の中は、こゝにては男女二人の中をいふ、いでいなむは女の出で、ゆくなり、

臆断これいひかへて妻とせし女の出で、いにたるやうにかきたれど、此段の終におのがよゝになりければ、うとくなりけりといへるをおもふに、まことに夫婦とさだまりたるにはあらで、かよひける處を出で、いにしなるべし、萬葉集に世の中をうじとおもひて家出せし我や何にかかへりてならむ、新釋物にかきつくと、は女のをる處の壁さうじやうの物に、かきおけるあるべし、出で、いにしあにて、夫の見よかしとするわざなり、さるは恨をいひ残したる歌なればなり、亭子院の帝今はれり居給ひなむとするこゑ、さきでんのかべに、伊勢の御のわ



かゝるれ過ぬひもをしまぬもさしきをといふ歌をかきつけけること、大和物語は見えたり、おもひわたすべし、

出でよいなば心かろしといひやせむ世の有様を人は知らずて

二人の中に恨あるを知らず、わが出でよゆぐを心かろしと世の人はいふならむとなり、世の有様は二人の中をいふ、結句人は知らずて、拾穂抄臆断等には人の知らねばとあり、今古意新釋に従ふ、六帖にも人は知らずてとあり、

古意こは紀の友則の歌なるをとりて、此女の人の知れぬうさに倦みて、家出するはどの心のうち、おはれにとりなしたり、さて心かろしてふ詞をもて、次下の事を作りたるたくみを見るべし、此歌六帖に友則とあり、又一本に業平とあるは例の此物語を實におもへる人の改めつるならむ、業平の風体にあらず、新釋夫婦の中のおりさまのたへがたき事のあるをば、他の人は知らずして、出でていぬるを心かろしとおほかたいたふべし、さてくぐちをしきとかあ、これ皆夫のし給ふわざよと恨をいひ發したるなり、諸注皆此歌の餘意ととさ得ず、とまみおほきに出でよいなばけり、此女かかきおきたるを、けむり心おくべき事もおほえぬを、何れよりてかかよらむといといた

うなきて、いづかたにもとめゆかむと、あどに出でよと見かう見見けれど、いづこをばかりともおほえさりければ、かへり入りて、

此女は此女のどの字をそへて聞くべし、新釋には此男とあり、けしう云々は男のうちおもふさまにて、前にいかなる事かありけむといへる首尾あり、男の身にはおほえさきに、何の恨によりて、かかは出でよいにけむとなり、けしうは怪しうなり、と見かう見見けれどは四段に立ちて見居て見見れとあると、同じ書さまにて、かたようち見るなり、いづこをばかりは、女のゆくへのはかり知られぬをいふ、源氏夕顔の巻に、かくうらなくたゆめてはひかくれなば、いづこをばかりとか我は尋ねむとあり、

古意夫の心にことなることなければ、かく慕ふなり、新釋男はねばえなきはどの事なれば、いさゝかの事なり、けむさるをものうたがひより、ひが心得して腹だちて出でよいぬるなり、

おもふかひなき世なりけり年月をあだに契りて我や住まひし  
長の年月をあだに契りてありしやは、いとまめやかに契りて深く此女をおもひたるを、かかたち去るとは、さてくおもふかひなき世なりけりとなり、あだはま



めのうちらにて薄情の意なり、これを情音にわたといふは仇の意なり、我々のやは  
やはに同じ、これを古注には軽くそへたるやと心得ても、し又我もおだに契りて  
やありけむと、一方に人にどがをきせぬ心にやなといへり、  
といひて、ながめをり、

人はいさおもひやすらむ玉かつら面影にのみいと見えつゝ

此歌新勅撰集戀五によみ人知らずとあり、萬葉集に「人はいさおもひやすらむ玉  
かつらかげに見えつゝ忘れぬか」とあるを少しかへたるなり、人はいさおも  
ひやすらむは出でいにし女の我をおもひやすらむおもはずやあらむいさ知  
らねどもといふ意なり、いさなり、いさ知らずのいさにて、たしかならぬことにいふ  
詞なり、いかにかといはむが如し、これを濁音に「いさ」といふは、いさ行かむいさ  
見むなせの如く、勝ふ意なり、玉かつらは玉を緒に貫きて頭にかけて飾とするも  
のにて、こゝにては女の上をいへり、後撰集秋下に「玉かつらかつら山のも  
みぢ葉はおもかげにのみ見えわたるかな」とあり、いとい見えつゝ、新釋には出で  
ゝ見えつゝとあり、見えつゝは見えつ見えつ幾たびも見ゆるといふ、さて一首の  
意は、出でゆきし女の我をおもひやすらむいさ知らねども、我は忘れ難ければ、お

もかげにのみいと見えつゝなり、

臆断人の心はいさ知らねと、なは我をおもひやすらむおもへばこそ、おもかげに  
のみいと見えつゝなり、一説に人はいさ知らず我は忘れ難ければ、おもかげ  
に見ゆといふ心なりとあるも、さることながら後撰集に伊勢が歌に「日を経ても  
かげに見ゆるは玉かつらつらさながらもたえぬありけり」此歌によるに、我はか  
なたよりおもふ心のかよひくればにやあらむ、おもかげにのみ見ゆといふと  
ず聞ゆる、さればこそ下にねんじわびてにやありけむとて歌はありけれ、古意  
で去りし女の心はいさ知らねども、しやおもひやすらむ、かく面影に見ゆるは  
となり、わが思ふ心より人の面影は見ゆるものながら、歌はをさなくいふこと  
に、人のおもふ故に見ゆといふが、なか／＼おもひ深さが故なり、新釋女はこなた  
をおもひやすらむいさ知らず、我は女のようにひの係にのみ出で、見えつゝ忘ら  
れぬといへるなり、つゝは忘れぬといふ意をいひ残したるなり、女のかくれて  
見ぬれば、係にのみ出で、見えつゝとはいへるなり、臆断古意に女のことなを思  
ふ故に、面影に見ゆるよしにどかれたるはたがへり、さやうなれば人いさを云々  
見えけるとあるべきなり、いさといふ詞にも、つゝといふてにをはにもさらにか



おはす、  
此女いとひとしくありて、ねんじわびで、  
せたる、

おと腹たちて出でゆきしが、久しくなるまゝに後悔の心おこりて、いひおこせたるなり、ねんじわびては、おもひわびてなり、  
今いどて忘るゝ草の種をだに人の心にまかせずもがな

此歌新勅撰集戀五によみ人知らずとあり、今はとては、女の家を出でたるを今は限と男のおもひてなり、忘るゝ草は忘るゝを、わすれ草にいひかけたるなり、わすれ草は萱草にて、これを食へば憂を忘るといへり、文選養生論に萱草忘憂とあり、わすれ草といふより、おもひを忘るゝ意にもいへり、萬葉集に「わすれ草を紐につく香具山のふりにし里を忘れぬおため」古今集に「わすれ草種とらましを迷ふことどのいとかくかたきものど知りせば」六帖に「わすれ草種のかきりははてなむ人の心にまかせざるべく」なを見えたり、一首の意は、今は限とて我身を忘るゝわすれ草の種を男の心に蒔かせたもなしとなり、  
断家を出でたるにのきて、今はとて人の忘るゝ心だにつきそめずもがなの心

を、忘草に蒔せれば、種をだに蒔かせずもがなとはよめり、おふるを、すてに忘れたるにたゞふれば、種を蒔くは忘れらむる心なり、新釋かくわかれては、もとの如くわひ住する事はならずとも、せめて君の忘れ給はぬやうになりとも、せまはしといへるなり、それをわすれ草にてしたてゝ種蒔くなといひたるにて、いうにをかしきなり、だには俗語になりとも、いふ意なり、此歌はいづれの注も皆むげにあしくわあらねど、だにの意をとき得ずしておるそかなり、○今按、此歌のおもひわびて、男の心を知らむとて贈れるなり、新釋にもとの如くわひ住するなどいへる、えうなきそへ言なり、又だには俗語になら、いふ意なりとある、猶わたらぬやうなり、だけなりとも、いふことだけありとも、なといふ意なり、  
かへし、

忘草植うとだに聞くものならは思ひけりとは知りもしなまこ

此歌後撰集戀五に業平朝臣とあり、忘草植うとだには我心に忘草を植うといふとだけなりとの意思、思ひけりはおん身を思ひけりといふ意なるを、或註には今まで、おもひけりどやうにとけり、かゝては今まではおもひたれど、今より、おはぬ意となりて、この歌の意にたがへり、かくとけるはけりを過去にのみいふ



詞と心得たる誤なるべしけりは過去のみならず物をたしかにいふにも用ふるなり今や來にけるのけるは今とあれば過去とはいひ難からむたしかにいへるにてこのけりも我はたしかに深くおん身をおもひけりといへるなり知りもしなましは知りもすべしといふに同じ一首の意は我心に忘草の種を時かせずもがなといへど其忘草を植うといふことだけなりとも聞くならばおん身をおもひけりといふことを知るべしとなりては贈れる歌につきて我心を知らせたるにていとおもしろき歌なり

臆断忘れむとするは忘れずおもふ心ある故なりさればわが忘草を植うと聞かばおもひけりと知れとなり新釋をなたにはそれがしが心に忘草の種をまかせずもがなといはるれどそれはたがへり忘草を植うるはあしきことならずそれがしは逢はれずともせめてうあたの心に忘草を植うといふことなりともましまほしとやうにさくものならばそなたにもほれがしをおもひけりと知りもしなましといふ意なりかやうに見ればだにといふてにをはもどき得られ又さくものならばといふはさかまほしくおもひていふ詞なるにもよくかなへり臆断にわが忘草を植うと聞かばれもひけりと知れといふ意にとけるは自他のたが

ひにてのみとさひがごととなり知れといふ意を知りもしさまじといふべきかは  
 ◎今按新釋にそれのしは逢はれずとも云々といはれたるはたがへりすべし  
 もひわびといひたせたるをなほ忘草を植うとだに聞かば我をおもひけりと  
 知らむなを男のいふべきかは女のいふべきにじわとにてさへおもふかひさき  
 世なりけり面影にのみいとい見えつゝなとよめるをやだに聞かせたき事い  
 多かれども忘草を植うといふことだけなりとも意ありさくものならばは女  
 のさくならばなり又臆断に知れとあるはわかりやすからしめむむためにおほ  
 らかにいへるなるをや

又やありとまよりけりいひかはして男

ありしまよりは前よりなりけにはまさりてなり萬葉集に勝の字をあてたりいひ  
 かはして臆断古意にいひかよひしてとあり今拾穂抄新釋等に從ふ此段の始に  
 もいとかしこくおもひかはしてとあればいひかはしてとあるべきなり  
 古意をさきに同じ處に住めりならにいひかはせることも侍らぬを今は離れ居  
 て深くいひかよはせばいかいとなり或人女のたち歸りて住めるやうにいへる  
 はわろしといは此間に歸らむや否やさまざまのいはれありてさひに歸るまじ



さことわりになりて此歌は贈れるあるべし新釋ありしよりけにいひかはすと  
 は女はあやまりありし故に男の心をとり男もいさゝかなる事につけても出で  
 ていにし女なれば又さやうの事やあらむと女の心をとるからにありしにまさ  
 りてうはべをつくるひて言よくいひかはすよしなりおもひかはすとはことに  
 して心のへだて出でくるわざなり次なる歌にかけて味ありこゝはまた男の家  
 に女の歸らざるうちの事なり

忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけに物ぞかなしき  
 古意にはわすれむとおもふ心のつくからに云々とあり今拾穂抄臆断新釋等に  
 従ふさて此歌新古今集戀五にふみ人知らずとして入りたり  
 尊聞抄今はおもひかはせどもかねてあさはかにたち出でし人なればあはうた  
 がはしき故にありしよりまさりてかなしきとなり拾穂抄かの出でていにし我  
 に物おもはせし時にもまさりて又見すてられはとおもふが悲しきとなり臆断  
 古今集戀四に題知らずふみ人知らずわすれむとおもふ心のつくからにあり  
 しよ女はわすれむかなしきとあり同じ歌か忘れぬ我を君が心に忘るらむと疑  
 ひて忘草の種を蒔かせずまがはと聞えつるに忘るるには我をおもふは忘の知

られつればわすれむとより物かなしやあはれになむおぼゆるとよめるなり  
 或註に女我をすていなむと人の心のうたがはしきとあるは右に忘れやせむ  
 と女ゆればをよみてよめる心にかなはず古本あはしよりけにひかよはし  
 侍る人いへ男も女も今は離るべき故あるべし臆断抄に今はいか  
 で忘れてしかなてふ心のつくからに人なりて物かなしきとよめられりとなり古  
 今集に「わすれむとおもふ心のつくからにてよ歌をかつく」語をかへて用ひ  
 たが今本に初句を忘るらむとし三の句をうたがひにとありてそれにつきて説  
 せもあれど皆ことわりよろしからず古本よき恐らくは其説を助けむとて歌  
 の句を後になはしたるなるべし此條ことに古歌を用ひたる多しそのかへしは  
 記者のよみて物語とせしなりざるを後の集にとられしはいかに新釋いさゝか  
 なる事につけても出でいにし人なれば又や忘るらむとおもふ心のうたがひ  
 にゆく末たのみ難ければわかれてありし時よりまさりて物かなしといへるな  
 りざるはわい見てはおもひのます故あり○今按新釋の説詞書の所にてはまた  
 男の家に歸らざるうちの事なりといひてこゝにてはすでに歸れるやうにいへ  
 るはいかにや



かへし、  
 中空にたち居る雲のあともなく身のはうなくもなりけり哉  
 新釋にははかなくもなりぬべき哉とあり、今拾穂抄臆斷古意等に從ふ、此歌も新  
 古今集に出でたり、

關疑抄女の我心を觀じてよめる歌なり、我心かるくして、さしもなき事に出で、  
 いにしごさらばそのまゝもなくて、又堪忍もせで、たち歸りたるは雲のあともな  
 く半天にたゞよふ如くなりといへり、臆斷させるふしもなきにうかれ出で、そ  
 のまゝにもなくて、たち歸りしたひなとして、さらにさだめなき我身のありさま  
 を、中空の雲によそへてくゆるなり、古意中空にたち居る雲といふかの家出せしよ  
 り後又いひかよはせしまでの事をいひて、さて終に歸り住むまじきに、雲のたち  
 消えて、あとなきにたどへたり、我身のより所なくありにたるを雲のあともなき  
 てふ同によせてなげきたるなり、かくとくことは右の贈れる歌と、このかへし  
 の意と、甚と違ふ侍り、よりておもふに、前にもいへる如く、一たび家出のすとも、か  
 くばかありしよりけにいひかよはすなほならば、男もなほかひかへさらむ、女  
 もいかに歸らざらむ、ざるをなほかくのみあるは、此贈答の間にさまぐの事を

物しつれど、今は先たち歸りがてなる故のありて、つひにわかればつべう定まれ  
 るうへにて、男もいかに今は忘れむとする歌を贈り、女もかゝるかへしせしなら  
 び、此間の事見る人におもひはからせたるひとの作りざまあり、或説に終にた  
 ち歸りたるといへるは、おるろかにこゝを見たるなり、此中空にてふ歌は記者の  
 よめる故に、いとひつかしき心をこめて作れる例の事なるをや、臆斷夫の疑ひて  
 いへるをうけて、こなたには君をのみたのみまゐらせて、よるべとおもふに、さや  
 うに疑ひて、へだて心し給ひては、君が家にも歸られず、たとへば山にかゝらす中  
 そらにたちつ居つしてたゞよふ雲のあどなく消ゆるやうに、我もよりかゝるか  
 たなくて命消えぬべしといへるあり、身のはかあくなるとは、死ぬることあり、古  
 意臆斷ともに此歌の意詞を、とさ得ず、○今按、古意に終に歸り住むまじきに云々  
 といはれたるいかい、ありしよりけにいひかはしてといひ、次に「おのがよ」にな  
 りにければとあれば、もとの如く家に歸れるやうなり、

とほひひければ、おのがよよになりければ、うとくなりけり、  
 新釋には「おのがよ」になりければとあり、今拾穂抄臆斷古意等に從ふ、  
 尙關抄此詞歌よりつづけて見るべし、歌に身を觀じぬれども、又定心なき事をい



へち、おのがよよとは、又別々の世になりたるなり、阿蘇抄 離別しておのれくが世になるをいふ、阿蘇 おのがよよとは、こと女の夫にさだまり、こと男の妻にさだまるなり、阿蘇 つひに離れても、なほいひおもひつるを、さてのみもあるべからねば、かたみにこと妻こと夫に住みて疎くなれるとなり、新釋 かく夫に疑はるゝはかきしきよしにはいひけれど、さがなき心をえあらためずして、もとのごとく夫婦となりては、又きふに腹たつぐせの出でて、中のうとくなれるよしなり、○今按、とはいひけれどといふに、ひとつになりたれど後に又の意をうへて聞くべし、おのがよよとあるからは、此意こもれり、おのがよよは、男女おのゝ別になるをいふ、後撰集 戀三に、汝のまにあさりするあまもおのがよよかひありとこそおもふべらなれ、同戀五に、笛竹のもとのふるねはかはるともおのがよよにはならずもあらなむ、源氏胡蝶の卷に、ませの中に根深く植ゑし竹の子のおのがよよにやおひわかるべきなぞ見えたり、

(二十三) おのちとはあなくて絶えにける中、なほや忘れざりけむ、女のもよより、

阿蘇抄 絶えたる恨あきおちて絶えたるはあらざる、阿蘇 はかなくしてあ

事もなく絶えたる中なり、古書 はかなき事につきて絶えたるなり、新釋 はかなくといふ詞は、俗語にたしかならぬ、きとせぬといふ意と見て、阿蘇 かたはたがらず、人の死ぬるをはかなくあるといふも、いきてをるは、たしかにきとじたるものに、阿蘇、そのうらなればなり、阿蘇、何といふきとじたる故はなけれど、かたみに恨のつもりて、中の絶えたるを、はかなくして絶えにけるとはいふなり、○今按、いかなくは、はかなくにて、はからざる不幸の事なぞに、いふ詞なり、こゝは間に人の入りて中を隔てたるにやあらむ、

うきながら人をばえしも忘れねば、かつ恨みつゝなほぞ戀しき

此歌新古今集戀五に、み人知らずとあり、うきながらは、男を愛しと思ひながら也、人をばえしも忘れねば、其男をよくも忘れねば、といふ意にて、えしもはよくもといふに同じ、かつ恨みつゝなほぞ戀しきは、愛しとおもふ男あれば、一方には恨みつゝも、なほ一方に戀しとなり、かつは事のふたつにわたれるにいふ詞にて、こゝはうらめしきと、こひしきとの二にわたれり、一首の意は、男を愛しと戀ひながらも、なほよく忘れねば、かたへにはうらみつゝ、かたへには戀しとおもふとなり、



古きうき人しもぞ戀しかるらむとよめる如く、うき人のしかもえ見すてられぬ  
 故に、かたへには恨みながら、丹心にはあだしく、戀しきなり、上下同意ながら詞を  
 かへて上の事を下にていひとくやうによめる一の體なり、新釋のれなく申絶  
 え給ふはうきながら、君の事をこなたにはえわすれねば、うらみつゝやは少戀も  
 くもあつといへるなり、

といへりければ、さればよといひて男

断ればは、男も同じ心にて我もしかおもふといふなり、古き男の心のこと  
 ならぬを、女はかすそめなるよしとおもひなだめかねて絶えたれば、今しかいひ  
 おこせるを見て、さればよとはいへり、○今按古意の説をよしとす、

あひ見では心ひとつを川島の水のながれて絶えしとぞおもふ、

古意には、ひとの心を川島の水を、新釋には、あひは見で心ひとつを云々とあり、今  
 拾穂抄断等に従ふ、さて此歌續後撰集戀四に題知事、業平朝臣とあり、あひ見  
 本は、あひ見とよきはなり、川島云々は、中に島ある川水は、わかれて又あふもの  
 なれば、三人の中も今は川島の水のやうに別れ絶え、後には又あひて中絶えざる  
 終しとなき、又出なき心をか、後事てよを川島に、あひ見けたる、千載集戀四に、君に





のみ下のおもひの川島の水の心は淺からなくに新續古今集戀二にわするなよ  
さすが契を川島のへたつる中の浪は絶ゆともなを見えたり一首の意は、あひ見  
てより、たがひに二なき心をかはしたれば、今川島の水のやうに別るれども、後に  
は又合ひて、二人の中は絶えざるべしとなり、  
臆断あひ見りめて後は、ふたつなき心をたがひにかはすといふ心につけたり、  
川島の水は、こなたかなたにわかるれども、末に又流れ合へば、後をかけて絶えじと  
思ふとよめり、古意今又あひ見てよりは、かたみに同じ心におもひて、此末絶ゆる  
ことあらじといへり、心かはすを川嶋といひかけてより、下を水の詞もていひく  
だせり、且中島ある川水はわかれて又末あふなるを、ことくくたどへたり、例の  
記者の歌にてうるさきまで事をよくみたり、新釋始の如くあひ見ては又よしな  
き事に恨みられて中絶えぬべし、こたみはあひ見せずして、たがひにおもふ心ば  
かりをかはしてありなむ、しかすれば恨みらるゝ事なくて、たとへば中島ある川  
水の如く、一たびはわかれしかども、かく心のひとつにあひて、いひかはすこと、ゆ  
く末長く絶えじと思ふ、恨みられしにこりぬれば、あひ見ることはいなといひ  
やりたるなり、かくつなひくさまにいひやるは戀のならひにありける、○今按、



古意に今又わひ見てよりはとあるはかなはず、新釋にいへる皆たがへり、臆斷の  
説をよしとす、  
をはいひけれど、其夜いにけり、いにしへゆくさきの事どもなど  
いひて、

古意には「といひければ其夜いきてねにけりいにしへの事どもいひて」新釋には  
「とはいひければ其夜いきてねにけり」云々となり、今拾穂抄臆斷等に從ふ、とはい  
ひければ云々は、かくゆく末のあらましをいひやりたれど、女の心のかはらぬを  
さくにたへかねて、其夜ゆきてわひたりとなり、

秋の夜の千夜を一夜にならずらへて八千夜しねばやあく時のあらむ

此歌六帖に結句戀はさめなむとあり、秋の長き夜の千夜を一夜にして八千夜ね  
たらば、あく時あらむとなり、なすらへては、かりにきしてなり、返歌になせりとも、  
といふに同じ、ねばやは願ふ意にあらず、をらばやをらむの類なり、

かへし、

秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りて鳥や鳴きなむ

此歌續古今集戀三によみ人知らずとあり、歌の意明なり、

いにしへよりも、あはれにてなむ、あよひける、

(三十三)むかしのなかわたらひむける人の子ども、井のもとに出  
で、遊びけるを、おとなになりければ、男も女もはぢかはして  
ありければ、男は此女をこそ得めとおもふ、女は此男をとおもひ  
つゝ、親のあはすれども、きかでなむありける、さて此隣の男のも  
とより、かくなむ、

ななかわたらひは田舎にゆきとして世わたり業をするといふ、大和物語に年を  
ろわたらひなともいとわろくて、源氏夕顔の巻に、今年ころなりはひにもたのむ  
所少く、田舎のかよひも思ひかけねば、いと心細ければとあり、はぢかはしては、お  
となになりては、出で、遊ぶを、たがひに耻ぢてありたれども、なり、親のあはすれ  
どもは親の他男にあはせむとすれども、さかざりきとなり、

筒井筒井筒にかけしまろがたけすぎにけらしな妹見ざるまに

井筒のたけに掛けてくらべし我身のたけも、おん身を見ざるまにおひのびて、今  
は井筒よりも高くなりたるやうなりとなり、筒井筒井筒は、みよしの吉野とい  
ふ類にて、たゞ井筒のことなり、井筒は物の井に入らぬために作れる筒をいふ、定



家卿簡井簡井のたるひとけぬまに早くも暮るゝ冬の空かな  
女かへし

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずして誰あぐべき  
わらはどあいつれか長さとくらべこしふりわけ髪も今は肩をすぎぬ君ならず  
して誰か髪あげすべきとなりふりわけ髪は少女のほどふりわけてゆふ髪なり  
萬葉七にをとりらがふりわけ髪をゆふの山雲な隠しそ家のあたり見むあぐべ  
きは髪あげするをいふ萬葉十六に橘のてれる長屋にわがいねしうあむはなり  
は髪あげつらむか竹取物語によきはほどになりぬれば髪あげさたして髪あげさ  
せ裳着すとあり

なとひひくつてつひにほいの如くあひにけりさて年をろ経る  
ほどに女親なくたよりなくなるまゝにもろともにいふかひな  
くてあらむやはとて河内の國高安の郡にいきあよふ所いでき  
にけりさりければこのもとの女あしとおもへるけしきもなく  
て出しやりければ男他心ありてかゝるにやあらむとおもひ疑  
ひて前裁の中に隠れ居て河内へいぬる顔にて見れば此女いと  
よう化粧してうちながめて

たよりなくは親なくなりて田舎わたらひの事絶えたればたよりなくなりぬる  
なりもろともに云々は二人共にたつきなくてやはあるべきとて田舎わたらひ  
をするほどに河内國に通ふ所出来たりとなり

風ふけばおきつ白波たつた山夜半にや君がひとりてゆらむ

此歌古今集雜下によみ人知らずとあり一二の句はたつといはむため序なり  
立田山は路狭く峻しきを君は今夜ひとりにて越え給ふらむと男のうへをおも  
ひやりたるなり

とよみけるをきよて限なくかなことおもひて河内へもいかず  
なりにけりまれくかの高安にきて見れば始こそ心にくよも  
つくりけれ今はうちとけて手づあら飯がひとりて笥子の器物  
にもりけるを見て心うがりていかずなりにけりさりければか  
の女大和のかたを見やりて

心にくよも云々ははじめのほどいゆかしげに化粧してつくりかざりたりとな  
り飯がひは杓子なり



君があたり見つゝををらむ伊駒山雲な隠して雨は降るとも  
 歌の意明なり見つゝををらむのをはぬれてをゆかむのをに同じ、  
 といひて見出すに、あらうじて大和人來むといへり、よろこびて  
 待つに、たびくすぎぬれば、

大和人は、かの男をいふ、すぎぬればは來ずすぎぬればなり、

君來むといひし夜毎にすぎぬれば頼まぬものゝ戀つゝぞふる

頼まぬものゝ云々は、君の詞も、たのみにはならずとおもひながら、なは戀ひつゝ、  
 夕月日を経るとなり、頼まぬものゝは頼まぬものながらの意あり、古今集に「うつ  
 せみの世の人事の繁ければ忘れぬものゝかれぬべらなり」とあり、  
 といひければ、男すまますなりけり、

(三十四)むろし男女かたおなかにすみけり、男宮仕しにて、わか  
 れをしみてゆきにけるまゝに、三とせ來ざりければ、待ちわびた  
 りけるに、いとねんごろに、いひける人に、こよひあはむと契りた  
 りけるに、此男來たりけり、此戸あけ給へど、たゞきけれど、あけで  
 歌をなむよみて、いだしたりける、

契りたりけるは、ねんごろにいひける他男に契りたるなり、此男來たりけりは、宮  
 仕したるもとの男をいふ、

あらたまの年の三とせを待ちわびてたゞこよひこそ新枕すれ

此歌續古今集戀四によみ人知らずとあり、あらたまのは年の枕詞、新枕は新手枕  
 ともいふ、萬葉十一に「若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむにくからかくに」  
 とあり、新に婚するをいふ、  
 臆断後の男はまだ來ねど、すでにこよひあはむと契れば、新枕まつるとよめるな  
 り、うらむ心もあるべし、

といひいだしたりければ、

梓弓まゆみつきゆみ年を経てわがせしがことうるはしみせよ

拾穂抄年を経てわがせしが如く、今の人との中をも、うるはしくせよとなり、かく  
 心うつくしくいへるに感じ耻ぢて、女も慕ふにや、臆断上二句は、かさね詞の類な  
 り、拾遺神樂歌に「弓といへば品をさきものを梓弓まゆみつきゆみ品こそあるらし」  
 これに同じ、わがせしごととはわがうるはしみせしが如くなり、日本紀に善の字  
 をうるはしとよめり、なつかしくする心なり、萬葉集に「たまはこの道の神たちま



ひはせむわがおもふ君をなつかしきみせよ歌の意は三とせもすぐる故に、まぢわ  
 びて、新枕考つるとよみ出したれば、女のことわりに服して、しひてもいはず、此返  
 歌は後の男にいへるなり、弓は男の手にとるものなれば、古歌に女にたとへてよ  
 めること多し、されば今もたとへて此弓は昔我年を経てうるはしくせし弓なれ  
 ば、わぶうるはしみせしが如く、君もうるはしみせよとあつらふるなり、これまこ  
 となる心なり、古歌こは弓をならし神をむかへまつりて、誓をなすこと故に、上に  
 弓をいひて、さてわがなし、神言のうるはしさのしるしを見せ給へど今更に神  
 に祈るなり、このむとく男が女をすてたる如くにして、今俄に來て腹だちて阻言  
 いふは、あしきなり、されどちかひにたがひたれば、女は終に死にたるなり、かくつ  
 くれるを業平朝臣の實事とおもふ人、さてはむくつけければ、いひかへたすけな  
 せせる説々あれど、皆わろし、新釋これと次の歌とは一對の贈答にして、ともには  
 じめ二句は弓をたとへにいへるなり、此歌は弓といへば品なきものをといふ神  
 樂歌を本歌にしてよめるなり、まづ本歌の意よりとくべし、おしこめて弓といへ  
 ば、名に品々はあきものを、こまかにわけていふ時は、梓弓まゆみつきゆみ、品々こ  
 ろあるらしといふ意なり、たとへ歌なるべし、これを取て今の歌の意は、夫婦とい

へば、ひととはりのやうなれども、宮仕に出づるはどのことにて、しなぐのうき  
 事どもをしのびつゝ、年を経て、わがうるはしく中よくせしやうに、君も又後の夫  
 にうるはしくせよといへるなり、さてわが年をうるはしくして、何事も忍び過  
 し、よしをのべて、女の心みじかく他男にあはむと契れるを、深く恨むる意見え  
 たり、上句は品々のうき事ありつる年を経てといふ意を、本歌の詞によりて、弓の  
 品々をとり出で、梓弓まゆみつきゆみ年を経てとはいへるなり、さるは異やう  
 なるいひさまに似たれども、本歌たとへ歌なれば、やがてたとへに用ひたるなり、  
 かくときてこそ、弓の名を三までかさねいへる心も聞ゆ、此歌に女のいたく耻ぢ  
 くやみて、深く慕へるにもかなふべけれ、○今按、上二句いづれもたしかならぬこ  
 とちす、臆断に古歌に女にたとへてよめる多しといひて、其例をしめさるは、い  
 とくちをし、袖中抄に、めおどのなからひを弓にたとへて、弓は引くに従ふものな  
 れば、わが引きし弓の従ひてよりしやうに、又他人にも、引かば従ふべしとよめる  
 か、萬葉集に百合花鬢贈賓客歌、さゆり花ゆりもあはむとおもへばこそ今のま  
 かもうるはしみすれ、此歌のうるはしみすれの詞も、心得あはずべしといへり、な  
 は考ふべきにこそ、



といひて、いなむとしければ、女、

あづさ弓ひけぞひかねどむかしより心は君によりにじものを

此歌續後撰集戀三によみ人知らず、二句ひきみひかれみとあり、我に心をひき給ふにや、ひき給はぬにや、うは知らねども、我は昔より君に心をよするものを見すて、歸り給ふは、いとうらめしとなり、萬葉集に「梓弓末のたつきは知らねども心は君によりにじものを」とあり、あづさ弓は、ひくの枕詞なり、よりにしもの縁語なり、といひければ、男歸りにけり、女いとあなしくて、志りにたちて、れひゆけぞ、えれひつゝあで、清水のある所にふしにけり、そこなりける岩に、およびの血してあきつけける、

しりにたちては日本紀に（ついにたぎ）隨後とあり、清水のある所は、おひゆくまゝに息苦しくなりて水飲まむとてたちより、やがてそこにうちふしたるなり、およびは和名抄に五指を「おほおよび」ひとさしおよびなかのおよび「あなしのおよび」こおよびとあれば、いづれもおよびといふなり、

あひ思はであれぬる人を止めぬ我身は今ぞきえはてぬめる  
我はおもへど、かの人はおもはで離れたるを、と、いめ難くて、我身は今ぞ死あむと

すとなり、あひ思はでは我はおもへど、人はおもはぬをいふ、かれぬるは離れたるなり、めるは、やうなりといふに同じ、さいへるは、まだ消ぬはてぬほごによめる歌なればなり、

とかきて、いたづらになりけり、

いたづらになるは死ぬるをいふ、拾遺集戀五に「あはれともいふべき人はおもはえで身のいたづらになりぬべきかな」とあり、

(二十五)むかし男ありけり、あはじともいはざりける女の、さすが  
なりけるがもとに、いひやりける、

あはじとも云々は、あはじとはいはねども、さすがにあふことをは、かりける女のもとにとなり、

秋の野に笹わけし朝の袖よりもあはでぬる夜ぞひち勝りける

古今集戀三に題知らず、業平朝臣、下句あはで來し夜ぞひちまさりけるとあり、秋の野の笹の中を朝わけゆく袖は、いたく露にぬるゝものなれども、それをわけしより、おもふ人にあはで寝る夜は、なほ袖のぬれまさるとなり、ひちは、ぬるゝをいふ、



色このみなる女かへし、

みるめなき我身を浦と知らねばやかれなであまの足たゆく来る

此歌古今集戀三に題知らず小野小町とあり、

昔聞抄みるめなきとは、此女中將に見えぬ義なり、見えぬは中將に恨むる事おればなり、さればわが見えぬは、そなたのどがにてあれば、我身をうらめしとはおもはで、なぞ足たゆきばなり来るぞといへる心なり、我身とは男の我身あり、拾穂抄海松布なき浦に、わがみめかたちなきをそへてよめり、わがあはぬは、我に何の見るめなきをはいかる故なり、それとは知らで、業平の足たゆきまで來かよひ給ふといふことを、海人は海松布着るものなれば、よせてよめるなり、臆断みるめなきは、見る事のなきを海松布のなきとそへたり、我身をうらめしと知らねばにやとなり、かれなてはかれずしてなり、我を見るめのなきはそなたの心からなるに、我身を恨みずして、おどかれず足たゆくかよひ來るぞとなり、古歌海松布なき浦に見る目なき我身をうらめしとおもふをそへて、さて男をいたづらにみるめ着らむと來る海人にたとへたり、古今集にては女のわが形なぞのわるきまゝに耻ぢてえわはぬを、さとは知らでや、男のかくまで來るがいとほしとよめり、まことに小町

の歌にて、やはしきなり、さるを此文にはなかり、色このみなるてふ詞を加へて、意をいじりかへたり、或説に男の身を女の恨むる事ある故にあはずといへるは、わるし、さらば止にみるめなきとおかむやは、さては詞のとはらぬなり、かつうちみむとのみ人のいふらむといへるは、うらみの詞に浦をそへたれば、詞とこのへり、たゞうらとのみいふにうらみとては詞ならず、よりにて古歌に、さやうにいひそへし例もなきあり、さてうきを浦にそへたるは、後撰集に、おびれてはゆく方もなし、涙川我身のうらや限なるらむ、わたつみとたのめし事もあせぬれば、我身我身のうらは恨むる、これら皆身のうきを浦にうへたり、身のうきとは、女は顔かたちのわるきと、いやしきとをいへり、こゝにとりて贈答に作れりしを心得ぬ人、業平小町にあひしとおもひ、又しかりあるまじければ、古今の作者の誤りしにやなとは、皆まごへる心よりいへる説にて、いふにもたらず、たゞ此文をつくり事と知らば、何の疑もあらじ、後世の人はいかで文見る事のおろかなりけむ、古今集遺鏡初二句の意昔よりとさ得たる人あり、これは春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝといへる類にて、詞を下上にうちかへして心得べき格なり、我身をみるめなき浦と知らねばやといふことなり、みるめなき浦とは、あひ難き身といふ意あり



り浦はたゞみるめによれる詞のみなり、されば我身を恨むとも、うしとも、いひか  
けたるにはあらず、さて後に我身のうらとよめる歌多きは、此歌の詞によれるも  
のあり、新釋あひ難き我身と知り給はねばにや、夜毎に足のたゆきに來り給ふと  
いへるなり、うれをみるめのなき浦に、あまのみるめをかりに來るにたとへたる  
なり、○今按、みるめなきは萬葉集十八に「里人のみるめはづかし」とある類にて、海  
松布なきをそへたり、遠鏡にあひ難き意なりとあれど、さる意にいへる例なきや  
うなり、

(二十六)むらじ男五條わたりなりける女を、え得ずなりけり  
と、わびたりける人の返事に、

女を得ざるやうになりぬる事をきいて、人のとひしに答ふるなり、

おもほえず袖に湊のさわぐのなもろこと船のよりこぼかりに

此歌新古今集戀五によみ人知らずとあり、  
拾穂抄上句は、かのわびてとふらひし人の心のうれしさを、感涙深き心あり、おも  
ひかけず袖のうへに湊のさわぎ侍る、唐船などのよりにしほとにとなり、唐船の  
よりし湊は浪さわげばあり、涙の多きをいふなり、下句より上句へかへりて聞く

べし、臆断もろことし船ともしもいへるは、おもひまらすゆふらはるる心か、新釋唐船  
のよるは大湊にて、こをれ浪さわぐべければ、涙のいみじきよしをいへるなり、

(二十七)むらじ男女のものと一夜いきて、又もいさなりけり  
ば、女の手洗ふ處にぬきすをうちやりて、たらひのあげに見えけ  
るを、みづあら、

古意には「女の母腹だちて、たらひのぬきすをなげやりければ、たらひの水に泣く  
かけのうつりけるを見て」とありて「みづから」の四字なし、新釋には「女の親腹たち  
て手洗ふ所にぬきすをとりてあげ、すてければ、たらひの水に泣くかけの見えけ  
るをみづから」とあり、共に後人の筆加へたるさまあり、ぬきすをうちやりたるは  
女のしたるにて、母にてはあらざるべし、今拾穂抄臆断等に從ふ、ぬきすは竹など  
をあみて作れるにて、こゝは手洗ふ水をほとばしらせじと、盥のうへにわたせる  
なり、うちやりては、わきへうちやりたるなり、

我ばかり物思ふ人は、又もあらじと思へば、水の下にもありけり  
歌の意明なり、古今集に「もとおもひし菊を大澤の池の底にも誰か植ゑけむ」  
ふたつなきものとおもひしを水底に山のはならでいづる月影とあるも似たる



とよむをかの來ざりける男たちきよて  
みなくちに我や見ゆらむ蛙さへ水の下にてもろこゑになく

みなぐちは田へ水をせきいるゝ口にて水口と書く、臆断女の歌にみづからの影をよめるを、男ふれば我や見ゆるならむ物の心知らぬ蛙さへ水の下にありては、ひとり鳴かずもろこゑに鳴けば君にのみ物おもはせて、我はおもはざらむや、もろともにおもへば同じやうに見ゆらむといふ心なり、新釋心なき蛙さへ水の底にて、ひどりは鳴かずもろ聲に鳴くなり、まして我心はそなたにゆきて、君と共に泣くなれば、其我影のたらひの水に見ゆるに、あらむといへるなり、うのたらひの水にといふ意を蛙のことにてしたてたる歌故に、みなぐちとはいへり、たらひの水は、みなぐちの水のたまれるに似たれば、たとへていへるにもあるべし、

(二十八)むあし色てのみなひける女出でよいにければ、

なごてあぐあふてあたまにたりけむ水もらさじとむすびしものを  
此歌下句より上句へかへて聞くべし、深く契りしに、何とてかくあふことのかたくなりにはむとなり、あふては會期に物を荷ふ時用ふるあふと、棒やうのもの

をうへたり、古今集に「人戀ふる事を重荷になひまてあふてなきころわびしかりけれ」とあり、かたみはかたおともいふ、籠の類なり、和名抄に「茶菁加太美神代紀」に無目籠（まなこかご）萬葉集に玉かたまへ、島山の夕露にどあり、さで難きに、茶菁をそへたり、水をむすふといふも、茶菁の緑語なり、後撰集に「うれしげに君がたのめしことのは、かたみにくめる水にぞありける」とあり、

(二十九)むあし春宮の女御の御あだの花の賀にめしあづけられたりけるに、

古意には昔二條の後の春宮のみやすん所と申しける時、花の賀にめしあづけられたりけるに、近衛づかさなりける人（近衛）とあり、今拾穂抄臆断等に従ふ、春宮の女御は、二條の后を申す、貞明親王（後醍醐天皇）、貞觀十一年二月一日、御年二歳にて東宮にたゝせ給ふ、花の賀は花の時あるを、花の賀といひ、紅葉の時あるを紅葉の賀といふ、賀は年賀にて、四十に至る時はじめてするなり、めしあづけられはめし加へらるゝなり、

臆断此賀はいつれの年、いつれの御ためと知らず、一條禪閣御説染殿后四十賀をいどこの女御し給ふなりとありて、いどこの女御は二條后なり、されどもそのこ



る染殿后四十にはすぎさせ給へり、  
花にあらぬなげきはいつもせしるも今日のこよひに似る時はなし

閑雅抄上には御賀の躰をよめり、底には花にあかぬなげきとは、二條の後の御事なり、かゝるをりにもまされぬおもひあることをいへり、新釋花を見わかぬ歎息は、いづもせしかども、今日のこよひの御賀のわざのめでたくおもしろさもへば、花にあかぬなげきの格別なりといへるなり、さてしたには、かの女御を慕ひ参らすれど、およばぬおもひの歎息をほのめかしたるにもあるべし、

(三十一)むあし男はつゝあなりける女のもとに、

はつかなりけるはあふことわづかありけるなり、

あふことは玉の緒ばかりおもほえてつらき心の長く見ゆらむ  
新勅撰集戀五にみ人知らず、下句つらき心は長くもあるかなとあり、玉の緒ばかりは、みじかきをいふ、萬葉集十四にさぬらくは玉の緒ばかり、古今集戀三にあふことは玉の緒ばかり名のたのはよしの、入川の瀧つ瀬のごと、同戀二に死ぬる命いさもやするどこゝろみは玉の緒ばかりあはむといはなむ、後撰集戀一にあふことのかた糸子とは知りながら玉の緒ばかり何によりけむ、拾遺集戀一にぬ

きみだる涙の玉もとまると玉の緒ばかりあはむといはなむなど見えたり、拾遺抄此歌おさへ字なくて、見ゆらむとはねたり、これは物をくらべて、これはかくあるに、それは何とてとふくめてはねたるなり、あふことは、いさゝかなるに、つらき心は何とて長き子との心なり、ひさかたの光のせけき、心から花の涙にそぼちつゝ、などの類なり、

(三十二)むあし宮のうちにて、ある御たちの局の前をわたりける  
に、何のあたにあおもひけむ、よじや草葉よならむさが見むといふ、男

宮のうちには禁中あり、わたりけるはとほるなり、もとかよひける女の局の前なるべし、わたはわたかたきなり、

拾遺抄一説に虫丸の歌に「わすれゆくつらさはいかにか命わらばよしや草葉よならむさが見む、續日本紀にあり、此古歌の詞をいひて、わがわすられし恨をのべのるへるにや云々、新釋我をわすれて何ともおもはぬ男はにくけれど、よしや腹たてずして、草葉のはては霜かるゝやうにならむ男のありさまを見むといへるなり、草葉のしげると見れば、はせなく枯るゝを、人の早く衰ふるにたとへたるなり、



古意に墓の上に草の生ふることにかれたれど、墓といふことなくて、いかで墓上の草とさだめむ、草の生ふるよしならば、草の生ひむといふべし、葉とはいふまじきなり、

罪もなき人をうけへば忘草おのがうへにぞおふといふなる

罪もなき人のうへを祈りのろは、かへりておのふ身にあしきことありぬべしといふとなり、法華經普門品に呪咀諸毒藥所欲害身者令彼觀音力還着於本人うけへばは祈るなり、咀ふなり、神武紀に是夜自祈而寢、萬葉集四に都路を遠みや妹がこのころはうけひてぬれを夢に見ぬ、源氏紅葉の賀に、こきでんあとのうけはしげにのたまふとき、しを此書の眞名本には呪咀とかけり、おふは負ふに生ふをうへたり、

臆断よしや草葉といふを忘草になして、罪なき人をうけへば、かへりてそこにおもひの外に人の忘草のおひむとなり、古意忘草をしもいへるは、陰れぬ我を忘れたりとてうけへるを、ことわるなるべし、新釋忘草のおのがうへにおふとは、人に忘らるゝをいふあり、〇今按、忘草いづれもおぼつかなきことあらず、おもふに、語をへたて、忘草生ふと、枕詞やうたにつけたるなるべし、たやおふといふに同心、

といふをねたむ女もありけり、

かくいひかはすを、何か故あらむとて、ねたむ女もありけりとなり、女のならひなりかし、

(三十二)むろし物いひける女に、年ころありて、

いにしへのしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな  
初二句は、くりかへしといはむための序にて、歌の意は、おひ見し昔にかへすすべもあれかしとなり、いにしへと昔と同じ詞かさなれるやうなれど、いにしへは、しづにのみかゝれり、しづは、いにしへの織物の名にて、賤の意にはあらず、臆断にも、ろこしにも卑賤を布衣といへば、此國にもしづは民の着物とせし故に、衣によりて、いやしきものをしづとはいへるなるべしとあれど、萬葉集十三に「しづ幣を手にとりもちて雄略紀に「しづまきのあぐらにたゝし武烈紀に「御帶のしづはたむすびたれ」など見えて、神にさへさゝげたれば、民の着物とのみ限れるにはあらず、ろれども後にしか定まれるにや、をだまきは苧環にて機織の料とするものあり、いにしへの織物なるしづ機の苧環をくりかへしてふ意なり、古今集雜上に「いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありしものなり」とあり、



といへりけれど、何ともおもはずやありけむ。

かくいひやりたれど、女は何ともおもはざりしやうありとなり。

(三十三)むろし男津の國うはらの原郡にかよひける女、このたびいきては、又は來じとおもへるけしきなれば、男

攝津鬼原郡藍屋の里に業平の領地あること、下に見えたり、いきてはは京へ歸りては、あり、男の京へ歸りては、又かよひ來ざるべしと女のおもひわぶるさまを見て、男のよめるなり。

藍べより満ち來る潮のいやましに君に心をおもひまするな

満ち來る潮のおひくゝに増すが如く、我も來る毎におもひまされば、なほかよふべしとなり、萬葉集四に「藍べよりみちくる潮のいやましにおもふか君が忘れかねつる」同十二に「みなどわらみちくる潮のいやましに戀ひまされを忘れぬかも」新撰萬葉集に「あしまよりみちくる潮のいやましにおもひまさるもわかぬ君かな」

新釋 藍は海べたに生ふるものなれば、磯に潮のみちくるを、藍べよりとはいふなり、このよりは、にといふに同じ、古今集の歌の詞書に山川より花の流れけるをど

あるも、山川にといふ意あり、○今按、こは海べに生ひたる藍べよりといふ意なるべし、潮は沖よりみちくれど、藍のおひたるあたりは、よく其増減を知り得べければ、藍べよりとはいへるなり。

かへし

こもり江におもふ心をいかでよは船さす棹のさとして知るべき

此歌續後撰集戀一によみ人知らずとあり、こもり江は物に隠れて見えぬ江なり、萬葉集に「みつの崎波をかしてみこもり江の」とあり、こゝは人の心の知り難きにたとへたり、君が心の中におもひ給ふ事は、こもり江の隠れて見えぬが如く、いかで我身の知るべきといふ意を、こもり江といふ縁に、船さす棹のさしてとはいへるなり、さしては「都をさしてゆく」の如く、これぞさしてといふ詞なり、新釋におしはかりていふ意ありとあるは、いみじき誤なり。

古意こもり江は萬葉集に「こもり沼の下ゆはこひむまたゆくへなみこもれる小沼の下思になごの草こもりて見えぬをいふなり、されどこは津の國のことにて、且おくれる歌をうけたれば、藍にこもれる江をいふのみ、或説に此歌を草生茂り又ハ木の葉なごに埋れたるをいふとある、こゝにかなはず、いかで詞書とおく



る歌を忘れけむ新釋沼のちひさきが野なほにもあれば、こもり沼は草生茂りて、こもれる沼なるべく、江はみぎはに藍の茂りたればとて、さいふべしやは、こゝは山かけにこもりたる江なるべし。

田舎人のにては、よしやあしや、

下にも田舎人の歌には、あまれりや、たらずやといへり、人のさだめを待つさまあり、

(三十四)むかし男つれなかりける人のもとに、

いへばえに、いへねば胸にさわがれて心ひとつに歎くころあな  
いへばえに、言へば思ふやうならずといふ意なり、諸註にいはむとすればえいはれずといへるは、いとわろし、六帖に、いへばえにいはねば苦し世の中を歎きてのみもつくすべきかな源氏須磨の巻に、中納言の君いへばえにかなしうおもへるさまを人知れずあはれとおぼすとあり、えには萬葉集に不知とあるが如く、得ずにて、こゝはおもふやうにならぬ意あり、歌の意は、言へば思ふやうならず、言はねば胸苦しくて、たゞ心のみ歎き暮すとなり、  
おもなくていへるなるべし。

新釋には「おもひくいていへるなるべし」とあり、臆断たびくつれなきめにもこりず、此歌よみてつかはすをいふなり、自記の詞にや、古意面はぢすべきを、なほ耻ぢずして、かくよみてやれるあらむ、此書の歌の次に添へたる詞ども、いともく心を用ひて書けるものなれば、おほかたに見まじき條あまたあり、源氏にも歌の後に詞を添へて餘情をますこと常なり、今をうつせしものならむ、新釋いへばえにといふせちなる意の歌よみておくるは、一とほりの事にはあらじ、おもひくいていへるあるべし、と男の心の中をおしはかりて記者のいへるなり、他本にはおもなくてとあれど、こゝにかなはず、いくをなくにうつし誤れるなるべし、假字のかたちよく似たり、○今按、おもなくては面目なくてといふに同じ、萬葉集一に「よひにわひてあしたおもなみかくれにか源氏紅葉の賀の巻に」ふりがたり色めくをおもぢのさまやと見給ふも同玉桂の巻に「おもなの人やとすこし笑ひ給ふ」同常夏の巻に「おもなくてかれこれにかき合せたるあむよし」など見えたり、こゝは女のつれなきもてなしに耻ぢて、此歌をよめるなるべしといふ意なり、

(三十五)むあし心にもあらで、絶えたる人のもとに、

玉の緒を沫緒によりて結べれば絶えての後もあはむぞ思ふ